神戸大学 文学部
神戸大学大学院 人文学研究科

2023 年（令和 5 年）度

年 次 報 告 書

神戸大学文学部・大学院人文学研究科 評価委員会編

2024 年（令和 6 年）

目　次

はじめに ・・ⅰ

第１部

Ⅰ．教育（文学部）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

Ⅰ-1. 文学部の教育目的と特徴・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

Ⅰ-2. 教育の実施体制・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4

Ⅰ-3. 教育内容・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11

Ⅰ-4. 教育方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18

Ⅰ-5. 学業の成果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・23

Ⅰ-6. 進路・就職の状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・28

Ⅱ．教育（人文学研究科）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・30

Ⅱ-1. 人文学研究科の教育目的と特徴・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・30

Ⅱ-2. 教育の実施体制・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・34

Ⅱ-3. 教育内容・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・40

Ⅱ-4. 教育方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・50

Ⅱ-5. 学業の成果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・56

Ⅱ-6. 進路・就職の状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・63

Ⅲ．研究（文学部・人文学研究科）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・66

Ⅲ-1. 文学部・人文学研究科の研究目的と特徴・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・66

Ⅲ-2. 研究活動の状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・68

Ⅲ-3. 競争的外部資金の獲得状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・70

第２部

Ⅰ．外部資金による教育研究プログラム等の活動・・・・・・・・・・・・・・・・・・・77

Ⅰ-1. 戦略的事業経費（ミッション実現戦略分）

「人文学推進インスティテュートに係る戦略的事業経費」・・・・・・・・・・・・ 77

Ⅰ-2. 科学研究費補助金基盤研究（S）（研究代表者：奥村弘、課題番号：26220403）
「災害文化形成を担う地域歴史資料学の確立 ― 東日本大震災を踏まえて ―」および
特別推進研究（研究代表者：奥村弘、課題番号：19H04547）「地域歴史資料学を
機軸とした災害列島における地域存続のための地域歴史文化の創成」・・・・・・・・・79

Ⅱ．部局内センター等の活動・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・83
Ⅱ-1. 海港都市研究センター・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・83
Ⅱ-2. 地域連携センター・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・84
Ⅱ-3. 倫理創成プロジェクト・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・91
Ⅱ-4. 人文学推進インスティテュート・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・96
Ⅱ-5. ESD コース（持続可能な開発のための教育コース）・・・・・・・・・・・・・・・97
Ⅱ-6. KOIAS・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・98
Ⅱ-7. 文化交渉学・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・99

Ⅲ．社会貢献・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・101
Ⅲ-1. 公開講座・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・101
Ⅲ-2. 高大連携・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・103

第３部

Ⅰ．外部評価 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・104
Ⅰ-1. 外部評価委員会・・・・ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・104
Ⅰ-2. 外部評価報告書 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・105

は じ め に

大学院人文学研究科長・文学部長
長　坂　一　郎

この報告書は３部構成になっています。第１部は人文学研究科および文学部の教育と研究、第２部は外部資金による教育研究プログラム等の活動と、部局内センターおよびインスティテュートの活動、第３部は外部評価委員による評価です。加えて、各教員の教育・研究・社会貢献等に関わるプロフィールを附しています。

本年度は、第４期中期目標・中期計画期間(令和４年４月～令和１０年３月までの６年間)の２年目の年度に当たります。データの客観性と評価の継続性を維持するため、これまでに毎年出してきた年次報告書の体裁を本年度も大きくは変えず、人文学研究科および文学部の教育研究活動に関する基礎資料を収集して自己評価を行っています。また毎年実施している外部評価でのご指摘に基づき、正確なデータを掲載し、学外者にもわかりやすい記述にすることに努めました。

令和５年度は、新型コロナウイルス感染症がほぼ収束し、教育・研究の両面が通常通りの活動が可能となりました。

現在の人文学研究科・文学部は、哲学（哲学・倫理学)、文学（国文学・中国文学・英米文学・ヨーロッパ文学〔学部ではドイツ文学・フランス文学〕)、史学（日本史学・東洋史学・西洋史学)、知識システム（心理学・言語学・芸術学)、社会文化（社会学・美術史学・地理学・文化資源論〔博士課程後期のみ〕）で構成されています。つまり、「哲・史・文」＋ 知識システム・社会文化という構成になっており、文学部の中核（哲・史・文）と現在社会が求める学問領域（知識システム・社会文化）が併存するという、まさに「人類の叡智の蓄積としての古典と現代的問題を結びつけて考える」(ディプロマ・ポリシー）教育研究機関となっています。このポリシーと構成の合致、どの分野もその専修名を見れば即座に学問領域がわかるという明快さ、これが文学部の魅力であるとともに強みにもなっています。

また、人文学研究科・文学部では３年前に「人文学推進インスティテュート」を立ち上げました。本インスティテュートは、研究科内の各センターが進めている教育・研究・社会連携を統括し、国内外の大学や大学共同研究機関、自治体や地域社会等との協力関係を推進する異分野共創プラットフォームとして機能させること、および、新たな人文学研究科の共同事業の育成

と発展のための支援を目的としています。設立からこれまで、「雰囲気学」や「文化交渉学」という新たなプロジェクトを立ち上げ、また倫理創成プロジェクトでは ELSI プロジェクトを開始し、年度末に「ELSI ワークショップ：科学技術とデュアルユースを考える」を開催しました。こうした活動を通して、本研究科は積極的に新たな分野に挑戦し、成果を社会に還元しています。

人文学研究科・文学部の教育目的は、人類がこれまで蓄積してきた人間および社会に関する古典的な文献の原理論的研究に関する教育並びにフィールドワークを重視した社会文化の動態的分析に関する教育を行い、新たな社会的規範および文化の形成に寄与する教育研究を実践することです。また、文学部の目標は人類の長い歴史の中で培われてきた豊かな知的遺産に学びつつ、現代世界で生起するさまざまな現象にも新鮮な関心を持ち、両者の相互参照を通じて新しい世界認識の基盤を構築することを目指す「場」となることです。

このような目的・目標を達成するために、従来からの伝統的な学問分野の高い専門性を追求しながら、同時に総合性・応用性も確保するために、上述のインスティテュートをはじめさまざまなプログラムを実施しています。今回の報告書の作成とそれをふまえた評価にもとづいて、現在の教育・研究状況を把握して検証し、課題を解決することによって、人文学研究科・文学部の一層の充実と発展を期したいと考えています。

第１部

Ⅰ．教育（文学部）

Ⅰ-1. 文学部の教育目的と特徴

文学部は、人類の長い歴史の中で培われてきた豊かな知的遺産に学びつつ、現代世界で生起するさまざまな現象にも新鮮な関心を持ち、両者の相互参照を通じて新しい世界認識の基盤を構築することを目指す「場」である。以下に本学部の教育目的、組織構成、教育上の特徴について述べる。

Ⅰ-1-1. 教育目的

1　文学部は、広い知識を授けるとともに、言葉と文化、人間の行動、歴史や社会に関する教育研究を行い、人間文化および現代社会に対する深い教養、専門的知識、柔軟な思考能力、豊かな表現能力を有する人の育成を目的とする。そして、磨かれ鍛えられた能力を十分に生かして学生が積極的に社会に貢献できるようになることを目指している。

2　このような教育目的を達成するために、現行の中期目標では、「「教育憲章」に掲げた、「人間性」、「創造性」、「国際性」および「専門性」を身に付けた個性輝く人材を養成」し、「豊富な研究成果を活かして、社会の変化を先導し、個人と国際社会が進むべき道を切り拓く高度な知識・能力を有する、次世代の研究者をはじめとした多様な人材の養成に努め、教育の更なる高みを目指す」ことを定めている。

3　神戸大学全学のディプロマ･ポリシー（DP）を踏まえ、人材育成の基本となる文学部 DP およびカリキュラム･ポリシー（CP）を平成27年度に作成し、令和3年度に改訂した《資料Ⅰ－1－1・Ⅰ－1－2》。

《資料Ⅰ－１－1：神戸大学文学部ディプロマ・ポリシー（DP）》

神戸大学文学部ディプロマ・ポリシー

神戸大学文学部は、人類の文化的営みの蓄積としての人文学を、古典を通して深く理解するとともに、社会的対話によりそれを実践して行く能力を身につけ、現代社会において活躍できる人材を育成することを目的としている。また、徹底した少人数教育により、個々の学生の好奇心に応え、自ら問題を設定し、解決するスキルを学生に伝授することを目的としている。

この目的を達成するため、以下に示した方針に従って学士の学位を授与する。

学位：学士（文学）

神戸大学のディプロマ・ポリシーにもとづき、文学部は以下に示した方針に従って当該学位を授与する。

・本学部に4年以上在学し、履修要件として定めた所定の単位以上（卒業論文を含む）を習得すること。卒業論文の単位取得のためには、指定の期日までに卒業論文を提出し、卒業論文試験に合格することを要する。
・神戸大学のディプロマ・ポリシーに定める能力に加え、卒業までに、本学部学生が身につけるべき能力を次のとおりとする。

○「人間性」
・人文学に関わる課題について自ら主体的に学び、協働して解決することができる能力
○「創造性」
・人文学の意義と重要性を理解し、複眼的に思考することで、人文学の発展に貢献することができる能力
○「国際性」
・異なる文化によって育まれた多様性を理解・受容し、必要な外国語でコミュニケーションをはかる能力
○「専門性」
・自らの好奇心を学問的に問題化し検証する訓練を積むことを通じて、人文学の幅広い知識を獲得する能力
・人類の知的営みの蓄積である古典を通じた人文学共通の問題・課題についての理解力
・文化・言語・学域の壁を越えた意思疎通および連携を可能にする社会的対話力
・固有の学問的課題を知の普遍的課題に位置づける深い洞察力

《資料Ⅰ－１－２：神戸大学文学部カリキュラム・ポリシー（CP)》

神戸大学文学部カリキュラム・ポリシー

神戸大学のカリキュラム・ポリシーにもとづき、文学部は以下の方針に則りカリキュラムを編成する。

１.「人間性」「創造性」「国際性」を学生に身につけさせるため、すべての学生が履修する共通の科目として、基礎教養科目、総合教養科目、高度教養科目、外国語科目、初年次セミナー、キャリア科目、情報科目、健康・スポーツ科学およびその他必要と認める科目を開設する。

２．人類の文化的営みの蓄積としての人文学を、古典を通して深く理解するとともに、社会的対話により、それを実践することを通じて人文学的素養を涵養し、「専門性」を学生に身につけさせるため、以下の専門科目およびその他必要と認める科目を開設する。

・自らの好奇心を学問的に問題化し検証する訓練を積み、幅広い知識を身につけることができるように初年次セミナー、専門科目基礎科目、高度教養科目を開設する。

・人類共通の叡智の蓄積である古典を通して人文学共通の問題・課題を発見できる理解力を身につけることができるように専門科目基礎科目、専門科目、グローバル科目を開設する。

・文化・言語・学域の壁を越えた意思疎通および連携を可能にする社会的対話力を身につけることができるように専門科目、ESD 科目、グローバル科目を開設する。

・固有の学問的課題を知の普遍的課題に位置づけられる洞察力を身につけることができるように卒業論文、卒業論文関連科目を開設する。

なお、これらの科目は、講義・演習・実習等の授業形態に応じて、アクティブラーニング、体験型学修などを適宜組み合わせて行う。

学修成果の評価は、次の方法で行う。

・講義科目については、筆記試験、レポート、参加度等により、学修目標に即して多元的、包括的な方法で到達度を判定する。

・演習・実験・実習および実技科目については、筆記試験、レポート、参加度、発表内容、実技等により、学修目標に即して多元的、包括的な方法で到達度を判定する。

Ⅰ-1-2. 組織構成

上記の教育目的を実現するために、文学部は《資料Ⅰ－２》のような組織構成をとっている。人文学の古典的な学問領域である哲学、文学、史学を学ぶ３講座と、人間的知識と感性をシステムとして捉える「知識システム」講座、社会文化に関わる問題をフィールドワーク等によって深めていくことを目指す「社会文化」講座を置き、徹底した少人数教育によって専門的能力を陶冶することに重点を置いた教育課程を編成している。

《資料Ⅰ－２：組織構成》

学　科	講　座	専　修
人文学科	哲学	哲学
	文学	国文学、中国文学、英米文学、ドイツ文学、フランス文学
	史学	日本史学、東洋史学、西洋史学
	知識システム	心理学、言語学、芸術学
	社会文化	社会学、美術史学、地理学

Ⅰ-1-3. 教育上の特徴

1　文学部では、① 初年次に大学における人文学の基礎を学び、② それを踏まえて《資料Ⅰ－２》の15専修から1つを選び、2年次からその専修において少人数教育により専門的能力を鍛え、③ 各専修内の複数の専門分野で自身の関心を絞り込み、卒業論文を書きあげる。文学部では特に、学部教育の集大成として卒業論文の作成を重視し、1～2年間の指導期間を設定している。

2　文学部は、少人数教育による課題探究能力の開発を重視している。具体的には、個別の主題を掘り下げる「特殊講義」などのほか、数人から十数人で行う「演習」が専修ごとに豊富に用意されている。「実験」

や、フィールドワークを含む「実習」も同じく少人数で実施される。これらの授業において共通の文献や資料を精読し、さらに自分で選択したテーマについて研究報告を行い、互いに議論をして深め合うことで、学生は各専門の研究姿勢・基礎知識・研究方法および研究倫理等を習得する。それと同時に、自ら課題を発見し、解決する能力を磨く。

3　文学部は、平成23年3月にオックスフォード大学アジア・中東学部（締結時は東洋学部）と学術交流協定を締結し、「神戸オックスフォード日本学プログラム」（略称 KOJSP＝Kobe-Oxford Japanese Studies Program）として、平成24年10月から毎年オックスフォード大学アジア・中東学部で日本学を専攻する2年生全員を受入れている《資料Ⅰ－３》（http://www.lit.kobe-u.ac.jp/graduate/kojsp.html）。これはユニット受入れ型のプログラムであり、文学部とオックスフォード大学アジア・中東学部との間の綿密な連絡・連携のもとに実施されており、派遣元から高い評価を受けるとともに、その交流は全学の取組みにも寄与している《資料Ⅰ－４》。オックスフォード大生は午前中に日本語の授業を受講し、午後は文学部の様々な授業を他の学生とともに受けている。全員が参加する「KOJSP 演習」では、各自が自由に課題を選び、指導教員や学生チューターとともに日本の諸相についての研究を進め、その成果をプログラム修了時の発表会で披露することになっている。「KOJSP 演習」で選んだ課題をオックスフォード大学での卒業論文とする学生も少なくない。彼らの学習・生活面でのサポートを文学部の学生チューターが担うなど、世界最高レベルの学生とともに勉学し、大学生活を送ることで、文学部の日本人学生に対しても大きな影響を与えており、勉学に対する意識を高め、国際的な視野を獲得することに貢献している《資料Ⅰ－５》。平成25年度からはハートフォード・カレッジにて夏季英語講習が神戸大学文学部と共同で実施されており、毎回20名前後の神戸大学生がオックスフォード大学で学んでいる。これらの事業を中心に、文学部ではグローバル教育の一層の活性化を図っている。

《資料Ⅰ－３：神戸オックスフォード日本学プログラム留学生数》

年　度	所属大学名	出身国	奨学金	期　間
令和元～令和5年度	オックスフォード大学（15名）	連合王国（12名） アイルランド（1名） ポーランド（1名） ルーマニア（1名）	JASSO	令和元年10月1日～令和2年8月3日
	オックスフォード大学（7名）	連合王国（5名） デンマーク（1名） ブルガリア（1名）	JASSO （COVID-19の影響により渡日ができていないため支給できず、返還）	令和2年10月1日～令和3年8月10日
	オックスフォード大学（13名）	連合王国（9名） フランス（1名） ポーランド（1名） リトアニア（1名） ルーマニア（1名）	JASSO （COVID-19の影響により2021年3月までに渡日ができていなかったため支給できず、返還）	令和3年10月1日～令和4年8月4日
	オックスフォード大学（12名）	連合王国（11名） 中国（1名）	JASSO	令和4年10月1日～令和5年8月4日
	オックスフォード大学（9名）	連合王国（8名） アイルランド（1名）	JASSO	令和5年10月1日～令和6年8月2日

《資料Ⅰ－４：文学部の主導によって進むオックスフォード大学との交流》

神戸大学 HP に掲載されたニュースから抜粋：

◯ このプログラム（KOJSP）は、オックスフォード大学東洋学部日本語専攻の２年生全員が１年間を神戸大学文学部で学習するという、ユニット受け入れ型のプログラムです。

○（武田廣学長一行、当時）はオックスフォード大学副学長 Louise Richardson 教授を訪問し、オックスフォード大学側から東洋学部長 Ulrike Roesler 教授、日本学科長・元東洋学部長 Bjarke Frellesvig 教授と国際戦略室

のCraig Morley氏が懇談に参加しました。リチャードソン副学長が神戸オックスフォード日本学プログラムによる学生の受入に対して感謝を表明するとともに、オックスフォードと日本の交流事例を紹介しました。また、留学の重要性、日本の学生に留学を勧める方法等、活発な議論が行われました。

○「一行はフレレスビッグ教授とレイネル博士によるハートフォードカレッジのキャンパスツアーに参加しました。フレレスビッグ教授主催のランチミーティングでは神戸オックスフォード博士研究員フェローシップという神戸大学の人文学研究科がオックスフォード大学の若手研究者を受け入れる新しい取組について活発な協議が行われました。この訪問は両機関の強力な関係を再確認する有意義な契機になりました。今後オックスフォード大学との更なる連携が期待されます。」

（平成30年度、参照：http://www.kobe-u.ac.jp/NEWS/info/2018_11_09_02.html）

（以下で随時更新：http://www.lit.kobe-u.ac.jp/graduate/kojsp.html）

《資料Ⅰ－５：KOJSPに関するオックスフォード大学生および本学部チューターの声》

神戸大学文学部HPから抜粋（http://www.lit.kobe-u.ac.jp/let/pdf/0802_LET2020.pdf）：

○ オックスフォード大学生：「このプログラムを通して、日本語の授業に出るだけでなく、日本の学生と一緒に文学部の講義にも参加しています。また、4月から受講している「KOJSP演習」では、「相撲は近代スポーツか」という、自ら選んだ論文テーマに取り組んで自らの研究を進めています。」

○ KOJSPチューター：「留学生と会話をするなかで日本の文化についてはもちろんですが、日本語そのものについて改めて考えることが増えました。自分と同世代の留学生の眼から見た世界に触れることが自分のなかで大きな経験になっていることを日々実感しています。」

（文学部案内パンフレットに最新情報を掲載）

Ⅰ-2. 教育の実施体制

Ⅰ-2-1. 基本的組織の編成

文学部では、学生1人1人の好奇心を、現代の人文学の学問的状況に即して問題化し検証する訓練を積むことで、人間文化に対する幅広い知識と深い洞察力を身につけた社会人および研究者を育成するという目的を達成するために、1学科（人文学科）を設け、その下に学問分野の観点から5大講座を置いている《資料Ⅰ－２》。教育組織の編成については、社会動向および学問動向を勘案した上で専門性に応じた適切な教育を実施するために適宜見直しており、現行の1学科制は平成13年度に3学科（哲学科、史学科、文学科）から再編統合して新たに設置したものである。

教員の配置状況は、《資料Ⅰ－６》および《資料Ⅰ－７》のとおりである。教育の単位となる15の専修にはそれぞれ専任教員が配属され、演習・特殊講義・概論・入門・人文学基礎といった主要な科目を担当している。非常勤講師に担当を依頼している授業は、各専修の専任教員でカバーしきれない分野と、学芸員・教員などの免許・資格に関するものに限定されている。100名（平成28年度以前の入学生は115名）の入学定員に対し専任教員は51名であり、大学設置基準が要求する専任教員数を十分に確保している。

《資料Ⅰ－６：教員の配置状況　令和5年5月1日現在》

学科	収容定員	専任教員数（現員）											助手		非常勤教員数(R5年度)	
		教授		准教授		講師		助教		計						
		男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	総計	男	女	男	女
人文学科	400	17	7	12	3	4	6	1	1	34	17	51	0	0	55	22

※特任教員、兼務教員、専修外の教員を含む。

《資料Ⅰ－７：専修別教員数　令和5年5月1日現在》

専修	教授	准教授	講師	助教	専修	教授	准教授	講師	助教	専修	教授	准教授	講師	助教
哲学	2	1	2	0	フランス文学	1	0	0	0	言語学	2	1	0	0
国文学	1	2	1	0	日本史学	3	0	1	0	芸術学	2	0	1	0
中国文学	1	1	1	0	東洋史学	2	2	0	0	社会学	2	1	1	0
英米文学	2	1	1	1	西洋史学	3	1	0	0	美術史学	1	0	1	0
ドイツ文学	1	1	0	0	心理学	1	2	0	0	地理学	0	2	0	0

※特任教員、兼務教員を含む。

入学者の選抜については、全学的な理念を踏まえながら文学部として求める学生像（アドミッション・ポリシー）を定め《資料Ⅰ－８》、大学入試センター試験（令和3年度より大学入学共通テスト）利用による基礎学力判断の後、個別学力試験では「国語」「外国語」「数学」（前期）、「外国語」「小論文」（後期）を課すことにより、理解力、読解力、語学力、問題解決能力、論理的思考力、表現能力などを総合的に判定している。

学生定員と現員の状況（平成29～令和5年度）については《資料Ⅰ－９》、専修別の学生数は《資料Ⅰ－10》の通りである。在籍学生数は毎年学生定員を若干超過しているが、その数は、標準卒業年限を超える学生を含めて学生定員の106～116％であり、おおむね適正範囲であると考える。

《資料Ⅰ－８：求める学生像（アドミッション・ポリシー）》

神戸大学が求める学生像

神戸大学は、世界に開かれた国際都市神戸に立地する大学として、国際的で先端的な研究・教育の拠点になることを目指しています。

これまで人類が築いてきた学問を継承するとともに、不断の努力を傾注して新しい知を創造し、人類社会の発展に貢献しようとする次のような学生を求めています。

１．進取の気性に富み、人間と自然を愛する学生
〔求める要素：思考力・判断力・表現力、主体性・協働性、関心・意欲〕

２．旺盛な学習意欲をもち、新しい課題に積極的に取り組もうとする学生
〔求める要素：知識・技能、主体性・協働性、関心・意欲〕

３．常に視野を広め、主体的に考える姿勢を持った学生
〔求める要素：主体性・協働性、関心・意欲〕

４．コミュニケーション能力を高め、異なる考え方や文化を尊重する学生
〔求める要素：知識・技能、思考力・判断力・表現力、主体性・協働性〕

●入学者選抜の基本方針

以上のような学生を選抜するために、神戸大学のディプロマ・ポリシーおよびカリキュラム・ポリシーを踏まえ、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・協働性」「関心・意欲」を測るため、多面的・総合的な評価による選抜を実施します。

文学部が求める学生像

文学部では、人間がつくり上げてきた文化に対する好奇心を高め、多様な角度から人間存在の深みに光をあてる教育研究を行っています。各自の好奇心を学問的に問題化し検証する訓練を積むことで、人文学の幅広い知識と深い洞察力を身につけた人を育成することを目標にしています。そのために、次のような学生を求めています

●文学部の求める学生像

１．みずみずしい感受性と想像力を持っている学生
〔求める要素：思考力・判断力・表現力、関心・意欲〕

２．言葉や文化、人間の行動、歴史や社会に対する幅広い関心と好奇心を持っている学生
〔求める要素：知識・技能、思考力・判断力・表現力、関心・意欲〕

３．基礎学力、とりわけ論理的思考力、日本語および外国語の読解力・表現力、情報リテラシーをそなえている学生
〔求める要素：知識・技能、思考力・判断力・表現力〕

４．既成の価値観にとらわれることなく、自分で問題を発見し、探求していくことができる学生

〔求める要素：思考力・判断力・表現力、主体性・協働性、関心・意欲〕

※高等学校等で修得しておいてもらいたい内容
「国語」： 文章を読み解く力。的確に表現する力。
「地歴・公民」： 幅広い視野と総合的な知識。様々な社会現象を分析し捉える力。
「数学」： 数学的に思考し、表現する力。
「理科」： 自然を科学的に理解する力。
「英語」： 外国語の読解力と表現力。外国語によるコミュニケーション能力。

●入学者選抜の基本方針
以上のような学生を選抜するために、文学部のディプロマ・ポリシーおよびカリキュラム・ポリシーを踏まえ、以下の選抜を実施し下記の要素を測ります。
一般入試では、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」を測ります。
「志」特別入試では、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・協働性」「関心・意欲」を測ります。
私費外国人（留）学生特別選抜では、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・協働性」「関心・意欲」を測ります。
第3年次編入学試験では、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・協働性」「関心・ 意欲」を測ります。

《資料Ⅰ－９：学生定員（収容定員）と現員の現況：各年度12月1日現在》

学科	年度	収容定員	現員	定員充足率(年)
（人文学科1学科のみ）	平成29年度	445	500	112%
	平成30年度	430	457	106%
	令和元年度	415	473	114%
	令和2年度	400	463	116%
	令和3年度	400	459	115%
	令和4年度	400	455	114%
	令和5年度	400	447	111%

《資料Ⅰ－10：専修別の学生数（令和5年度）》

	2年	3年	4年		2年	3年	4年		2年	3年	4年
哲学	11	6	7	フランス文学	1	1	3	言語学	8	6	8
国文学	12	13	20	日本史学	10	8	12	芸術学	8	8	12
中国文学	2	1	1	東洋史学	5	6	0	社会学	17	18	15
英米文学	9	5	15	西洋史学	1	6	6	美術史学	8	8	6
ドイツ文学	1	2	5	心理学	8	13	12	地理学	6	6	6

Ⅰ-2-2. 教育内容、教育方法の改善に向けた取組み

文学部では、1年次生を対象として、少人数ゼミ、オムニバス形式の講義、専門分野ごとの入門科目を開講しており、専門的知識の修得とともに、広い人文学的な視座の獲得が可能となっている。

教育の実施体制を点検し改善していくため、評価委員会を置き、授業評価アンケートの実施など、教育に関わる評価作業を行うだけでなく、教員の教育方法および技術の向上を図るためにファカルティ・ディベロップメント（以下、「FD」と略称）を開催している。文学部の FD は、平成23年度からは評価委員会が中心となり、教務・学生の2委員会の協力を得て行われている。また、学生による授業評価アンケート、教員相互の授業参観・評価（ピアレビュー）を定期的に実施し、その結果は、FD において評価委員長から報告され、今後のカリキュラム編成や授業方法の改善のために活用するとともに、中期目標の実現に向けた教育課

程の改善が図られている《資料Ⅰ−11》《資料Ⅰ−12》。さらに、毎年度、評価報告書を作成し、独自に外部評価を受け、達成点と改善点を的確に把握し、それを教員・職員間で共有することに努めている《資料Ⅰ−13》。

こうした活動を通して、個々の科目の授業内容を改善することはもちろん、カリキュラム構成や授業方法等の改善も頻繁になされており、たとえば、グローバル化に対応した授業として「グローバル人文学プログラム」に加えて、神戸オックスフォード日本学プログラムで受け入れているオックスフォード大学の学生が受講する授業等も展開されている。

《資料Ⅰ−11：平成31〜令和5年度の FD 実施状況》

開催日	テーマ	参加者数
平成 31 年 4 月 22 日	日本学術振興会特別研究員 DC 申請のための申請書の書き方セミナー	5
平成 31 年 4 月 24 日	オックスフォード大学における文理融合研究：ウェルカム・ユニットを事例として	47
令和元年 7 月 27 日	ピアレビューの実施結果および今後の検討について	49
令和元年 9 月 26 日	科研費セミナー「大型科研費の応募に向けて」	44
令和元年 9 月 29 日	令和元年度文学部および大学院人文学研究科の外部評価	17
令和元年 10 月 2 日	人文学研究科向け科研費若手研究への申請のポイント	9
令和元年 11 月 27 日	Struggles for academic freedom	47
令和 2 年 1 月 22 日	卒業生・修了生アンケートの実施結果について	51
令和 2 年 3 月 5 日	JSPS 特別研究員（学振 DC）の制度概要および獲得に向けた申請書の書き方・準備について	48
令和 2 年 5 月 27 日	Zoom、YouTube、Google Forms を利用したオンデマンド講義の準備について	55
令和 2 年 7 月 29 日	学生アンケートの集計結果について	56
令和 2 年 9 月 2 日	大型科研費応募に向けて	55
令和 2 年 9 月 23 日	ピアレビューの実施結果および今後の検討について	54
令和 2 年 9 月 23 日	対面授業等の実施に係る注意事項について	54
令和 2 年 7 月 13〜17 日	リアルタイムのオンライン講義、オンデマンド形式の講義を含む 8 科目を対象にピアレビューを実施し遠隔授業実施のためのスキルを身につける	37
令和 2 年 10 月 7 日	これまでの研究力強化の取り組みの報告と R3 年度科研費について	53
令和 3 年 3 月 19 日	JSPS 特別研究員（学振 DC）の制度概要および獲得に向けた申請書の書き方・準備について	59
令和 3 年 4 月 28 日	ハイフレックス型授業の実施にあたって	52
令和 3 年 6 月 23 日	ハラスメントの防止に向けて	53
令和 3 年 7 月 28 日	学生アンケート各種の集計結果について	53
令和 3 年 7 月 28 日	科研費セミナー「大型科研費の応募に向けて」	53
令和 3 年 8 月 27 日	ICT を活用した授業形態：実践編	16
令和 3 年 11 月 24 日	神戸大学の存在感向上のためにープレスリリースのお願い	56
令和 4 年 1 月 19 日	2021 年度文学部・人文学研究科ピアレビューについて	57

令和４年２月９日	外国語による教育：問題と機会	58
令和４年３月 19 日	JSPS 特別研究員（学振 DC）の制度概要および獲得に向けた申請書の書き方・準備について	54
令和４年５月 25 日	ICT を活用した授業にむけて	54
令和４年６月８日	大型科研費の獲得へ向けて	55
令和４年７月 27 日	KAISER2022 の導入について	53
令和４年９月７日	2022 年度ピアレビューの結果報告と分析	48
令和４年 12 月 21 日	各種学生アンケート集計結果についての分析	55
令和５年６月 14 日	2022 年度後期の「授業振り返りアンケート」について	52
令和５年６月 28 日	科研費の申請に向けて　－申請書の書き方－ 基盤研究Ｂ、Ｃの対策	54
令和５年 11 月 15 日	令和５年度ピアレヴューについて（報告）	55
令和５年 12 月 20 日	神戸大学の広報サービス等について	58
令和５年 12 月 20 日	Short Introduction to the Philosophical and Atmospherological Research at　Rome Tor Vergata University	58

《資料Ⅰ-12：令和5年度 ピアレビュー実施結果　抜粋》

(1) 実施期間
令和5年7月24日(月)～28日(金)

(2) 参観の対象とした授業について
参観対象の授業総数：8

講座入門および人文学導入演習：6
→ 文学部のカリキュラムにおいて重要かつ特色ある初年次教育・グローバル科目を対象に対面で実施。
→ 講義の参観とは異なる独自の意義があるとの判断から、演習科目も対象とした。

グローバル人文学専門英語：2
→ 専門性の高い外国語教育を重視する観点から。

(3) 参観レポート提出者 28名　　※ 50%の提出率（全教員数：51名）

(4) 授業参観レポートの集計結果
1. 授業改善上、参考になった項目（複数回答）

説明の仕方　15
配布資料・板書などの視覚資料　21
学生とのインタラクション　12
TAの使い方　1

2. 自由記述の主な内容（特に参考になった点）
＜入門講義＞
・芸術学とはいかなる学問なのか、意表をつくテーマを選び、そのうえで豊富かつ学生の興味を惹くような素材を使ってひとつの例を実践してみせる授業でとても面白かった。成功例を見せるだけでなく、研究の難しい点

や迷走する様、失敗する可能性なども示唆していて、なかなか良い授業でした。

・教室も大きく、パワーポイントの字が小さくて後ろからでは見にくいであろうことを考慮して、資料がプリントで配布されていたのは、よかった。

・配布資料（紙媒体）が充実しているため、学生が聞き漏らした部分も資料を遡って確認でき、良いと思いました。また、動画資料や音楽資料などを活用することで、配布資料の情報の補足が出来たり、学生の関心度を高めることが出来ているように思いました。自身の授業でも取り入れてみようと思いました。

・音声資料を多用した興味深い授業だった。学生も集中して耳を傾けていた。

・資料が豊富で、興味深く拝聴しました。身近なテーマから、さまざまなメディアにおける表象を通して、抽象的議論に至るという構成も参考になりました。

・配布資料が大変充実しているうえに授業の流れにそって丁寧にまとめられており、初学者向けの授業資料としては好ましいと思った。

・自分の研究内容の一部を紹介するという内容の授業であり、いわゆる初学者向けに噛み砕かれた内容よりも奥行が感じられ、興味をそそられた。

・終始、学生にアピールするような言葉を選んで話されており、全体として親しみやすい雰囲気があった。

・配布資料も多く、テーマも身近なテーマにみえて実は高度で、入門で講ずるには少しもったいないような授業内容だった。

・作品と時代背景とを関連させた説明を行った上で十分な時間を使って作品を構造的に解説されたことで、学生の興味を喚起すると同時に、作品分析の方法を体感的に理解させておられ、授業の構成や作品選定のあり方に感服しました。

・詩という形式の概念規定から、実際の詩を読んで解釈するまで、非常にわかりやすく、勉強になりました。専門家と一緒に素材を読むという経験をすることができて、知的な好奇心がかきたてられました。

・詩という教材が単発の授業には適材だと感じました。小説は分量的に１回の授業だけでその魅力を伝えるのは難しいと思います。授業では複数の詩人の複数の詩を取り上げられていたので、一篇の詩を全体的に俯瞰しつつ様々な観点から詩の魅力を学ぶことができました。また、一回生は、詩という言語にそこまで馴染みのない人が多いと思いますが、授業冒頭で、言葉それ時代が目的となる詩の性質について大変わかりやすく説明されていて、詩的テクストへのアプローチをしやすくなったように思います。スクリーンにテクストを表示して、その場で赤ペンで書き込みしながらの解説が、躍動感があり、詩のテクストが持つダイナミズムが可視化されて伝わってきて大変興味深かったです。ありがとうございました。・初学者向けに、詩を読む楽しさ、奥深さを、わかりやすく説明されていました。教材となる詩の選び方にも工夫がありました。「入門」にふさわしい授業であったと思います。

・発表に対する質問が次々と出ていてうらやましかった。素材の選び方や授業の雰囲気など、様々な要素がありそうだ。

・当日、器機トラブルもあったが、配布資料と話力で巧みに話を進めていらした。話す内容、資料、器材などを何段構えかで準備しておくことが大事だと改めて感じた。

・教員の研究内容を、１回生向けに噛み砕いた内容であったが、内容の難易度が適度で、私たちが聴いても十分に引き込まれた。（仕事で途中で抜けようかと思っていたのですが、最後まで聞いてしまいました）

・インターネットやZOOMを活用した対面授業であったが、受講生各自がリアルタイムで調べて共有をはかり、それを踏まえてさらに議論が展開できる可能性があり、授業方法として参考となった。
・学生が積極的に発言しているのがよかった。
・学生たちの反応に注意しながら、ときに雑談を交えて進められる印象的な授業でした。
・パワーポイントに関連するフリー素材を入れるなど学生が視覚で楽しめる工夫をしていた。
・一回に講義でかならず一度は学生を笑わせるという課題を自らに課し、それを公表しつつ、実行しているところすごい。
・学生を楽しませようとする工夫と努力を見習いたい。
・親しげな語り口で身近な例を引き合いに出しつつ本格的な議論へと展開していく内容であり、学生も興味をもって受講できていたのではないかと感じました。
・まず、復習のスライドから授業が始まり、広義の道徳及び狭義の道徳をご説明された上で、選択についての話に移られました。ゴーギャンにおける家族と芸術の選択をわかりやすくマンションの一室を購入する例や実体験のエピソードを交えながら進められてゆく姿が大変参考になりました。古典のロバの例、道徳とは何か、選択の動機、選択時の結果の不透明さ等哲学についてきちんと学ぶことが出来る授業だと感じました。学生とのインタラクションの図り方等を是非今後自身の授業でも活用させて頂きたいと考えております。本日はどうもありがとうございました。

＜人文学導入演習＞
・学生が興味を持ちそうな映像をうまく使いながら、パワポでのプレゼンテーションがテンポよく行われ、若手教員らしいよい授業だったと思います。
・１回生が関心を持ちそうな身近なトピックや本を巧みに取りこみつつ、うつくしいパワポ資料も駆使しながら、テンポよく講義が進められていた。文学・フィクション鑑賞の本質について考えさせる、（良い意味で）古くて新しい授業であった。
・学生の身近なことを授業の導入にして、動画などを利用して、受講生に適宜、問いかけるなど、学生とのインタラクションの仕方も参考になった。
・学生さんの発表の書式や形式などがしっかりしていて、きちんと学問的フォーマットを教えてらっしゃることがよくわかりました。また、学生さんのコメントに対して、少し誘導的なコメントなどをして思考を促すなど、自発的な学習に導くよう配慮されていることもよくわかりました。

＜グローバル人文学専門英語＞
・当日は学生によるグループ発表の会であったが、参加者・参加者の間で活発な意見が交わされていた。グループ単位での発表という形式も参考になった。
・「グローバル人文学英語」のイメージがわいていなかったが、英語論文を読むことを通して専門科目の一環にするという形式が参考になった。
・発表資料・配布資料が全て電子化されていた。学生からの質問が飛び交い、活発な議論がなされていた。
・グループごとに各自の関心のある先行研究を読み、それを発表するという形式の授業でした。グループメン

バーと協力して資料の作成・発表が行われていたこと、また、質疑応答においても、批判的に研究内容を検討した上での質問もなされており、教員・学生を問わず、相互に学べる形の授業でした。参考にさせていただきます。ありがとうございました。

《資料Ⅰ-13：令和元～令和5年の外部評価実施状況》

実施日	外部評価委員
令和元年9月29日	大国正美（株式会社神戸新聞社取締役） 栄原永遠男（大阪歴史博物館館長）
令和2年9月2日	上田功（名古屋外国語大学外国語学部・教授）
令和3年11月30日	伊藤公雄（京都産業大学・教授、京都大学・大阪大学名誉教授）
令和4年9月16日	大城直樹（明治大学文学部・教授）
令和5年10月11日	山上浩嗣（大阪大学大学院人文学研究科・教授）

Ⅰ-3. 教育内容

Ⅰ-3-1. 教育課程の編成

文学部では、ディプロマ・ポリシーにおいて、学生が卒業までに達成を目指す目標として、特に次の3点を重視している。１）各自の好奇心を学問的に問題化し検証する訓練を積むことで、人文学の幅広い知識と深い洞察力を身につける。２）人文学共通の問題・課題を、人類の知的営みの蓄積である古典を通じて理解する。３）文化・言葉・学域の壁を越えた意思疎通および連携を可能にする社会的対話力を身につける。これらを実現するために、以下のような教育課程を組んでいる。

教育課程は、「専門科目」および「専門科目以外の科目」で構成されている。「専門科目以外の科目」は、「全学共通科目」である基礎・総合・高度教養科目、外国語科目、情報科目、健康・スポーツ科目および「資格免許のための科目」から成り、多様な授業科目を開講するとともに教育職員免許および学芸員資格を取得するために必要な授業科目も提供している。「専門科目」は、講義形式による概論、演習と特殊講義を中心に構成され、多彩な研究領域に対応する多様な内容、形態の授業科目が設けられている。また、英語、ドイツ語、フランス語、イタリア語、中国語、韓国語、古典ギリシア語、ラテン語の外国語科目のほか、専門科目を学ぶにあたって必要となる語学力を涵養する授業も開設されている。以上の形で、幅広い知識と深い洞察力を身につけることができるようにしている。

文学部では、新入生全員を対象とした導入教育として、1年次前期に5つの講座がそれぞれ入門の講義を行うとともに、「人文学導入演習」を複数開講し、今後の教育に必要とされる基本的な視座や研究・学習方法の基礎を実践的に身につけさせている。また、平成28年度より「初年次セミナー」を実施し、神戸大学生および文学部生として身につけておくべき初歩的知識の修得を目指している。さらに、1年次後期には15の専修がそれぞれ開講する「人文学基礎」においてより具体的かつ専門的な研究内容を学ぶ準備となる授業を提供している。文学部の学生は、このようにして人文学の基礎を学び、人文学共通の問題と課題を理解し、それを踏まえて15専修の中から1専修を自ら選び、その専修において、徹底した少人数教育によって専門的能力を陶冶し、さらに、各専修内に複数ある専門分野の中で自身の関心を絞り込んで卒業論文を作成することになる。

「専門科目」の内容としては、例えば、「西洋史演習」では、フランス語論文を精読することで文献読解力の向上を図るとともに、学生間の議論をとおして問題探求能力を高めることを目指している。このような授業は古典理解をとおして人文学的課題を考える良い例であろう。

文学部の教育方針を明確化するため、平成18年度には履修モデルケースを専修毎に作成し提示した。また平成26年度から取り組んできた開講科目すべてに固有のナンバーを割当てる作業（ナンバリング）が完了し、平成28年度以降はそれぞれの学年・専修において必要とされる科目が明確化されている。

I-3-2. 学生や社会からの要請への対応

文学部では、グローバル化が進む現代社会における諸問題に対応し、また社会からの要請に応えるため、教育課程の編成やそれらに配慮した取組みを以下のとおり実践している。

1. 他学部科目の履修

文学部では、他学部の専門科目を文学部開講専門科目の自由選択科目と同等に扱い、卒業要件単位として認めている。学生は、一定の要件のもとで、文学部の専門科目と他学部の専門科目から 30 単位を自由選択科目として修得し、卒業に必要な単位とすることができる。また、文学部、国際人間科学部、経済学部、農学部、工学部および医学部が共同で実施する「神戸大学 ESD コース」（Education for Sustainable Development：持続可能な開発のための教育）が設定されており、関係学部の授業を体系的に履修することができるようになった。ESD コースを修了しようとする学生は修了要件《資料Ⅰ-14》の定めるところに従い、13 単位以上を修得しなければならない。修了が認定された者には修了認定書が授与される。「神戸大学 ESD コース」の授業科目として、文学部では「環境人文学」を開講し、広く環境問題に関わるアクションリサーチ型演習と講義を行っている。持続可能な社会のためには、特に市民・住民によるイニシアチブが重要であることを踏まえ、ボランティア活動や NPO 活動といった事例を積極的に講義で扱っている。（「ESD コース」については、「第２部 Ⅱ-５．ESD コース」を参照。）

《資料Ⅰ-14：ESD コース修了要件　授業科目名、単位数、開講時期および開講学部等

授業科目区分等		授 業 科 目 名	単位数	必要修得単位数	配当年次	開講学部等
基礎科目	Ⅰ群	実践農学入門	2	1	1年次	農学部
		ＥＳＤ基礎（持続可能な社会づくり１）	1		1年次	教養教育院
		ＥＳＤボランティア論	1		2年次	教養教育院
		ＥＳＤ実践論	1		1年次	国際人間科学部
	Ⅱ群	ＥＳＤ論（持続可能な社会づくり２）Ａ	1	2	1年次	教養教育院
		ＥＳＤ論（持続可能な社会づくり２）Ｂ	1		1年次	教養教育院
		ＥＳＤ生涯学習論Ａ	1		1年次	教養教育院
		ＥＳＤ生涯学習論Ｂ	1		1年次	教養教育院
関連科目		環境人文学講義Ⅰ	2	6	2年次	文学部
		環境人文学講義Ⅱ	2		2年次	文学部
		比較政治社会論	2		2年次	国際人間科学部
		スポーツコミュニティ形成論	2		3年次	国際人間科学部
		幼児心理学演習	2		2年次	国際人間科学部
		初等理科論	2		2年次	国際人間科学部
		生活空間計画論	2		2年次	国際人間科学部
		緑地環境論	2		2年次	国際人間科学部
		知覚と行為(知覚・認知心理学)	2		2年次	国際人間科学部
		グローバル開発政策論	2		2年次	国際人間科学部
		生物多様性科学	2		2年次	国際人間科学部
		環境社会学	2		2年次	国際人間科学部
		環境経済学	2		2年次	国際人間科学部
		途上国農村地域開発論	2		2年次	国際人間科学部
		メディア論	2		3年次	国際人間科学部
		ライフコースの心理学(発達心理学)	2		3年次	国際人間科学部
		市民科学教育論	1		1年次	国際人間科学部
		障害共生教育論	2		2年次	国際人間科学部
		コミュニティ・ジェンダー論	2		2年次	国際人間科学部
		国際法Ⅰ	2		2年次	法学部
		国際政治経済	2		2年次	法学部
		環境法	2		3年次	法学部
		社会保障法	2		2年次	法学部
		国際法Ⅱ	2		2年次	法学部

	国際法Ⅲ	2		3年次	法学部
	社会コミュニケーション入門	2		2年次	経済学部
	社会環境会計	2		2年次	経営学部
	人的資源管理	2		2年次	経営学部
	海洋生物学	2		2年次	理学部
	生態科学	2		3年次	理学部
	地域医療学	1		1～3年次	医学部医学科
	地域医療システム学	1		3年次	医学部医学科
	行動科学	1		3年次	医学部医学科
	公衆衛生学	3		3年次	医学部医学科
	国際保健	1		2年次	医学部保健学科
	災害保健	1		3年次	医学部保健学科
	緩和ケア論	1		4年次	医学部保健学科
	リハビリテーション工学・福祉用具学	1		3年次	医学部保健学科
	現代医療と生命倫理	1		1年次	医学部保健学科
	ＩＰＷ概論	1		1年次	医学部保健学科
	公衆衛生学	1		2年次	医学部保健学科
	環境・食品・産業衛生学	1		2年次	医学部保健学科
	小児疾病論	1		2年次	医学部保健学科
	地球環境論	1		1年次	工学部
	水文学	1		3年次	工学部
	河川流域工学	1		3年次	工学部
	国際関係論	1		3年次	工学部
	都市地域計画	2		3年次	工学部
	合意形成論	1		3年次	工学部
	農と植物医科学入門	2		1年次	農学部
	熱帯有用植物学１	1		3年次	農学部
	熱帯有用植物学２	1		3年次	農学部
	樹木学	2		1年次	農学部
	食料生産管理学	2		2年次	農学部
	森林生態学	2		2年次	農学部
	土壌と環境	2		3年次	農学部
	森林保護学	2		3年次	農学部
	食料産業論	2		3年次	農学部
	途上国経済論	2		3年次	農学部
	現代海洋政策概論-１	1		2年次	海洋政策科学部
	現代海洋政策概論-２	1		2年次	海洋政策科学部
	海洋法政策概論-１	1		2年次	海洋政策科学部
	海洋法政策概論-２	1		2年次	海洋政策科学部
	阪神・淡路大震災と都市の安全	1		2年次	教養教育院
	ボランティアと社会貢献活動A	1		1年次	教養教育院
	ボランティアと社会貢献活動B	1		1年次	教養教育院
フィールド演習科目	ＥＳＤ演習Ⅰ（環境人文学）	2	4	2年次	文学部
	ＥＳＤ演習Ⅱ（環境人文学）	2		2年次	文学部
	ＥＳＤ演習Ⅰ１（国際人間科学）	1		2年次	国際人間科学部
	ＥＳＤ演習Ⅰ２（国際人間科学）	1		2年次	国際人間科学部
	ＥＳＤ演習Ⅱ１（国際人間科学）	1		2年次	国際人間科学部
	ＥＳＤ演習Ⅱ２（国際人間科学）	1		2年次	国際人間科学部
	環境法演習	2		3年次	法学部
	国際法演習	2		3年次	法学部
	国際関係論演習	2		3年次	法学部
	ＥＳＤ演習Ⅰ（環境経済学Ⅰ）	2		3年次	経済学部

	ＥＳＤ演習Ⅱ（環境経済学Ⅱ）	2		3年次	経済学部
	初期体験臨床実習	1		1年次	医学部医学科
	早期臨床実習１	1		2年次	医学部医学科
	早期臨床実習２	1		3年次	医学部医学科
	地域社会医学実習	1		4年次	医学部医学科
	ＩＰＷ	1		4年次	医学部医学科
	初期体験実習	1		1年次	医学部保健学科
	ＩＰＷ統合演習	1		4年次	医学部保健学科
	研究ゼミナール	1		2年次	医学部保健学科
	看護研究方法論	1		3年次	医学部保健学科
	寄生虫検査学実習	1		3年次	医学部保健学科
	検査統合演習	1		3年次	医学部保健学科
	日常生活活動学実習	1		2年次	医学部保健学科
	理学療法地域医療実習	1		3年次	医学部保健学科
	基礎作業学実習Ⅰ	1		2年次	医学部保健学科
	基礎作業学実習Ⅱ	1		3年次	医学部保健学科
	兵庫県農業環境論Ａ	1		2年次	農学部
	兵庫県農業環境論Ｂ	1		2年次	農学部
	実践農学	2		2年次	農学部
	ＥＳＤ総合演習	2		3年次	教養教育院
必要修得単位数の合計			13単位以上		

2. 海外協定校との単位互換

文学部は全学協定および部局間協定に基づき海外の大学と単位互換協定を締結している《資料Ⅰ−15》。この制度に基づく令和元年度～令和5年度の実績は、受け入れ39名、派遣12名である。令和元年度～令和5年度の実績の受入・派遣状況詳細についてはそれぞれ《資料Ⅰ−16》、《資料Ⅰ−17》を参照されたい（注：令和2年度および令和3年度は COVID-19の影響により受入・派遣ともに大幅に制限されたため、元年度の実績を通常時の例として示した）。交換留学等によりこれら海外の協定校で取得した単位のうち60単位までを卒業に必要な単位として認定することで、より積極的な留学を支援している。

《資料Ⅰ−15：単位互換協定を締結している海外の大学　令和6年3月現在》

協定校	国名	大学間協定	部局間協定
木浦大学校	大韓民国	○	
成均館大学校	大韓民国	○	
韓国海洋大学校	大韓民国	○	
ソウル国立大学校	大韓民国	○	
高麗大学校	大韓民国	○	
韓国外国語大学校	大韓民国		○
山東大学	中華人民共和国	○	
華東師範大学思勉人文高等研究院	中華人民共和国	○	
中山大学	中華人民共和国	○	
南京大学	中華人民共和国	○	
中国海洋大学	中華人民共和国	○	
復旦大学	中華人民共和国	○	
北京外国語大学	中華人民共和国	○	
武漢大学	中華人民共和国	○	

上海交通大学	中華人民共和国	○	
清華大学	中華人民共和国	○	
江南大学	中華人民共和国		○
鄭州大学	中華人民共和国		○
浙江大学	中華人民共和国		○
香港大学	中華人民共和国		○
東北大学	中華人民共和国		○
国立台湾大学	台湾	○	
国立政治大学	台湾	○	
モンゴル国立大学	モンゴル	○	
西オーストラリア大学	オーストラリア	○	
ウーロンゴン大学	オーストラリア	○	
オーストラリア商船大学	オーストラリア	○	
オタワ大学	カナダ	○	
グラーツ大学	オーストリア	○	
インスブルック大学	オーストリア		○
カレル大学	チェコ	○	
パリ第 2 大学	フランス	○	
パリ第 10 大学	フランス	○	
リヨン高等師範学校	フランス	○	
パリ第 7 大学	フランス	○	
リール大学	フランス	○	
エクス＝マルセイユ大学	フランス	○	
バルセロナ大学	スペイン	○	
バーゼル大学	スイス	○	
バーミンガム大学	連合王国	○	
SOAS ロンドン大学東洋アフリカ研究学院	連合王国	○	
エセックス大学	連合王国	○	
ライデン大学	オランダ	○	
ソフィア大学	ブルガリア	○	
ブリュッセル自由大学	ベルギー	○	
ヴェネツィア大学	イタリア	○	
ボローニャ大学	イタリア	○	
トリノ大学	イタリア	○	
ヤゲウォ大学	ポーランド		○
ニコラウス・コペルニクス大学	ポーランド	○	
ワルシャワ大学	ポーランド		○
キール大学	ドイツ	○	
マルティン・ルター大学ハレ・ヴィッテンベルク	ドイツ	○	
トリーア大学	ドイツ	○	
ハンブルク大学	ドイツ	○	
ダルムシュタット工科大学	ドイツ	○	

ベルリン自由大学	ドイツ	○	
ブカレスト大学	ルーマニア	○	
ディミトリエ・カンテミルキリスト教大学	ルーマニア		○
サンクトペテルブルグ大学	ロシア	○	
エトヴェシュ・ローランド大学	ハンガリー	○	
ブタペルト・コルヴィヌス大学	ハンガリー	○	
プーラ大学	クロアチア		○
ベオグラード大学	セルビア		○

《資料Ⅰ-16：交換留学（受入）実績》

令和 元年度	北京外国語大学	中国		平成31年4月1日～令和2年3月31日
	清華大学	中国	JASSO	平成31年4月1日～令和元年9月30日
	清華大学	中国	JASSO	平成31年4月1日～令和元年9月30日
	バーミンガム大学	連合王国	JASSO	平成31年4月1日～令和元年9月30日
	サンクトペテルブルク大学	ロシア		平成31年4月1日～令和元年9月30日
	木浦大学校	韓国	HUMAP	令和元年10月1日～令和2年9月30日
	中山大学	中国	HUMAP	令和元年10月1日～令和2年9月30日
	グラーツ大学	オーストリア	JASSO	令和元年10月1日～令和2年3月31日
	武漢大学	中国	JASSO	令和元年10月1日～令和2年9月30日
	エクス=マルセイユ大学	フランス	JASSO	令和元年10月1日～令和2年9月30日
	プーラ大学	クロアチア		令和元年10月1日～令和2年3月31日
	プーラ大学	クロアチア		令和元年10月1日～令和2年3月31日
令和 4年度	パリ大学	フランス		令和4年4月1日～令和4年9月30日
	バーミンガム大学	連合王国		令和4年4月1日～令和4年9月30日
	リール大学	フランス		令和4年4月1日～令和4年9月30日
	木浦大学校	韓国		令和4年4月1日～令和5年3月31日
	カレル大学	チェコ		令和4年4月1日～令和5年3月31日
	国立政治大学	台湾		令和4年4月1日～令和5年3月31日
	インスブルック大学	オーストリア		令和4年10月1日～令和5年3月31日
	北京外国語大学	中国	HUMAP	令和4年10月1日～令和5年9月30日
	トリーア大学	ドイツ		令和4年10月1日～令和5年9月30日
	ソフィア大学	ブルガリア		令和4年10月1日～令和5年9月30日
	モンゴル国立大学	モンゴル		令和4年10月1日～令和5年9月30日

令和 5年度	ベオグラード大学	セルビア		令和5年4月1日～令和6年3月31日
	南洋理工大学	シンガポール		令和5年4月1日～令和5年9月30日
	中山大学	中国		令和5年4月1日～令和6年3月31日
	中国海洋大学	中国		令和5年4月1日～令和5年9月30日
	南京大学	中国		令和5年4月1日～令和5年9月30日
	国立政治大学	台湾		令和5年4月1日～令和6年3月31日
	ヤゲウォ大学	ポーランド		令和5年4月1日～令和5年9月30日
	木浦大学校	韓国		令和5年10月1日～令和6年3月31日
	北京外国語大学	中国		令和5年10月1日～令和6年9月30日
	バーミンガム大学	連合王国		令和5年10月1日～令和6年9月30日
	パリ・シテ大学	フランス		令和5年10月1日～令和6年9月30日
	エクス=マルセイユ大学	フランス		令和5年10月1日～令和6年9月30日
	オタワ大学	カナダ		令和5年10月1日～令和6年9月30日
	モンゴル国立大学	モンゴル		令和5年10月1日～令和6年9月30日
	武漢大学	中国		令和5年10月1日～令和6年3月31日
	バーゼル大学	スイス		令和5年10月1日～令和6年3月31日

※ HUMAP：兵庫・アジア太平洋大学間交流ネットワーク、JASSO：日本学生支援機構

《資料Ⅰ-17：交換留学（派遣）実績》

令和 元年度	国立台湾大学	台湾	JASSO	令和元年9月2日～令和2年6月19日
	パリ・ナンテール大学	フランス	JASSO	令和元年9月2日～令和2年6月30日
	パリ・ナンテール大学	フランス	JASSO	令和元年9月2日～令和2年6月30日
	パリ・ディドロ(第7)大学	フランス	JASSO	令和元年9月3日～令和2年6月29日
	エセックス大学	連合王国	JASSO	令和元年9月30日～令和2年6月26日
	トリーア大学	ドイツ		令和元年10月28日～令和2年2月14日
	エクス＝マルセイユ大学	フランス	JASSO	令和2年1月9日～令和3年1月16日
令和 4年度	ニューサウスウェールズ大学	オーストラリア		令和5年1月3日～令和5年5月18日
	グラーツ大学	オーストリア		令和5年2月7日～令和5年6月30日
令和 5年度	ソウル国立大学校	韓国		令和6年3月4日～令和6年12月19日
	トリーア大学	ドイツ		令和6年4月14日～令和7年2月17日
	エクス=マルセイユ大学	フランス		令和6年1月22日～令和6年6月28日

3. グローバル教育への取組み

平成20年度からは、語学科目以外に全てを英語で行う授業科目を開講し、アカデミックかつ実践的な英語能力の涵養を目指している。具体的には、「グローバル英語力教科演習」「グローバル人文学特殊講義」などから成る「グローバル人文学英語科目」を、２単位必修としている。語学学習への多様な支援として、１年生の TOEFL ITP 受験者に対し受験料を補助する制度を設けており、海外留学や国際交流への意識向上を図っている。

文学部では、神戸オックスフォード日本学プログラムなどによって、国際的な場で活躍できる学生を育成してきており、平成24年度から令和4年度まで、文部科学省「グローバル人材育成推進事業（タイプ B 特色型）」で採択された「問題発見型リーダーシップを発揮できるグローバル人材の育成」プログラム（平成26年度より名称変更）に基づき「グローバル人文学プログラム」を実施していた。この教育プログラムは現在終了しているが、目的として掲げた「人文学的課題をグローバルな視点から考察し、日本文化の深い理解を基に異文化との対話を重ねながら、現代社会における諸問題を解決に導いていくリーダーシップとコミュニケーション能力を持った人材」の育成に、相応の成果を上げることができた。このときに得られた知見は少なくなく、オックスフォード大学ハートフォード・カレッジにおける3週間の短期留学プログラムである「オックスフォード夏季プログラム」など、グローバル社会で活躍できる優れた外国語能力とコミュニケーション能力を育成するための授業科目の一部は、現在でも存続している。長年にわたる蓄積の中で、グローバルな視座を有した学生を多く輩出している。

4. 地域との連携による新たな教育研究の開発

地域歴史遺産の活用を図る地域リーダーの養成を目的とした「地域歴史遺産保全活用基礎論Ａ・B」「地域歴史遺産保全活用演習 A・B」を文学部専門科目として開講し、史料の保全と活用を通じて、地域との有機的な交流がなされている。

Ⅰ-4. 教育方法

Ⅰ-4-1. 授業形態の組合せと学習指導法上の工夫

授業形態は、主として講義と演習からなり、令和5年度の開講科目数は講義科目が461（約52%）、演習・実習科目等が416（約47%）となっており、少人数教育を徹底している《資料Ⅰ-18》。

講義科目の次に演習科目が多いのは、人文学の学問の根幹をなす文献読解能力、資料調査分析能力、表現力の鍛錬に重点を置き、研究の集大成として卒業論文を重視する、文学部の教育目的に沿う措置による。演習の質は学生の研究報告によって担保される。そのため、文学部では1年次生を対象とする各講座の入門講義によって人文学の全体像を俯瞰させるとともに、各専修が人文学導入演習や人文学基礎といった少人数教育を開講することによって、人文学の研究方法や調査技法について丁寧な手解きを行い、専門教育への円滑な導入を図っている。演習の授業は同時に研究倫理教育の実践的な場でもあり、盗用などの研究不正について各専修で適切な指導がなされている。

令和5年度は、20の講義、48の演習に対してティーチング・アシスタント（TA）を配置した。授業運営の補助や受講者のための事前学習・事後学習のフォローを適宜担わせ、少人数教育の一助としている《資料Ⅰ-19》。TA に対しては各学期始めにガイダンスを実施し、TA ハンドブック等による指導をしている。また業務終了後には実施報告書を提出してもらい、その分析・検討および TA に対するフィードバックを行っている。

なお平成28年度より、神戸大学では一部の学部・研究科を除いて新たに「2学期クォーター制」を導入し、従来、前期・後期にそれぞれ2単位を付与してきた課程を改変し、1クォーターごとに1単位を付与することになり、文学部にもこれが導入された。ただし、文学部での学修をより充実させるため、「初年次セミナー」等の一部の科目を除き、令和2年度から文学部はセメスター制（教職関連科目はクォーター開講のセメスター的運用）に戻している。

数年間実施していた新型コロナウィルス感染症対応は、段階的に縮小してきた。対面授業の復活などに続き、令和5年度には教室の収容人数など、ほぼコロナ前の水準に戻った。

コロナ禍の中で生じた変化として、遠隔授業が一般化したことが挙げられる。感染症対策としては役目を終えたものだが、教育効果の高い授業方法としての評価も得られ、一部の授業では積極的に遠隔形式が取り入れられている。遠隔授業での単位は60単位まで卒業単位に含められるようにするなど制度の整備も行われ、一つの形式として定着するに至った。

本学では平成31年度より全学的に PC 必携化を進めてきた。学生は各自の PC を学内外で使用し、BEEF・BEEF+など大学の各種 web システムを日常的に利用している。このことによりコロナ禍でも授業を継続することができた反面、PC 本体のみならず、ヘッドセットや自宅の通信環境など、各自の金銭的負担は少なくない。またレポートなどの課題作成がインターネット頼みにならないよう、読解力や文章を書き推敲する力を個人任せにしない対策の必要も感じられる。

《資料Ⅰ-18：令和5年度の授業形態》

授業形態	講義	演習	実習	実技	研究指導
授業数	461	399	17	2	2

《資料Ⅰ-19：令和元～令和5年度 TA の文学部への配置実績》

授業形態	TA 配置人数				
	令和元年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度	令和5年度
講義	37	36	23	21	20
演習	48	42	45	47	48
実習	1	0	0	2	0
実技	0	0	0	0	0

教育を展開する上での指導法の工夫として、文学部ではフィールド型授業も重視している。「地域歴史遺産保全活用演習」では、事前指導で古文書・絵図等の取扱いを学んだ後、実際の地域歴史遺産資料を用いた実習を行うことで、地域遺産の保全と活用に関する実践的な知識・技能を身につけることを目指している《資料Ⅰ-20》。

また、「グローバル・アクティヴ・ラーニング」として、他大学の学生らとともに学外のワークショップに参加し、より開かれた場での討論に参加し、公開成果発表会でプレゼンテーションを行うことで、受講生にさらに積極的な学びの場を提供している《資料Ⅰ-21》

《資料Ⅰ-20:「地域歴史遺産保全活用演習 B」シラバス》

基本情報

科目分類	専門科目	開講年次	1・2・3・4 年
時間割コード	3L472	開講区分	後期
開講科目名	地域歴史遺産保全活用演習 B	曜日・時限等	他 (対面)
成績入力担当	古市　晃	単位数	2.0
授業形態	演習	ナンバリングコード	

担当教員一覧

詳細情報

■授業のテーマ

　地域歴史遺産のうち、とくに古文書・絵図等の地域史料に直接触れ、その解読と整理、さらにその指導方法について学ぶ。これを通じて受講生が、今後、それぞれの職場や居住地などにおいて、地域遺産の保全と　活用に関する実践的・応用的な知識・技能を得られるよう努力する。

■授業の到達目標

古文書等の地域史料の調査に参加し、調査の意味を理解すること。

■授業の概要と計画

対面で実施する。

学内で事前指導をおこない、その後に合宿形式で集中的に古文書の取り扱い方について実習する(学外。1泊2日2月実施予定)。
　事前指導と合宿の日取り等の詳細については、後日掲示板にて発表するので注意しておくこと。なお、合宿経費・交通費等はすべて受講生負担となるので、受講を希望する学生はその旨を了解しておくこと。

■成績評価方法

整理作業への積極的参加など、授業への参加状況（50点）と合宿後のレポート（50点）による。事前指導と合宿日程すべてに参加しなければ、単位は認めないので注意すること。

■成績評価基準

文書の読解や目録の作成に取り組む姿勢で50点分を評価する。読解能力そのものは問わない。さらに、古文書が地域歴史遺産の保全と活用にどのように関係するのかについての考察をレポートで求め、それにより50点分を評価する。

■履修上の注意（関連科目情報）

受講生は、古文書の読解と整理についての基礎的な技能を身に付けていることが望ましく、その上に立ってそれらの指導方法を学ぶように努めてほしい。

■事前・事後学修

事前指導に参加し、注意事項を確認すること。
事後は調査で学んだことをまとめ、地域史料の調査とは何か、その本質を把握するよう努めること。
本学では1単位あたりの学修時間を45時間としています。毎回の授業にあわせて事前学修・事後学修を行ってください。

《資料Ⅰ-21：「グローバル・アクティヴ・ラーニング」シラバス》

基本情報

科目分類	高度教養科目	開講年次	2・3・4 年
時間割コード	1L999	開講区分	前期
開講科目名	ｸﾞﾛｰﾊﾞﾙ・ｱｸﾃｨﾌﾞ・ﾗｰﾆﾝｸﾞ B（高度教養）	曜日・時限等	他 (対面)
成績入力担当	林　由華	単位数	1.0
授業形態	演習	ナンバリングコード	

担当教員一覧

詳細情報

■授業のテーマ

広島で考える「世界のいま」
最近大幅に改修された広島原爆資料館を視察し、留学生や現地大学生とともにワークショップに参加し、現在の世界が直面している核問題などに関する理解を深める。

■授業の到達目標

現在の世界が直面している核問題などに関する考えを深め、それを英語で表現し議論する力を伸ばす。

■授業の概要と計画

[1] 事前説明会
5月18日（木）昼休み（12:30-13:00）、文学部 B135 教室で開催予定。受講生は、特別の理由がない限り必ず出席すること。この事前説明会にて、参加者・履修者をほぼ確定する。
[2] 広島でのアクティブラーニング
6月16日（金）、17日（土）、18日（日）に開催。高速バスで金曜日の夕方出発し、日曜日夜に神戸に戻る予定。6月17日午後は、広島でのワークショップに参加し、現地で様々な活動に取り組む人々と交流・意見交換する。
[3] 事後学習
報告会を、6月22日（木）5限（17:00-18:30)に文学部A棟1階学生ホールにて開催予定。参加者は、各自数分程度の報告を、原則として英語にて行うこと。

■成績評価方法

ワークショップや事前・事後学習などにおける参加度、またセッション後のショートレポートを含め総合的に判断する。

■成績評価基準

議論への貢献：6割
ショート・レポート：4割

■履修上の注意（関連科目情報）

・文学部を中心として全学の学部生を対象とする。参加人数制限があり（文学部 15人、それ以外 5人）、希望者が多い場合には抽選を行う。
・博士前期課程の学生や交換留学生も参加可能だが、単位取得できないことに注意すること。（交換留学生以外の外国人学生の場合は、単位取得可。）

シラバスは、すべてウェブサイト上に公開しており、学修の便宜を図っている。平成29年度からは『履修要項』に履修モデルを掲載し、4年間の学修の流れを可視化している《資料Ⅰ-22》。加えて、入学時、1年次の後期開始時、専修配属決定後の12月に合計3回のガイダンスを実施ことによって、学生が適切な履修計画を立てられるように配慮している。単位が不足する学生に対しては従来から各教員・各専修で適切に対応してきたが、教務学生係および教務委員と連携してより手厚い就学指導を行うことのできる体制を平成27年度に整えている。なお、ここに例示する「文学部履修モデル」は平成30年に改訂されたものであり、令和元年度から適用された。

ハラスメント対策としては、1年生に対して毎年、「初年次セミナー」の一環としてセミナーを開催している。

《資料Ⅰ-22：文学部履修モデル》

※1 外国語科目：外国語第Ⅲは4単位まで修得できる。
※2 「資格免許のための科目」は，自由選択等の卒業要件単位には含まれないので注意すること。
※3 基礎科目のうち，西洋古典文学，英語，ドイツ語，フランス語，イタリア語，中国語，ロシア語，韓国語，西洋古典語は，1年生から2年生の期間に履修することが望ましい。
※4 ドイツ語，フランス語，中国語，ロシア語のうち、全学共通授業科目の外国語科目で選択した外国語を履修しなければならない。

Ⅰ-4-2. 主体的な学習を促す取組み

自主学習を促すために、《資料Ⅰ-23》のように制度面・環境面の整備を行ってきた。例えば、学生が授業時間以外にも教員から勉学上の指導を受けることができるようにオフィスアワーや連絡先が各教員のシラバスに明記され、周知が図られている。また、本学部同窓会がレポートコンテストにより「文窓賞」を授与し、勉学や課外活動に対する意欲の向上を図っている。平成25年には、人文科学図書館に神戸大学では初のラーニングコモンズが設置され、グループ学習、外国人教員との自由な英語会話、協働作業を中心とした新しいタイプの授業などでさまざまに活用されている。

《資料Ⅰ-23：制度面および環境面での整備項目》

項　目		内　容
制度面	オフィスアワー	学生は授業時間以外にも教員から指導を受けることが容易である。オフィスアワーは平成20年度からはシラバスに明記し、周知されている。
	キャップ制の免除	単位の実質化を図るためにキャップ制（１年間に履修できる単位数の上限：文学部は54単位）を設けるとともに、さらに学生の学習意欲を高めるため、成績優秀な学生に対しては、キャップ制の適用を免除する優遇措置を与えている。
	表彰制度	平成19年度から本学部同窓会がレポートコンテストにより「文窓賞」を授与している。
環境面	図書館（日本文化資料コーナー）	文学部の人文科学図書館は書籍約33万冊を有し、毎年確実に蔵書数を増やしている。開館時間は、平日（8時45分～19時）および土曜日（11～17時）である。（注：現在、日祝日は閉館している）
		「日本文化資料コーナー」を設けて資史料、貴重図書、参考図書類を集中的に配架し、複数の辞書類・資料を同時に縦覧する必要がある歴史・文学系等の学生の利便を図っている。当該学生等の利用・貸出は比較的多い状況である。
	学生用共同研究室	学生が個人あるいはグループで調査・研究するために使用できる「共同研究室」を教育研究分野ごとに設置し、学生の自主学習へ配慮している。共同研究室には辞書や専門書等も整備されており、学生はここで授業の予習や復習、研究発表のための資料作成などを行うことができる。
	コモンルーム	学生がグループ学習や研究会などのために自由に使用することのできる「コモンルーム」を３カ所設置し、学生の自主学習へ配慮している。ホワイトボードを使っての議論の場として活用したり、研究発表や面接の練習をしたりするなどさまざまな形で使われている。
	共同談話室	教員と学生が共同研究、読書会などを行うために使用することができる「共同談話室」を5カ所設置し、自由な共同学習や演習等の授業に活用している。各種の読書会、研究会の会合などが活発に行われている。
	情報機器	各専修の共同研究室や実験室などに、学生が利用できるパーソナル・コンピューターを適宜配置している。実習などの授業のほか、学生の自主学習に利用されている。
	教育機器	視聴覚機材を平成21～23年度にＢ棟、平成24年度にＣ棟にも設置し、ほぼ全ての教室で視聴覚機材（プロジェクター、スクリーン、DVD など）を活用した授業ができるようになった。パワーポイントを使った授業も多くなされている他、パソコン（インターネット）による具体的な資料検索・資料収集の方法を実践することも可能である。Web カメラなどの遠隔設備を数か所導入し、双方向の遠隔授業を可能とするなど、機器の更新を随時行っている。
	ラーニングコモンズ	自由に机と椅子を組み合わせ、図書館資料を自在に使用し、グループで話し合いながら学習を進めることができるスペースとして、「ラーニングコモンズ」が人文科学図書館とＡ棟に設置された。他学部にも広く開かれた文学部のラーニングコモンズは、平成25年度の運用開始以来、アクティブラーニングや演習、自主学習、グループ学習、留学報告会等、さまざまな形で活用され、大きな学習成果を挙げている。

Ⅰ-5. 学業の成果

Ⅰ-5-1. 学生が身に付けた学力や資質・能力

最近の文学部学生の卒業状況は、《資料Ⅰ-24》のとおりである。学部学生の卒業率（入学者総数に対する既卒業者の比率）は平成26年度入学者以降、平均94.9％という良好な数字を保っている。また、標準修業年限で卒業した学生（4年間で卒業した学生）の比率も平成26年度入学者以降、平均84％以上の数字を維持し、大半の学部生が4年間で卒業している。なお、学部生の場合、卒業以前に留年・休学して海外留学を経験する者も多い。

また、文学部における学びの集大成となる卒業論文について、令和5年度卒業生が提出した論文題目一覧は《資料Ⅰ-25》に挙げるとおりである。

《資料Ⅰ-24：修業年限内の卒業率 令和6年3月現在》

入学年度 (標準修業年度)	入学者数 (a)	卒業者数 (b)	標準年限内 卒業者数 (c)	標準年限内 卒業率 (c/a)
平成28年（令和元年）	124	116	101	81.5%
平成29年（令和2年）	108	104	87	80.6%
平成30年（令和3年）	110	110	96	87.3%
平成31年（令和4年）	108	108	95	88.0%
令和2年　（令和5年）	111	104	93	83.8%

《資料Ⅰ-25：令和6年3月卒業者の卒業論文題目一覧表》

	論文題目
哲学	意識の自然化をめぐる物理主義理論の批判的検討
哲学	フェミニズムにおけるポルノ的表現の問題と可能性について
哲学	アセクシュアルについての哲学的考察
哲学	ガダマー『真理と方法』における「真の対話」とは何か
国文学	「静御前」物語考
国文学	『とりかへばや物語』における親子関係
国文学	『源氏物語』における光源氏・葵上の対面場面について
国文学	泉鏡花「薬草取」論
国文学	『竹取物語』と神仙―くらもちの皇子を中心に―
国文学	洒落本における人物評価の再検討
国文学	小野不由美「ゴーストハント」論
国文学	孝標女と「記憶の創出」
国文学	教材としての『大鏡』「時平伝」
国文学	『本朝二十不孝』における共同体と不孝者
国文学	『とりかへばや物語』における女君の描かれ方
国文学	『頼豪阿闍梨怪鼠伝』における怪異
国文学	谷崎潤一郎『青塚氏の話』論
国文学	室生犀星『弄獅子』論
国文学	異性装が描き出したもの
国文学	『枕草子』の「木の花は」の段について
英米文学	『ヴェニスの商人』における人物表象
英米文学	A Study of *The Catcher in the Rye* in comparison with Walden; or, Life in the Woods
英米文学	ルイザ・メイ・オルコット『若草物語』について

英米文学	Truman Capote, The Grass Harp 批評
英米文学	フィリップ・K・ディック研究
英米文学	トルーマン・カポーティ研究
英米文学	バラク・オバマ著作研究
英米文学	Agatha Christie, Absent in the Spring 研究
英米文学	ミュージカル『ミス・サイゴン』研究
英米文学	エリザベス・ギャスケル『クランフォード』研究
英米文学	Edgar Allan Poe 研究
ドイツ文学	シラー『ヴァレンシュタイン』で描かれる運命と自由
ドイツ文学	カフカ作品におけるドアのモチーフについて
ドイツ文学	ゲーテの『若きヴェルターの悩み』における官職
フランス文学	カミュ『ペスト』研究
フランス文学	『死刑囚最後の日』における夢とユゴーの死刑廃止論
日本史学	第一次世界大戦後の尼崎における中学校設置と地域社会
日本史学	日本古代の喪葬儀礼に関する基礎的考察
日本史学	古代における対蝦夷政策の研究－服属儀礼を中心に－
日本史学	古代出雲東部における神祇祭祀と地域社会
日本史学	戦時期における明石地域の「傷痍軍人」援護事業
日本史学	平安-鎌倉移行期における加賀の在地領主の性格に関する一考察
日本史学	播磨酒井家における裁判制度の基礎的考察
日本史学	采女に関する基礎的考察
西洋史学	第三帝国におけるユダヤ人援助
西洋史学	ホーコン５世によるハンザ商人への法規制とその再評価の試み
西洋史学	中近世ヨーロッパにおける森林と都市
西洋史学	レーガン政権によるアフガニスタン・ニカラグア支援プロセスについて
西洋史学	プトレマイオス朝エジプトの王妃アルシノエ２世崇拝
西洋史学	1648 年反乱におけるイングランド海軍の動向
心理学	ビッグファイブ性格特性による一年後の離職率の予測
心理学	運動残効知覚中の脳波について
心理学	鳥類がもたらす well-being の効果
心理学	性格特性が視覚探索行動に及ぼす影響

心理学	触覚における奥行き知覚
心理学	識別能力が昆虫の嫌悪感に及ぼす影響の考察
心理学	職業スティグマがもたらす非人間化と処遇改善の阻害
心理学	形態に対する視覚障害者の作業記憶
心理学	SNS の投稿画像を用いた投稿者の性格特性の予測
心理学	他者の痛みの評価における社会経済的地位の影響
心理学	モチベーション伝染における性格的類似度の影響
心理学	視点の調整による向社会的行動の変化
言語学	インターネット上の言い回しにおける発話行為について
言語学	とりたて詞「だけ」の作用域に関する考察
言語学	語用論的観点から見る現代短歌
言語学	スナック菓子類のネーミングと音象徴
言語学	混成語の音韻論的規則について
芸術学	仮想世界の人形に対する生命付与について
芸術学	日記における演出について
芸術学	演劇における舞台照明
芸術学	朗読の構造
芸術学	バタイユにおける笑いの「共同体」とそれができる仕組み
芸術学	新海誠監督のアニメーションにおける背景と風景
芸術学	平田オリザ『東京ノート』分析
芸術学	「ダサい」とファッション
芸術学	『ダンガンロンパ』におけるキャラクターの「死」の受容とその特殊性
芸術学	テレビドラマ『木更津キャッツアイ』の描く「普通」
社会学	セクシュアル・ハラスメントの実態と認識
社会学	「オタク」属性の様相とソーシャルメディア研究
社会学	若者の音楽消費の非音楽的側面について
社会学	ボランティアにおけるジレンマ
社会学	私であるための歌
社会学	食支援活動の現場から紐解く新たなボランティア・つながりの形
社会学	SNS がもたらす観光意識の変化と観光地への影響
社会学	まちづくり活動における高校生の主体的参加の位置づけ

社会学	LGBTQのカミングアウトによる変化
社会学	「こだわり行動」を通して見るASD者の自己アイデンティティ
社会学	現代日本のファッションにおける「流行」
社会学	ルッキズム社会における自分の容姿との向き合い方
社会学	信仰を引き継ぐということ
社会学	「被害者としての喫煙者」像の構築
社会学	アロマンティック・アセクシュアルとその生きづらさ
美術史学	南蛮屏風の成立過程
美術史学	オットー・ディックス研究
美術史学	「二河白道図」について
美術史学	ピーテル・アールツェン作《肉屋》について
美術史学	歌川国芳研究
地理学	記憶の継承と広島の場所性
地理学	大型店立地による大都市周辺商業地域の機能変化
地理学	生駒山におけるレクリエーション空間の展開
地理学	石碑から見る水害の記憶の受容
地理学	「邂逅の場」としての橋

在学中に教育職員免許（中学校教員一種・高等学校教員一種）、学芸員資格、社会調査士資格等を取得する者が多く、その内訳は《資料Ⅰ-26》の通りである。これらのうち、高等学校教員一種の資格取得者が多いのは例年の傾向である。ただ、就職に向けた解禁日も流動化する傾向にあり、教育実習期間に中小企業の面接が入るなどの理由で実習辞退者が出るといった影響が見られ、今後に問題を残している。

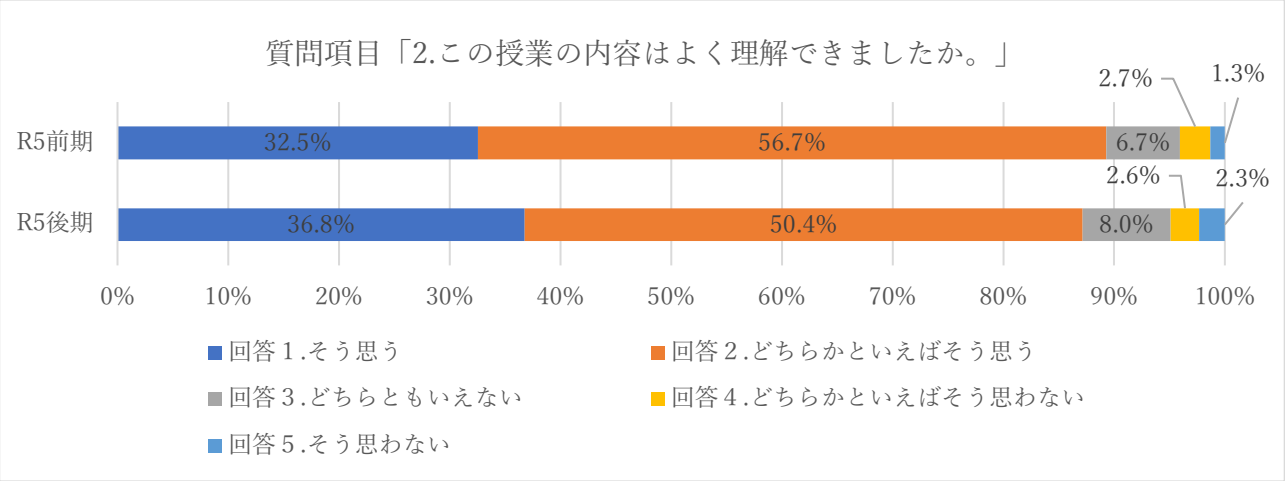
《資料Ⅰ-26：令和元～令和5年度資格取得者数》

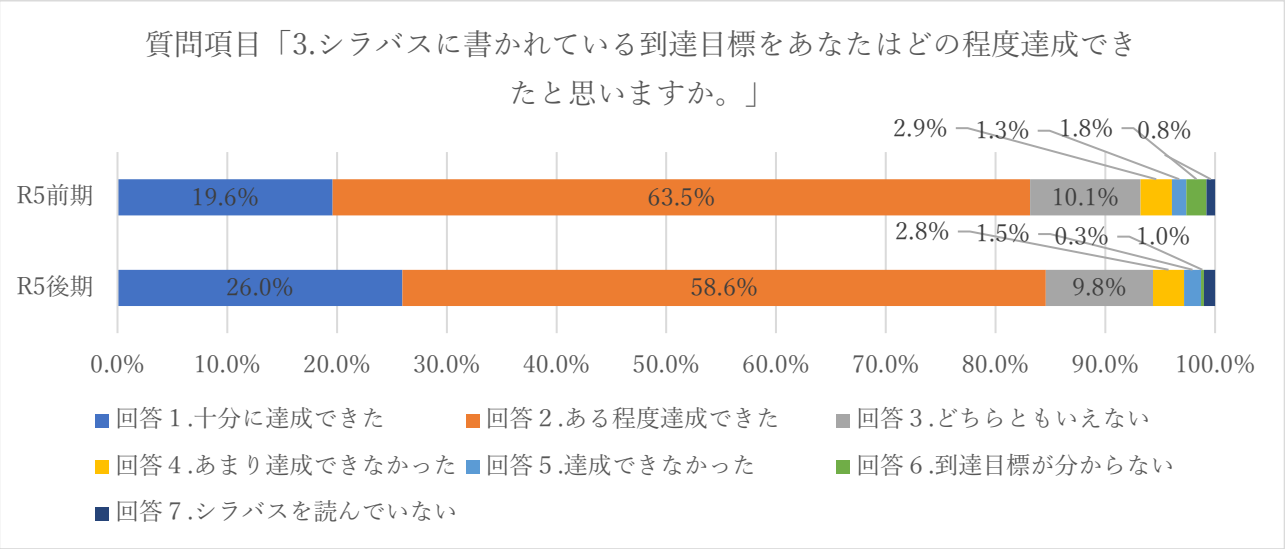
年　度	資格取得者数			
	教育職員免許		学芸員資格	社会調査士資格
	中学校一種	高等学校一種		
令和元年度	21	29	12	4
令和2年度	12	19	14	3
令和3年度	16	22	8	4
令和4年度	13	18	10	2
令和5年度	10	27	8	3

Ⅰ-5-2. 学業の成果に関する学生の評価

在学生を対象とした「授業振り返りアンケート」令和5年度の結果では、教育の成果や効果に関する質問項目の「2．この授業の内容はよく理解できましたか。」「3．シラバスに書かれている到達目標をあなたはどの程度達成できたと思いますか。」のうち、2については最上点および次点の回答者が前期約89%、後期約87%、3については最上点および次点の回答者が前期約83%、後期約85%といずれも良好な結果が得られており《資料Ⅰ-27》、例年、同様の傾向となっている。

《資料Ⅰ-27：「令和5年度後期授業振り返りアンケート」結果（抜粋）》





Ⅰ-6. 進路・就職の状況

Ⅰ-6-1. 卒業後の進路の状況

文学部卒業生の就職率および進学率については《資料Ⅰ-28》のとおりで、この状況は安定している。令和元～令和5年度の本学部における卒業生の進路は《資料Ⅰ-29》に示した。文学部の強みは公務員・中・高教員その他教育関係・メディア関係など教育成果を直接活用できる職種であったが、それ以外にも金融・保険

業、製造業、情報・通信業など、幅広い業種にわたっている。近年では特に情報・通信業への就職も増えており、時代の要請に適した能力を学生がしっかり培っていることがわかる。

就職状況は概ね良好である。学部における教育および就職対策が奏功していることが理解される。

大学院進学者が10%強という状況は、「専門的知識」を有する人材の育成を目的の一つに掲げている文学部の教育方針に合致しており、研究大学として社会からの期待に適った成果をあげている。

《資料Ⅰ-28：文学部卒業生の就職率および進学率》

卒業年度	卒業者数	進学者	就職者	就職希望者	進学率	就職希望者の就職率
令和元年度	116	17	94	99	14.7%	94.9%
令和2年度	104	16	75	88	15.6%	81.8%
令和3年度	110	19	78	84	17.2%	92.8%
令和4年度	108	15	79	83	13.9%	95.2%
令和5年度	104	13	82	91	12.5%	90.1%

《資料Ⅰ-29：文学部卒業生の進路状況》

卒業年度	製造業	情報・通信産業	卸売・小売業	金融・保険業	学校教育・その他教育	国家公務員・地方公務員	その他の業種
令和元年度	11	13	10	4	15	21	20
令和2年度	9	9	7	7	5	13	25
令和3年度	7	17	4	6	11	12	21
令和4年度	15	16	5	5	12	13	13
令和5年度	20	17	5	9	6	7	18

Ⅱ．教育（人文学研究科）

Ⅱ-1．人文学研究科の教育目的と特徴

人文学研究科は、大学院文学研究科（修士課程）および文化学研究科（独立研究科：後期３年博士課程）の改組・統合により平成19年４月に新たに設置された研究科である。

本研究科は、人文学すなわち人間と文化に関わる学問を扱い、哲学・文学・史学・行動科学などの人文系諸科学の教育を包括している。以下に本研究科の教育目的、組織構成、教育上の特徴および想定する関係者とその期待について述べる。

Ⅱ-1-1．教育目的

１　人文学研究科は、人類がこれまで蓄積してきた人間および社会に関する古典的な文献の原理論的研究に関する教育並びにフィールドワークを重視した社会文化の動態的分析に関する教育を行い、新たな社会的規範および文化の形成に寄与する教育研究を行うことを目的としている。

２　このような教育目的を達成するため、現行の中期目標では「「教育憲章」に掲げた、「人間性」、「創造性」、「国際性」および「専門性」を身につけた個性輝く人材を養成するため、国際的に魅力ある教育を学部・大学院において展開する。また、豊富な研究成果を活かして、社会の変化を先導し、個人と国際社会が進むべき道を切り拓く高度な知識・能力を有する、次世代の研究者をはじめとした多様な人材の養成に努め、教育の更なる高みを目指すことを定めている。

３　本研究科のディプロマ・ポリシー（DP）およびカリキュラム・ポリシー（CP）はそれぞれ《資料Ⅱ－１》《資料Ⅱ－２》のとおりである。これらDP、CPに基づき、本研究科は専攻ごとに、以下のような人材の育成を目指している。文化構造専攻の前期課程では、人文学の基礎的な方法を継承しつつ、個々の文化現象の現代的意味を問うことのできる基礎的能力を備え、人文学を知識基盤社会に活かすことのできる人材を養成し、後期課程では、人文学の高度な研究方法を継承しつつ、個々の文化現象の現代的意味を問うことができる能力並びに共同研究を企画し、組織する能力を持つ人材を養成する。社会動態専攻の前期課程では、社会文化の動態的分析の基礎的な能力を備え、人文学を知識基盤社会に活かすことのできる人材を養成し、後期課程では、社会文化の高度な動態的分析能力を備え、新たな社会規範および文化の形成に寄与できる能力並びに共同研究を企画し、組織する能力を持つ人材を養成する。この目的や人材養成は、現行の中期目標において、「高度な専門的知識を修得させ、個人と社会が進むべき道を切り拓く能力を涵養すること」を達成することと大いに対応している。

《資料Ⅱ－１：人文学研究科ディプロマ・ポリシー（DP）》

博士課程前期課程ディプロマ・ポリシー

神戸大学人文学研究科博士課程前期課程は、人文学の高い専門性を追求すると同時に、総合性を高めることによって、人文学の古典的な役割を継承しながら、現代社会において活躍できる人材を養成することを目的としている。この目的を達成するため、以下に示した方針に従って修士の学位を授与する。

学位：修士（文学）

神戸大学のディプロマ・ポリシーにもとづき、人文学研究科は以下に示した方針に従って当該学位を授与する。

・本研究科博士課程前期課程に２年以上在学し、研究科共通科目、選択科目、特別研究に関してそれぞれ所定の単位以上を修得し、かつ、必要な研究指導を受けた上、修士論文または特定の課題についての研究の成果の審査および最終試験に合格すること。

・神戸大学のディプロマ・ポリシーに定める能力に加え、修了までに、本研究科学生が、身につけるべき能力を次のとおりとする。

○「人間性」「創造性」「国際性」

・人文学の意義を理解し、その発展に貢献することのできる能力。また、人文学に関わる課題について、共同して解決することのできる能力。さらに、異なる文化に由来する多様性を受容し、必要な外国語でコミュニケーションをはかる能力。

○「専門性」
・人類がこれまで蓄積してきた人間と社会に関する古典的な文献の原理論的研究という人文学の基礎的な方法を継承しつつ、個々の文化現象の現代的意味を問うことができる能力。
・古典研究を踏まえて、フィールドワークを重視した社会文化の動態的分析を行い、なおかつ新たな社会的規範や文化の形成に寄与できる能力。
・研究者としての基礎能力を具えるとともに、人文学を知識基盤社会に活かすことができる能力。

博士課程後期課程ディプロマ・ポリシー

神戸大学人文学研究科博士課程後期課程は、人文学の高い専門性を追求すると同時に、総合性を高めることによって、人文学の古典的な役割を継承しながら、現代社会に対応できる人材を養成することを目的としている。この目的を達成するため、以下に示した方針に従って博士の学位を授与する。

学位：博士（文学）

神戸大学のディプロマ・ポリシーにもとづき、人文学研究科は以下に示した方針に従って当該学位を授与する。

・本研究科博士課程後期課程に3年以上在学し、研究科共通科目、特別演習に関してそれぞれ所定の単位以上を修得し、かつ、必要な研究指導を受けた上、博士論文の審査及び最終試験に合格すること。
・神戸大学のディプロマ・ポリシーに定める能力に加え、修了までに、本研究科学生が、身につけるべき能力を次のとおりとする。

○「人間性」「創造性」「国際性」
・人文学の意義を理解し、その発展に貢献することのできる能力。また、人文学に関わる課題について、共同して解決することのできる能力。さらに、異なる文化に由来する多様性を受容し、必要な外国語でコミュニケーションをはかる能力。

○「専門性」
・人文学の高い専門性を追求し、人文学の古典的な役割を継承しながら、現代社会に対応する能力
・人類がこれまで蓄積してきた人間と社会に関する古典的な文献の原理論的研究という人文学の基礎的な方法を継承しつつ、個々の文化現象の現代的意味を問うことができる能力。
・古典研究を踏まえて、フィールドワークを重視した社会文化の動態的分析を行い、なおかつ新たな社会的規範や文化の形成に寄与できる能力。
・自立した研究者として、研究を企画し、組織できる能力。

学位：博士（学術）

神戸大学のディプロマ・ポリシーにもとづき、人文学研究科は以下に示した方針に従って当該学位を授与する。

・本研究科博士課程後期課程に3年以上在学し、研究科共通科目、特別演習に関してそれぞれ所定の単位以上を修得し、かつ、必要な研究指導を受けた上で、博士論文の審査及び最終試験に合格すること。
・神戸大学のディプロマ・ポリシーに定める能力に加え、修了までに、本研究科学生が、身につけるべき能力を次のとおりとする。

○「人間性」「創造性」「国際性」
・人文学の意義を理解し、その発展に貢献することのできる能力。また、人文学に関わる課題について、共同して解決することのできる能力。さらに、異なる文化に由来する多様性を受容し、必要な外国語でコミュニケーションをはかる能力。

○「専門性」
・人文学の高い専門性を追求すると同時に、専門性にもとづく学際性を高めることによって、人文学の古典的な役割を継承しながら、現代社会に対応する能力。
・人類がこれまで蓄積してきた人間と社会に関する古典的な文献の原理論的研究という人文学の基礎的な方法を継承しつつ、個々の文化現象の現代的意味を問うことができる能力。
・古典研究を踏まえて、フィールドワークを重視した社会文化の動態的分析を行い、なおかつ新たな社会的規範や文化の形成に寄与できる能力。
・自立した研究者として、研究を企画し、組織できる能力。

《資料Ⅱ－２：人文学研究科カリキュラム・ポリシー（CP)》

神戸大学のカリキュラム・ポリシーにもとづき、人文学研究科は以下の方針に則りカリキュラムを編成する。

博士課程前期課程
学位：修士（文学）

1. 「人間性」「創造性」「国際性」を身につけさせるため、研究科共通科目を開設する。
2. 人文学の「専門性」を身につけさせるため、以下の専門科目を開設する。
   - 各分野の高度に専門的な知識を身につけることができるよう特殊研究科目を開設する。
   - 各分野の研究に必要なスキルと語学の能力を身につけることができるよう、少人数で展開される演習科目を開設する。
   - 学位論文完成のため、指導教員による特別研究科目を開設する。

なお、これらの科目は講義・演習等の授業形態に応じて、アクティブラーニング、体験型学習などを適宜組み合わせて行う。

指導体制については、各学生に対して3名からなる指導教員チームを編成し、そのうち必ず他専攻の教員が参加する体制をとっている。それにより、高い専門性ばかりでなく、幅広い学際的視野のもとで研究する能力を育成する。また論文の提出までに、計画書の提出、準備論文の提出、公開研究報告会の開催など、研究の進捗状況をその都度上記の体制でチェックしながら、研究遂行の能力を総合的に育成する。

学修成果の評価は、次の方法で行う。

- 講義科目については、筆記試験、レポート、参加度等により、学修目標に即して多元的、包括的な方法で到達度を判定する。
- 演習・実習等については、筆記試験、レポート、参加度、発表内容等により、学修目標に即して多元的、包括的な方法で到達度を判定する。

博士課程後期課程
学位：博士（文学）

1. 「人間性」「創造性」「国際性」を身につけさせるため、研究科共通科目を開設する。
2. 秀れた「専門性」を有する学位論文完成のため、指導教員による特別演習科目を開設する。

指導体制については、各学生に対して3名からなる指導教員チームを編成し、そのうち必ず他専攻の教員が参加する体制をとっている。それにより、高い専門性ばかりでなく、幅広い学際的視野のもとで研究する能力を育成する。また論文の提出までに、計画書の提出、予備論文の提出、公開研究報告会および博士予備論文公開審査の開催など、研究の進捗状況をその都度上記の体制でチェックしながら、研究遂行の能力を総合的に育成する。

学修成果の評価は、筆記試験、レポート、参加度、発表内容等により、学修目標に即して多元的、包括的な方法で到達度を判定する。

博士課程後期課程
学位：博士（学術）

1. 「人間性」「創造性」「国際性」を身につけさせるため、研究科共通科目を開設する。
2. 秀れた「専門性」とそれにもとづく学際性を有する学位論文完成のため、指導教員による特別演習科目を開設する。

指導体制については、各学生に対して3名からなる指導教員チームを編成し、そのうち必ず他専攻の教員が参加する体制をとっている。それにより、高い専門性ばかりでなく、幅広い学際的視野のもとで研究する能力を育成する。また論文の提出までに、計画書の提出、予備論文の提出、公開研究報告会および博士予備論文公開審査の開催など、研究の進捗状況をその都度上記の体制でチェックしながら、研究遂行の

能力を総合的に育成する。

学修成果の評価は、筆記試験、レポート、参加度、発表内容等により、学修目標に即して多元的、包括的な方法で到達度を判定する。

Ⅱ-1-2. 組織構成

これらの目的を実現するため、本研究科では、《資料Ⅱ－３》のような組織構成をとっている。

《資料Ⅱ－３：組織構成》

専　攻	コース	教育研究分野
文化構造	哲学	哲学、倫理学
	文学	国文学（国語学を含む）、中国・韓国文学、英米文学、ヨーロッパ文学
社会動態	史学	日本史学、東洋史学、西洋史学
	知識システム論	心理学、言語学（英語学を含む）、芸術学
	社会文化論	社会学、美術史学、地理学、文化資源論（連携講座：後期課程のみ）

Ⅱ-1-3. 教育上の特徴

1　人文学研究科は、学生が明確な目的意識をもって専門分野の研究を深めるようにするため、一貫性のある明確なプログラムに従って学修・指導を進めている。また、年次ごとのプログラムを具体的に定めることにより、後期課程からの編入生も、他大学院の前期課程（修士課程）で学修した成果を本研究科での学修にスムーズに移行できるようにしている。

2　人文学研究科は、次のような指導体制を構築して、学生の研究教育を支援している。①教育研究分野ごとに、各年次で学修する内容を具体的に定め、その修得を学生に徹底している。②学生1名に対して3名からなる指導教員チームを編成している。また、このチームには必ず他専攻の教員が1名参加し、学生が高い専門性とともに幅広い学問的視野を獲得できるように配慮している。③学生ごとに履修カルテを作成し、これによって指導教員チームは学生の学修に関する情報を共有している。この履修カルテは、指導プロセスの透明化にも役立てられている。指導方法については常に検証・改善に努めている。

3　学域全体における研究の位置付けを見失うことなく、研究の社会的意義に対する省察を行うため、本研究科は、教育プログラムとして研究科共通科目を設定し、これを必修としている。研究科共通科目は本研究科内の共同研究教育組織（海港都市研究センター、地域連携センター、倫理創成プロジェクト、日本語日本文化教育プログラム）の支援のもとで実施されている。

4　本研究科は、《資料Ⅱ－４》のような文部科学省等の推進する各種の教育改革プログラムに採択されており、これらとの連携のもとで教育改革を積極的に推進してきた。

《資料Ⅱ－４：採択されたプログラム一覧》

プログラム名		採択課題名	期間
日本学術振興会	大学院教育改革プログラム	古典力と対話力を核とする人文学教育―学域横断的教育システムに基づくフュージョンプログラムの開発	平成20～22年度
日本学術振興会	若手研究者インターナショナル・トレーニング・プログラム	東アジアの共生社会構築のための多極的教育研究プログラム	平成20～24年度
日本学術振興会	組織的な若手研究者等海外派遣プログラム	国際連携プラットフォームによる東アジアの未来を担う若手人文研究者等の育成	平成21～24年度
文部科学省	国際共同に基づく日本研究推進事業	日本サブカルチャー研究の世界的展開	平成22～24年度
文部科学省	グローバル人材育成推進事業（タイプＢ特色型）※1	問題発見型リーダーシップを発揮できるグローバル人材の育成　※2	平成24～28年度
日本学術振興会	頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム　※3	国際共同による日本研究の革新―海外の日本研究機関との連携による若手研究者養成	平成25～27年度
文部科学省	運営費交付金機能強化経費「実践型グローバル人材育成事業」※4	日本語教育・日本研究を中心とした実践型グローバル人材育成事業	平成29～令和3年度

※1　平成26年度より、「スーパーグローバル大学等事業　経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援」に改称。
※2 国際文化学部を代表部局とし、文学部・人文学研究科、発達科学部、法学部、経済学部・経済学研究科、経営学部の共同のプログラムを推進してきた。
※3 平成26年度より、「頭脳循環を加速する戦略的国際研究ネットワーク推進プログラム」に改称。
※4　運営費交付金（機能強化経費）による「日本語教育・日本研究を中心とした実践型グローバル人材育成事業」に特化したプロジェクトである。

Ⅱ-2. 教育の実施体制

Ⅱ-2-1. 基本的組織の編成

本研究科は、上記（30頁）の教育目的を達成するため、前期課程（修士課程）、後期課程（博士課程）ともに一貫性のある明確なプログラムの下に文化構造および社会動態という2つの専攻を設けている。各専攻は哲学、文学（以上、文化構造専攻）、史学、知識システム論、社会文化論（以上、文化動態専攻）のコースに分かれている。後期課程社会動態専攻には奈良国立博物館および大和文華館との連携講座（文化資源論）も置いている《資料Ⅱ－３》。

教員の配置状況は、《資料Ⅱ－５》《資料Ⅱ－６》のとおりである。授業の根幹をなす演習と研究指導および研究科共通科目の授業は、いずれも専任教員が担当している。専任教員のほとんどは博士号を有している。また、入学定員が前期課程44名（平成26年度までは50名）、後期課程20名であるのに対し、専任教員は54名であり、質量ともに必要な教員が確保されている。

《資料Ⅱ－５：教員の配置状況　令和5年5月1日現在》

専攻	課程	収容定員	専任教員数（現員）											助手		非常勤教員数（R5年度）	
			教授		准教授		講師		助教		計						
			男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	総計	男	女	男	女
文化構造	前期	34	7	4	4	2	2	3	1	0	14	9	23	0	0	14	2
	後期	24															
社会動態	前期	54	14	3	8	2	2	2	0	0	24	7	31	0	0	26	7
	後期	36															

※特任教員、兼務教員を含む。

《資料Ⅱ－６：教育研究分野別教員現員数　令和5年5月1日現在》

教育研究分野	教授	准教授	講師	助教	教育研究分野	教授	准教授	講師	助教	教育研究分野	教授	准教授	講師	助教
哲学	1	1	1	0	ヨーロッパ文学	3	1	0	0	言語学	3	1	0	0
倫理学	1	0	1	0	日本史学	3	0	1	0	芸術学	2	0	1	0
国文学	2	2	1	0	東洋史学	2	2	0	0	社会学	2	2	1	0
中国・韓国文学	2	1	1	0	西洋史学	3	1	0	0	美術史学	1	0	1	0
英米文学	2	1	1	1	心理学	1	2	0	0	地理学	0	2	0	0

※特任教員、兼務教員を含み、文化資源論の教授2名を除く。

入学者の選抜については、全学および人文学研究科として求める学生像（アドミッション・ポリシー）を定め《資料Ⅱ－７》、これに基づき、前期課程における一般学生、外国人特別学生を対象とするⅠ期およびⅡ期、並びに特別入試（平成26年度より導入）、後期課程における一般学生、外国人特別学生を対象とする入学試験など多様な選抜を実施している。

学生定員と現員の状況については《資料Ⅱ－８》、教育研究分野別の学生数は《資料Ⅱ－９》のとおりである。

《資料Ⅱ－７：求める学生像（アドミッション・ポリシー）》

神戸大学が求める学生像

神戸大学は、世界に開かれた国際都市神戸に立地する大学として、国際的で先端的な研究・教育の拠点になることを目指しています。

これまで人類が築いてきた学問を継承するとともに、不断の努力を傾注して新しい知を創造し、人類社会の発展に貢献しようとする次のような学生を求めています。

１．進取の気性に富み、人間と自然を愛する学生
〔求める要素：思考力・判断力・表現力、主体性・協働性、関心・意欲〕

２．旺盛な学習意欲をもち、新しい課題に積極的に取り組もうとする学生
〔求める要素：知識・技能、主体性・協働性、関心・意欲〕

３．常に視野を拡げ、主体的に考える姿勢を持った学生
〔求める要素：主体性・協働性、関心・意欲〕

４．コミュニケーション能力を高め、異なる考え方や文化を尊重する学生
〔求める要素：知識・技能、思考力・判断力・表現力、主体性・協働性〕

●入学者選抜の基本方針

以上のような学生を選抜するために、神戸大学のディプロマ・ポリシーおよびカリキュラム・ポリシーを踏まえ、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・協働性」「関心・意欲」を測るため、多面的・総合的な評価による選抜を実施します。

人文学研究科が求める学生像

大学院博士課程前期課程

人文学研究科は博士課程前期課程に次のような学生を求めています。

１．人文学の諸分野に関心を持ち、既成の価値観にとらわれることなく、自分で問題を発見し、追究していく情熱を持っている人。
〔求める要素：思考力・判断力・表現力、主体性・協働性、関心・意欲〕

２．自ら選んだ専門分野の研究を深め、その学術的展開を志す人。
〔求める要素：知識・技能、思考力・判断力・表現力、関心・意欲〕

３．社会の一員としての自覚を持って、自らの学術研究を社会との係わりで展開していく意欲を持っている人。
〔求める要素：思考力・判断力・表現力、主体性・協働性、関心・意欲〕

●入学者選抜の基本方針
以上のような学生を選抜するために、人文学研究科博士課程前期課程のディプロマ・ポリシーおよびカリキュラム・ポリシーを踏まえ、以下の選抜において様々な要素を測ります。
一般入試、特別入試および外国人特別入試では、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・協働性」「関心・意欲」を測ります。

大学院博士課程後期課程
人文学研究科は博士課程後期課程に次のような学生を求めています。
1．人文学の諸分野に関心を持ち、既成の価値観にとらわれることなく、自分で問題を発見し、追究していく情熱を持っている人。
〔求める要素：思考力・判断力・表現力、主体性・協働性、関心・意欲〕
2．自ら選んだ専門分野の研究を深め、その学術的展開を行って研究者を志す人。
〔求める要素：知識・技能、思考力・判断力・表現力、関心・意欲〕
3．研究者としての自覚をそなえ、自らの学術研究を学際的かつ国際的な幅広い視野のなかで展開していく意欲を持っている人。
〔求める要素：思考力・判断力・表現力、主体性・協働性。関心・意欲〕

●入学者選抜の基本方針
以上のような学生を選抜するために、人文学研究科博士課程後期課程のディプロマ・ポリシーおよびカリキュラム・ポリシーを踏まえ、以下の選抜において様々な要素を測ります。
一般入試、進学者入試および外国人特別入試では、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・協働性」「関心・意欲」を測ります。

《資料Ⅱ－８：学生定員（収容定員）と現員の状況　各年5月1日現在》
人文学研究科博士課程前期課程

専攻	年度	収容定員	現員	定員充足率（年）	定員充足率(8年間)
文化構造	平成28年度	34	44	129%	127%
	平成29年度	34	52	153%	
	平成30年度	34	42	124%	
	令和元年度	34	40	118%	
	令和2年度	34	48	141%	
	令和3年度	34	40	118%	
	令和4年度	34	41	121%	
	令和5年度	34	38	112%	
社会動態	平成28年度	54	68	126%	107.6%
	平成29年度	54	62	115%	
	平成30年度	54	60	111%	
	令和元年度	54	60	111%	
	令和2年度	54	51	94%	
	令和3年度	54	51	94%	
	令和4年度	54	56	104%	
	令和5年度	54	57	106%	

※平成27年度より、入学定員が、文化構造専攻は20名から17名、社会動態専攻は30名から27名に変更となった。

人文学研究科博士後期課程

専攻	年度	収容定員	現員	定員充足率（年）	定員充足率(8年間)
文化構造	平成28年度	24	36	150%	167.2%
	平成29年度	24	41	171%	
	平成30年度	24	43	179%	
	令和元年度	24	45	188%	
	令和2年度	24	43	179%	
	令和3年度	24	38	158%	
	令和4年度	24	41	171%	
	令和5年度	24	34	142%	
社会動態	平成28年度	36	59	164%	161.3%
	平成29年度	36	61	169%	
	平成30年度	36	61	169%	
	令和元年度	36	59	164%	
	令和2年度	36	57	158%	
	令和3年度	36	58	161%	
	令和4年度	36	55	153%	
	令和5年度	36	55	153%	

資料Ⅱ－９：教育研究分野別の学生数　令和5年4月1日現在》

人文学研究科

専　攻	博士課程前期課程		博士課程後期課程	
	教育研究分野	学生数	教育研究分野	学生数
文化構造	哲学	2	哲学	3
	倫理学	3	倫理学	0
	国文学	10	国文学	18
	中国・韓国文学	11	中国・韓国文学	6
	英米文学	6	英米文学	5
	ヨーロッパ文学	6	ヨーロッパ文学	2
社会動態	日本史学	11	日本史学	12
	東洋史学	1	東洋史学	0
	西洋史学	7	西洋史学	1
	心理学	3	心理学	1
	言語学	6	言語学	8
	芸術学	3	芸術学	7
	社会学	17	社会学	10
	美術史学	7	美術史学	12
	地理学	2	地理学	2
			文化資源論	2
	合計	95	合計	89

Ⅱ-2-2. 教育内容、教育方法の改善に向けた取組み

人文学研究科評価委員会は、授業評価アンケートの実施など、教育に関わる評価作業を行うとともに、教員の教育方法および技術の向上を図るためにファカルティ・ディベロップメント（FD）を開催している。人文学研究科の FD は、評価委員会が中心となり実施している。学生による授業評価アンケート、教員相互の授業参観・評価（ピアレビュー）を定期的に行い、その結果は、FD において報告され、カリキュラム編成や授業方法の改善に活用され、中期目標の実現に向けた教育課程の改善が図られている《資料Ⅱ-10》。さらに、毎年度、評価報告書を作成し、独自に外部評価を受けて、FD の達成点と改善点を的確に把握し、それを教員・職員間で共有している《資料Ⅱ-11》。

こうした活動が個々の授業科目の内容に反映されることはもちろん、カリキュラム構成や教授法等の改善も適宜行っており、たとえば、人文学に必須の古典力を強化することやグローバル人材を育成することなどを目的として、前期課程の研究科共通科目の充実を行った《資料Ⅱ-12》。

《資料Ⅱ-10：平成31～令和5度の FD 実施状況》

開催日	テーマ	参加者数
平成 31 年 4 月 22 日	日本学術振興会特別研究員 DC 申請のための申請書の書き方セミナー	5
平成 31 年 4 月 24 日	オックスフォード大学における文理融合研究：ウェルカム・ユニットを事例として	47
令和元年 7 月 27 日	ピアレビューの実施結果および今後の検討について	49
令和元年 9 月 26 日	科研費セミナー「大型科研費の応募に向けて」	44
令和元年 9 月 29 日	令和元年度文学部および大学院人文学研究科の外部評価	17
令和元年 10 月 2 日	人文学研究科向け科研費若手研究への申請のポイント	9
令和元年 11 月 27 日	Struggles for academic freedom	47
令和 2 年 1 月 22 日	卒業生・修了生アンケートの実施結果について	51
令和 2 年 3 月 5 日	JSPS 特別研究員（学振 DC）の制度概要および獲得に向けた申請書の書き方・準備について	48
令和 2 年 5 月 27 日	Zoom、YouTube、Google Forms を利用したオンデマンド講義の準備について	55
令和 2 年 7 月 29 日	学生アンケートの集計結果について	56
令和 2 年 9 月 2 日	大型科研費応募に向けて	55
令和 2 年 9 月 23 日	ピアレビューの実施結果および今後の検討について	54
令和 2 年 9 月 23 日	対面授業等の実施に係る注意事項について	54
令和 2 年 7 月 13-17 日	リアルタイムのオンライン講義、オンデマンド形式の講義を含む８科目を対象にピアレビューを実施し遠隔授業実施のためのスキルを身につける	37
令和 2 年 10 月 7 日	これまでの研究力強化の取り組みの報告と R3 年度科研費について	53
令和 3 年 3 月 19 日	JSPS 特別研究員（学振 DC）の制度概要および獲得に向けた申請書の書き方・準備について	59
令和 3 年 4 月 28 日	ハイフレックス型授業の実施にあたって	52
令和 3 年 6 月 23 日	ハラスメントの防止に向けて	53
令和 3 年 7 月 28 日	学生アンケート各種の集計結果について	53
令和 3 年 7 月 28 日	科研費セミナー「大型科研費の応募に向けて」	53

令和３年８月 27 日	ICT を活用した授業形態：実践編	16
令和３年 11 月 24 日	神戸大学の存在感向上のためにープレスリリースのお願い	56
令和４年１月 19 日	2021 年度文学部・人文学研究科ピアレビューについて	57
令和４年２月９日	外国語による教育: 問題と機会	58
令和４年３月 19 日	JSPS 特別研究員（学振 DC）の制度概要および獲得に向けた申請書の書き方・準備について	54
令和４年５月 25 日	ICT を活用した授業にむけて	54
令和４年６月８日	大型科研費の獲得へ向けて	55
令和４年７月 27 日	KAISER2022 の導入について	53
令和４年９月７日	2022 年度ピアレビューの結果報告と分析	48
令和４年 12 月 21 日	各種学生アンケート集計結果についての分析	55
令和５年６月 14 日	2022 年度後期の「授業振り返りアンケート」について	52
令和５年６月 28 日	科研費の申請に向けて　ー申請書の書き方ー 基盤研究 B、C の対策	54
令和５年 11 月 15 日	令和５年度ピアレヴューについて（報告）	55
令和５年 12 月 20 日	神戸大学の広報サービス等について	58
令和５年 12 月 20 日	Short Introduction to the Philosophical and Atmospherological Research at Rome Tor Vergata University	58

《資料Ⅱ-11：令和元～令和5年の外部評価実施状況》

実施日	外部評価委員
令和元年9月29日	大国正美（株式会社神戸新聞社取締役） 栄原永遠男（大阪歴史博物館館長、大阪市立大学名誉教授）
令和2年9月2日	上田功（名古屋外国語大学外国語学部・教授）
令和3年11月30日	伊藤公雄（京都産業大学・教授、京都大学・大阪大学名誉教授）
令和4年9月16日	大城直樹（明治大学文学部・教授）
令和5年10月11日	山上浩嗣（大阪大学大学院人文学研究科・教授）

《資料Ⅱ-12：平成 22 年度と令和５年度の人文学研究科博士課程前期課程研究科共通科目の比較》

平成22年度 研究科共通科目	令和５年度 研究科共通科目
	古典力基盤研究
海港都市研究交流演習	海港都市研究交流演習
海港都市研究	地域歴史遺産活用演習
地域歴史遺産活用演習	地域歴史遺産活用研究
地域歴史遺産活用研究	倫理創成論研究
倫理創成論研究	倫理創成論演習
倫理創成論演習	日本語日本文化教育演習
日本語日本文化教育演習	多文化理解演習
多文化理解演習	日本語教育研究Ⅰ・Ⅱ
日本語教育研究Ⅰ・Ⅱ	日本語教育内容論Ⅰ・Ⅱ

日本語教育内容論Ⅰ・Ⅱ 日本語教育方法論Ⅰ・Ⅱ 日本語研究 日本社会文化演習Ⅰ・Ⅱ	日本語教育方法論Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ 日本語研究 日本社会文化演習Ⅰ・Ⅱ グローバル人文学特殊研究 比較現代日本論特殊研究 比較日本文化産業論特殊研究 グローバル対話力演習Ⅰ・Ⅱ アカデミック・ライティングⅠ・Ⅱ オックスフォード夏季プログラム 海外日本語日本文化教育実習 臨時科目1・2

Ⅱ-3. 教育内容

Ⅱ-3-1. 教育課程の編成

前期課程の教育課程は、「研究科共通科目」「専門科目」および「特別研究」、後期課程の教育課程は、「研究科共通科目」と「特別演習」から構成されている。

前期課程・後期課程の研究科共通科目として、古典力・海港都市・地域歴史遺産・倫理創成・日本語日本文化教育等に関わる授業科目を設け、個別の研究や学域を越えた幅広い視野のもとに自らの研究の社会的意義を自覚させるように配慮している。なお、平成24年度の文部科学省グローバル人材育成推進事業への採択を受け、翌年度から実践的な英語能力の育成を目的とする科目を加えた**《資料Ⅱ-12》**。

前期課程の「専門科目」は、演習と講義形式による特殊研究からなる。科目数は演習科目（「特別研究」を含む）と特殊研究科目がほぼ同数となっている。人文学における研究の根幹をなす文献読解能力、資料調査分析能力、表現力の養成には演習がふさわしく、前期課程に多くの演習科目が開講されているのはそのためである。修士論文の作成は、これらの演習を受講することで初めて可能となる。後期課程の授業形態は、研究科共通科目・特別演習ともに演習が基本となる。「特別研究」および「特別演習」は、学位論文の作成に特化した演習であり、指導教員3名が、学修カルテ**《資料Ⅱ-13》**を参照しながら、連携して指導に当たる。

《資料 13：学修カルテ（博士課程前期課程）》

人文学研究科大学院生学修カルテ【博士課程前期課程】			
学籍番号		氏　　名	
専　　攻		教育研究分野	
指導教員	主）	副）	副）

博士前期		実施状況チェック
１年次		
4月20日	前期課程研究指導計画書提出	
5月20日	修士論文研究計画書提出	
２年次		
4月10日	修士準備論文を1部提出	
6月第3水曜日	前期課程公開研究報告会	
6月第4金曜日	主指導教員は前期課程公開研究報告会終了報告書を提出	
11月16日まで	修士論文題目を提出	
1月16日まで	修士論文を1部提出	
2月中旬	最終試験	
3月上旬	博士課程前期課程修了判定	
3月下旬	学位記授与式	

○このカードは個人情報保護の観点から取扱に注意が必要です。

具体的な研究・研究論文テーマ 関心のある関連領域
将来の希望・就職
修学上の留意点
単位取得状況 共通科目 専門科目

○このカードは個人情報保護の観点から取扱に注意が必要です。

指導履歴

年月日	指導内容

○このカードは個人情報保護の観点から取扱に注意が必要です。

発表論文など

年月日	論文名	学会名、雑誌名など
記入例① （学術雑誌等での論文発表）2021年3月	論文名、著者名（共著の場合には、学生本人に下線を付けてください。）を記入してください。	掲載誌名、発行所等、 巻（号）、最初と最後の頁、 査読の有無
記入例② （学会等での論文発表）2020年9月	論文名、発表者名（共同発表の場合には、学生本人に下線を付けてください。）を記入してください。	学会名、開催場所
記入例③ （研究費獲得の場合）	研究費獲得：科研（特別研究員奨励費）、 令和4年度　50万円、令和4年度　70万円	
記入例④ （受賞歴、新聞記事掲載等）2022年4月	学会賞等受賞名や新聞雑誌等掲載事項	

○ このカードは個人情報保護の観点から取扱に注意が必要です。

○ 発表論文等の記載内容は、人文学研究科における大型補助金獲得や年次報告書作成時に利用することがありますので、以下の点を必ず明記願います。

※　学術雑誌等への発表論文は、査読の有無を記入のこと

※　学会、シンポジウム等での発表論文は開催場所を記入のこと。

Ⅱ-3-2. 学生や社会からの要請への対応

人文学研究科では、グローバル化が進む現代社会における諸問題に対応し、また社会からの要請に応えるため、教育課程の編成やそれらに配慮した取組みを以下のとおり実践している。

1. 他研究科の授業科目の履修

本研究科では、他研究科の授業科目を本研究科での専門科目と同等に扱い、修了に必要な単位として認めている。

2. 他大学との単位互換

本研究科は、国内では奈良女子大学大学院人間文化研究科、大阪大学大学院文学研究科、神戸松蔭女子学院大学大学院文学研究科、神戸市外国語大学大学院外国語学研究科と交流協定を締結しており、これらの授業科目中10単位を上限として修了に必要な単位として認めている。

海外では、全学協定および部局間協定に基づき、単位互換協定を締結している《資料Ⅱ-14》。

《資料Ⅱ-14：単位互換協定を締結している海外の大学　令和6年3月現在》

協定校	国名	大学間協定	部局間協定
木浦大学校	大韓民国	○	
成均館大学校	大韓民国	○	
韓国海洋大学校	大韓民国	○	
ソウル国立大学校	大韓民国	○	
高麗大学校	大韓民国	○	
韓国外国語大学校	大韓民国		○
山東大学	中華人民共和国	○	
華東師範大学思勉人文高等研究院	中華人民共和国	○	
中山大学	中華人民共和国	○	
南京大学	中華人民共和国	○	
中国海洋大学	中華人民共和国	○	
復旦大学	中華人民共和国	○	
北京外国語大学	中華人民共和国	○	
武漢大学	中華人民共和国	○	
上海交通大学	中華人民共和国	○	
清華大学	中華人民共和国	○	
江南大学	中華人民共和国		○
鄭州大学	中華人民共和国		○
浙江大学	中華人民共和国		○
香港大学	中華人民共和国		○
東北大学	中華人民共和国		○
国立台湾大学	台湾	○	
国立政治大学	台湾	○	
モンゴル国立大学	モンゴル	○	
西オーストラリア大学	オーストラリア	○	
ウーロンゴン大学	オーストラリア	○	
オーストラリア商船大学	オーストラリア	○	
オタワ大学	カナダ	○	

グラーツ大学	オーストリア	○	
インスブルック大学	オーストリア		○
カレル大学	チェコ	○	
パリ第2大学	フランス	○	
パリ第10大学	フランス	○	
リヨン高等師範学校	フランス	○	
パリ第7大学	フランス	○	
リール大学	フランス	○	
エクス＝マルセイユ大学	フランス	○	
バルセロナ大学	スペイン	○	
バーゼル大学	スイス	○	
バーミンガム大学	連合王国	○	
SOAS ロンドン大学東洋アフリカ研究学院	連合王国	○	
エセックス大学	連合王国	○	
ライデン大学	オランダ	○	
ソフィア大学	ブルガリア	○	
ブリュッセル自由大学	ベルギー	○	
ヴェネツィア大学	イタリア	○	
ボローニャ大学	イタリア	○	
トリノ大学	イタリア	○	
ヤゲウォ大学	ポーランド		○
ニコラウス・コペルニクス大学	ポーランド	○	
ワルシャワ大学	ポーランド		○
キール大学	ドイツ	○	
マルティン・ルター大学ハレ・ヴィッテンベルク	ドイツ	○	
トリーア大学	ドイツ	○	
ハンブルク大学	ドイツ	○	
ダルムシュタット工科大学	ドイツ	○	
ベルリン自由大学	ドイツ	○	
ブカレスト大学	ルーマニア	○	
ディミトリエ・カンテミルキリスト教大学	ルーマニア		○
サンクトペテルブルグ大学	ロシア	○	
エトヴェシュ・ローランド大学	ハンガリー	○	
ブタペルト・コルヴィヌス大学	ハンガリー	○	
プーラ大学	クロアチア		○
ベオグラード大学	セルビア		○

この制度に基づき、平成30年度から令和5年度の6年間に、協定校との間で受け入れ53名、派遣22名の留学生交換実績がある。令和2～3年度は新型コロナのために交換留学が実質上ストップしてしまったが、令和4年度になりまた従来の動きが戻っている。交換留学生（受け入れ）実績は《資料Ⅱ-15》、交換留学生（派遣）実績は《資料Ⅱ-16》のとおりである。

《資料Ⅱ-15：交換留学生（受入）実績》

年　度	所属大学名	出身国	奨学金	期　　間
平成30年度	北京外国語大学	中国	JASSO	平成30 年4月1日～平成31年3月31日
	中国海洋大学	中国	JASSO	平成30年4月1日～平成30年9月30日
	中国海洋大学	中国	JASSO	平成30年4月1日～平成30年9月30日
	中国海洋大学	中国	JASSO	平成30年4月1日～平成30年9月30日
	カレル大学	チェコ	JASSO	平成30年4月1日～平成30年9月30日
	南京大学	中国	JASSO	平成30年10月1日～平成31年3月31日
	南京大学	中国	JASSO	平成30年10月1日～平成31年3月31日
	カレル大学	チェコ	JASSO	平成30年10月1日～平成31年9月30日
	トリーア大学	ドイツ	JASSO	平成30年10月1日～平成31年9月30日
	リール大学	フランス		平成30年10月1日～平成31年9月30日
	パリ第7大学	フランス		平成30年10月1日～平成31年9月30日
	パリ第10大学	フランス	JASSO	平成30年10月1日～平成31年9月30日
	ブリュッセル自由大学（蘭語系）	ベルギー		平成30年10月1日～平成31年3月31日
	サンクトペテルブルク大学	ロシア	JASSO	平成30年10月1日～平成31年3月31日
令和元年度	中国海洋大学	中国		平成31年4月1日～令和元年9月30日
	中国海洋大学	中国		平成31年4月1日～令和元年9月30日
	中国海洋大学	中国		平成31年4月1日～令和元年9月30日
	トリノ大学	イタリア		平成31年4月1日～令和元年9月30日
	南京大学	中国	JASSO	平成31年4月1日～令和元年9月30日
	ヤゲウォ大学	ポーランド	JASSO	令和元年10月1日～令和2年3月31日
	ヴェネツィア大学	イタリア	JASSO	令和元年10月1日～令和2年3月31日
	南京大学	中国	JASSO	令和元年10月1日～令和2年3月31日
	トリノ大学	イタリア	JASSO	令和元年10月1日～令和2年3月31日
	トリノ大学	イタリア	JASSO	令和元年10月1日～令和2年3月31日
令和4年度	トリノ大学	イタリア		令和4年4月1日～令和4年9月30日
	中国海洋大学	中国		令和4年4月1日～令和4年9月30日
	中国海洋大学	中国		令和4年4月1日～令和4年9月30日
	中国海洋大学	中国		令和4年4月1日～令和4年9月30日
	北京外国語大学	中国		令和4年4月1日～令和4年9月30日
	リヨン高等師範大学	フランス		令和4年4月1日～令和4年9月30日
	リール大学	フランス		令和4年4月1日～令和4年9月30日
	ブリュッセル自由大学	ベルギー		令和4年4月1日～令和4年9月30日
	ポンペウ・ファブラ大学	スペイン		令和4年4月1日～令和4年9月30日
	ヤゲヴォ大学	ポーランド		令和4年4月1日～令和4年9月30日
	ヤゲヴォ大学	ポーランド		令和4年4月1日～令和4年9月30日
	復旦大学	中国	JASSO	令和4年10月1日～令和5年3月31日
	国立成功大学	台湾		令和4年10月1日～令和5年3月31日
	山東大学	中国		令和4年10月1日～令和5年9月30日
	パリ・ナンテール大学	フランス		令和4年10月1日～令和5年9月30日

	パリ大学	フランス		令和4年10月1日～令和5年9月30日
	ベルリン自由大学	ドイツ		令和4年10月1日～令和5年9月30日
	リール大学	フランス		令和4年10月1日～令和5年9月30日
	トリーア大学	ドイツ		令和4年10月1日～令和5年9月30日
令和5年度	トリーア大学	ドイツ		令和5年10月1日～令和6年3月31日
	復旦大学	中国		令和5年10月1日～令和6年3月31日
	復旦大学	中国		令和5年10月1日～令和6年9月30日
	山東大学	中国		令和5年10月1日～令和6年9月30日
	南京大学	中国		令和5年10月1日～令和6年3月31日
	ヴェネツィア大学	イタリア		令和5年10月1日～令和6年3月31日
	中国海洋大学	中国		令和5年4月1日～令和5年9月30日
	南京大学	中国		令和5年4月1日～令和5年9月30日
	国立政治大学	台湾		令和5年4月1日～令和6年3月31日
	ヤゲウォ大学	ポーランド		令和5年4月1日～令和5年9月30日

※ HUMAP：兵庫・アジア太平洋大学間交流ネットワーク、JASSO：日本学生支援機構

《資料Ⅱ-16：交換留学（派遣）実績》

	派遣大学名	派遣国	奨学金	期　間
平成30年度	国立台湾大学	台湾	JASSO	平成30年9月1日～令和元年7月31日
	トリーア大学	ドイツ	JASSO	平成30年10月22日～令和元年7月12日
	バーミンガム大学	連合王国	JASSO	平成30年9月1日～令和元年6月30日
	パリ第7大学	フランス	JASSO	平成30年9月1日～令和元年6月30日
	高麗大学校	韓国	JASSO	平成30年9月1日～令和元年8月31日
	高麗大学校	韓国	JASSO	平成31年3月1日～令和2年2月29日
令和元年度	インスブルック大学	オーストリア	JASSO	令和元年10月1日～令和2年6月30日
	トリーア大学	ドイツ		令和元年10月28日～令和2年7月17日
	北京外国語大学	中国	JASSO	令和元年9月1日～令和2年1月31日
	パリ・ナンテール大学	フランス	JASSO	令和元年9月2日～令和2年6月30日
	ライデン大学	オランダ	JASSO	令和元年9月2日～令和2年1月31日
	ハンブルク大学	ドイツ	JASSO	令和元年10月1日～令和2年3月31日
	トリーア大学	ドイツ	JASSO	1年10月28日～令和2年7月17日
	トリーア大学	ドイツ	JASSO	1年10月28日～令和2年7月17日
令和3年度	カレル大学	チェコ		令和4年2月14日～令和4年6月30日
令和4年度	パリ・ナンテール大学	フランス		令和4年8月25日～令和5年7月31日
	エクス=マルセイユ大学	フランス		令和4年8月29日～令和5年1月15日
	インスブルック大学	オーストリア		令和4年10月1日～令和5年6月30日
	ニューサウスウェールズ大学	オーストラリア		令和5年2月13日～令和5年8月24日

令和 5年度	インスブルック大学	オーストリア		令和5年10月1日～令和6年6月30日
	ソウル国立大学校	韓国		令和5年9月1日～令和5年12月21日
	エクス=マルセイユ大学	フランス		令和5年9月4日～令和6年5月18日

3. ダブルディグリー・プログラム

人文学研究科は、平成27年度より北京外国語大学北京日本学研究センターとの間でダブルディグリー・プログラムを実施している。これは、博士前期課程の学生が在籍中に派遣先大学に最低1年間留学して所定の単位を修得し、北京外国語大学日本学研究センターと本研究科それぞれに修士論文を提出することによって、最短2年間で2つの学位を取得できるプログラムである。平成27年度と28年度に各1名を派遣しており、平成28年度には2名を受け入れている。

4. 連携講座

本研究科では、博士後期課程社会動態専攻に文化資源論講座を置き、奈良国立博物館や大和文華館と連携して、文化財学、文化資源学に関する教育を行い、博物館、美術館および自治体において、文化財保全、文化財行政を担当できる高度な知識を持った人材を養成している。

5. 日本語日本文化教育の取組み

本研究科では、学生が専攻する専門分野の特性を活かしながら、非日本語母語話者に対する日本語日本文化教育を行うための知識と能力を身につけることを目指す「日本語日本文化教育プログラム」《資料Ⅱ-17》を平成20年度から受講を希望する博士課程前期課程の学生を対象に展開している。平成22年度以降、主にこのプログラムの修了者を対象に、海外の大学における日本語日本文化教育インターンシップを実施している《資料Ⅱ-18》。

《資料Ⅱ-17：日本語日本文化教育プログラム授業科目》

別表　授業科目および必要修得単位数

	授業科目	単位数		合計単位数
必　修	日本語日本文化教育演習	2		12
Ⅰ群	多文化理解演習	4	2	
	日本語教育研究Ⅰ			
	日本語教育研究Ⅱ			
	日本語教育内容論Ⅰ			
	日本語教育内容論Ⅱ			
	日本語教育方法論Ⅰ			
	日本語教育方法論Ⅱ			
	日本語教育方法論Ⅲ			
	海外日本語日本文化教育実習			
Ⅱ群	日本語研究	2		
	国語学特殊研究Ⅰ			
	国語学特殊研究Ⅱ			
	国語学特殊研究Ⅲ			
	国語学特殊研究Ⅳ			
	国語学特殊研究Ⅴ			
	日本語学特殊研究			
	応用言語学特殊研究			
	認知言語学特殊研究Ⅰ			

	認知言語学特殊研究Ⅱ			
	音声学特殊研究Ⅰ			
	音声学特殊研究Ⅱ			
Ⅲ群	日本社会文化演習Ⅰ	2		
	日本社会文化演習Ⅱ			
	国文学特殊研究Ⅰ			
	国文学特殊研究Ⅱ			
	国文学特殊研究Ⅲ			
	国文学特殊研究Ⅳ			
	国文学特殊研究Ⅴ			
	国文学特殊研究Ⅵ			
	日本古代中世史特殊研究Ⅰ			
	日本古代中世史特殊研究Ⅱ			
	日本中世史特殊研究Ⅰ			
	日本中世史特殊研究Ⅱ			
	日本近代史特殊研究Ⅰ			
	日本近代史特殊研究Ⅱ			
	日本現代史特殊研究Ⅰ			
	日本現代史特殊研究Ⅱ			
Ⅳ群（国際文化学研究科科目）	日本語教育内容論特殊講義	2		
	日本語教育方法論特殊講義			
	日本語教育応用論特殊講義			
	言語コミュニケーション論演習［齊藤・川上］※			

※ 言語コミュニケーション論演習は齊藤・川上担当のものに限る。
［日本語日本文化教育演習］を2単位、Ⅰ群から4単位、Ⅱ群・Ⅲ群から各2単位、及びⅠ群・Ⅱ群・Ⅲ群・Ⅳ群のいずれかから2単位、合計12単位を必要修得単位数とする。

《資料Ⅱ-18：日本語日本文化教育インターンシップ派遣実績》

年度	派遣先機関	派遣国	期　間
平成30年度	オックスフォード大学東洋学部日本学科	連合王国	平成31年2月18日～平成31年3月8日
	ディミトリエ・カンテミル大学日本語学科	ルーマニア	平成30年11月1日～平成30年11月10日
	トリーア大学日本学科	ドイツ	平成30年11月5日～平成30年11月23日
	ハンブルク大学アジア・アフリカ研究所日本学科	ドイツ	平成30年10月1日～平成31年2月28日
	北京外国語大学日本語学科	中国	平成31年3月6日～平成31年3月26日
令和元年度	ディミトリエ・カンテミル大学日本語学科	ルーマニア	平成元年11月１日～平成元年11月22日
	ハンブルク大学アジア・アフリカ研究所日本学科	ドイツ	平成元年11月11日～平成元年11月29日
	オックスフォード大学東洋学部日本学科	連合王国	平成2年2月22日～平成2年3月12日
令和3年度	ディミトリエ・カンテミル大学日本語学科	ルーマニア	令和3年11月1日～令和3年11月26日
	トリーア大学日本学科	ドイツ	令和3年11月2日～令和3年11月19日
令和4年度	ディミトリエ・カンテミル大学日本語学科	ルーマニア	令和4年11月1日～令和4年11月30日
	ハンブルク大学アジア・アフリカ研究所日本学科	ドイツ	令和4年11月6日～令和4年12月25日
	オックスフォード大学東洋学部日本学科	連合王国	令和5年2月20日～令和5年3月10日

令和5年度	ハンブルク大学アジア・アフリカ研究所日本学科	ドイツ	令和5年11月2日～令和6年2月1日
	北京外国語大学日本語学科	中国	令和5年11月5日～令和5年11月28日

※新型コロナウイルスの影響により令和2年度は派遣なし、令和3年度はオンラインにて実施。令和4年度のハンブルク大学はオンラインにて実施したが、それ以外は現地に派遣。

6. グローバル教育への取組み

人文学研究科では、文部科学省、日本学術振興会によって採択された教育研究プログラムを通じて、国際的な場で活躍できる学生の育成をはかってきた。この目的を達成するため、研究科共通科目にグローバル教育のための科目を新たに設置するなど、教育課程を充実させてきた。平成24年度に文部科学省グローバル人材育成推進事業等に採択された「問題発見型リーダーシップを発揮できるグローバル人材の育成」プログラムに基づき、人文学研究科博士課程前期課程では、高度な国際感覚を育成するための外国語授業科目群（グローバル人文学科目群）と、「アカデミック・ライティング」など優れた外国語能力とコミュニケーション能力を育成するための授業科目群（グローバル対話力育成科目群）からなる、「グローバル人文学プログラム」を実施している。このプログラムは、すべて外国語で授業が行われており、所定の単位を取得し、「外国語力スタンダード」(TOEFL 等の外国語資格試験等における所定のスコア）を達成した者には、修了時に「グローバル人文学プログラム修了証」を授与している。

その結果、本プログラムが目的として掲げる「人文学的課題をグローバルな視点から考察し、日本文化の深い理解を基に異文化との対話を重ねながら、現代社会における諸問題を解決に導いていくリーダーシップとコミュニケーション能力を持った人材」が育っている。（「グローバル人材育成推進事業」については、第２部Ⅰ-1．運営費交付金機能強化経費：実践型グローバル人材育成事業「日本語教育・日本研究を中心とした実践型グローバル人材育成事業」を参照。）

Ⅱ-4. 教育方法

Ⅱ-4-1. 授業形態の組合せと学習指導法上の工夫

教育を展開する上での指導法の工夫として、例えば景観文化財の現地保存について北野の伝建地区に赴くなど、フィールド型授業も重視している《資料Ⅱ-19》。

《資料Ⅱ-19：「歴史地理学特殊研究Ⅰ (a)」シラバス》

開講科目名	歴史地理学特殊研究Ⅰ (a)				
成績入力担当	菊地　真			開講区分	単位数
				第3クォーター	1.0単位
ナンバリングコード		曜日・時限等	金1(対面)	時間割コード	3L591

授業のテーマ

考古学の見方・考え方と考古学の現在形

授業の到達目標

考古学に関する基礎的知識を身につけ、研究方法に学ぶこと。受講生が自ら遺跡や遺物を実見し、調べ考える好奇心を持つこと。

授業の概要と計画

対面。一部の回は、集中で実施する（11月26日(土)午後、12月17日(土)午後）。ほか2回ほど巡検を行う（決まり次第BEEFに掲載）。
みなさんにとって、考古学とはどんな学問でしょう。地面を掘って土器を発見する姿を思い浮かべる人は多いと思いますが、もちろん考古学はただ遺跡を掘るだけではありません。この授業では、現在の多彩な考古学の姿を紹介し、文学部で学ぶみなさんに、考古学の特徴や研究手法にとどまらず、人文学の諸学との近さや参照すべき可能性を示します。
［考古学の見方・考え方］考古学は過去の人類活動を明らかにし、現代へと問いかける学問です。近年の研究成果を踏まえ、人文学としての考古学のあり方を考えます（例：土器や鉄器など遺物による生活や社会の復元、遺跡の景観復元など）。考古学の手法や到達点、みなさんが学んでいる人文学の諸学の可能性を考えていきます。
［考古学の現在形］考古学は隣接諸科学と連携し、研究領域を広げてきました。今日的問題や社会的活動、特に遺跡保存を取り上げ、歩み続ける学問としての考古学のあり方を考えます。
みなさんが市民として地域歴史遺産(≒考古資料含む)に出会った時に興味関心が向く接点を、考古学は沢山持っている（と思っていますが、）側面を、是非知って頂きたいと考えています。
第1回：ガイダンス／第2-15回：日本と世界の考古学、保存問題、現代考古学、兵庫・神戸の考古学、まとめ

成績評価方法

a,bともに履修登録して下さい。毎回積極的に参加して、現在の考古学研究の実態を理解し、多角的に遺跡や遺物を自身で見られるかがポイントとなります。毎回の担当教員から課題が出るほか、期末レポートを出します。
土曜日の集中講義や、巡検への参加(課題)は、当然評価に含まれます。

成績評価基準

考古学に関する基礎的知識を身につけ、受講生が自ら遺跡等について調べ考えているか。講義内容の理解度を毎回の課題・感想・レポートで判断する（毎回課題等5割、期末5割）。

履修上の注意（関連科目情報）

集中講義を土曜日に、巡検を月曜午前や予備日に実施します。テキストを用います。
a,bともに履修登録すること。

事前・事後学修

各自で紹介された参考書を読み、遺跡や博物館で実物に触れること。

オフィスアワー・連絡先

mkikuchiｱｯﾄlit.kobe-u.ac.jp

学生へのメッセージ

考古学に興味関心があることを重視します。近年の研究動向に学びながら、実際の遺跡や遺物に対面し、想像力を働かせてください。

また実社会に応用できる能力を身につけることを目的として、実習型の授業も重視している。例えば、日本語教育に関連する基礎的知識を修得した上で、3週間にわたって実施される「神戸大学夏期日本語日本文化研修プログラム」等において実習を行うことで、異文化交流と日本語教育の実体験ができる授業を行っている《資料Ⅱ-20》。

《資料Ⅱ-20：「日本語日本文化教育演習」シラバス》

基本情報

科目分類	大学院科目	開講年次	1・2 年
時間割コード	3L836	開講区分	後期
開講科目名	日本語日本文化教育演習	曜日・時限等	火3 (ハイブリッド（対面）)
成績入力担当	阪上　彩子	単位数	2.0
授業形態	演習	ナンバリングコード	

担当教員一覧

詳細情報

■授業のテーマ

現在、日本語教育の世界は急激に多様化しており、学習のニーズ、教授法、ICTツール、評価のあり方等、様々な面で柔軟に対応できる日本語支援者が求められています。この授業ではそのような現状を踏まえ、今の時代に求められている日本語支援者の育成を目指します。

■授業の到達目標

①日本語教師としての仕事、役割を理解することができる
②学習者や到達目標を考えて、日本語の授業を組み立てることができる
③日本語教材の特徴、例えばシラバスや対象者について説明できる。
④CEFRが生まれた背景やCEFRの理念を説明できる。
⑤学習者によってどの評価法を利用するか選択することができる。

■授業の概要と計画

①本演習はハイブリッド(対面授業と遠隔授業を併用した形)で実施します。具体的な各回の内容は以下のとおりです。なお、新型コロナウイルス感染拡大により授業形態が変更となった場合は Beef でお知らせします。
②授業の概要と計画：
第１回：（対面：教室）授業の概要説明／日本語教育の現状と日本語教員の役割
第２回：（対面：教室）コースデザイン
第３回：（対面：教室）シラバス
第４回：（対面：教室）日本語教材分析
第５回：（リアルタイム型授業(使用システム:Zoom)詳細は Beef にて指示します。）発表
第６回：（対面：教室）日本語教授法
第７回：（対面：教室）JF日本語教育スタンダード
第８回：（リアルタイム型授業(使用システム:Zoom)詳細は Beef にて指示します。）Can-Doを作る
第９回：（対面：教室）CEFR①
第10回：（対面：教室）CEFR②
第11回：（対面：教室）CEFR③
第12回：（対面：教室）評価とテスト
第13回：（リアルタイム型授業(使用システム:Zoom)詳細は Beef にて指示します。）発表①
第14回：（リアルタイム型授業(使用システム:Zoom)詳細は Beef にて指示します。）発表②
第15回：（リアルタイム型授業(使用システム:Zoom)詳細は Beef にて指示します。）発表・全体のふりかえり

■成績評価方法

小テスト15%、発表2回30%、課題25%、コメントシート15%、授業への参加度15%で評価する。

学生に対する指導体制は、前期課程、後期課程ともに入学時から主指導教員が履修状況をチェックし、個別に指導を行う一方、他専攻の教員1名を含む副指導教員2名を配し、計3名の指導教員が協力して指導に当たっている。学生は『学生便覧』に明記されている学修プロセスに従って修士論文研究計画書、博士論文作成計画書などを提出する。令和4年度からは、年度初めに主指導教員が「研究指導計画書」を提出する段階を新たに設けることで指導の更なる充実を図っている《資料Ⅱ-21》。また、正副研究科長、正副大学院委員と各教育研究分野の代表で構成される学修プロセス委員会は、学位論文作成に向けて指導が適切に行われているかを検証するとともに、学修プロセスの見直しを適宜行っている。

令和5年度も、学修プロセスにしたがって前期課程公開研究報告会（前期課程2年次）、後期課程公開研究報告会（後期課程2年次）、博士予備論文公開審査（後期課程3年次）が実施され、該当する学生のその時点における研究成果を踏まえて指導が行われた。

《資料Ⅱ-21：学修プロセスフロー》

人文学研究科学生の学修プロセスフロー図

年次	時期	事項
【博士課程前期課程】		
１年次	4月20日まで	■「前期課程研究指導計画書」提出（主指導教員）
	5月20日まで	「修士論文研究計画書」提出
２年次	4月10日まで	■ 修士準備論文を1部提出
	4月20日まで	■「前期課程研究指導計画書」提出（主指導教員）
	6月第3水曜日	前期課程公開研究報告会
	前期課程公開研究報告会の翌週の金曜日	■「前期課程公開研究報告会終了報告書」を提出（主指導教員）
	11月16日まで	■「修士論文題目届」提出
	1月16日まで	■ 修士論文を1部提出
	2月中旬	最終試験
	3月上旬	博士課程前期課程修了判定
	3月下旬	学位記授与式
【博士課程後期課程】		
１年次	4月20日まで	■「後期課程研究指導計画書」提出（主指導教員）
	5月31日まで	「博士論文作成計画書」提出
２年次	4月20日まで	■「後期課程研究指導計画書」提出（主指導教員）
	7月 1日まで	■「後期課程公開研究報告会発表題目」を提出（主指導教員）
	9月30日	後期課程公開研究報告会
	10月10日まで	■「後期課程公開研究報告会終了報告書」提出（主指導教員）
３年次	4月20日まで	■「後期課程研究指導計画書」提出（主指導教員）
	5月31日まで	■ 博士予備論文を3部提出
	6月最終水曜日または7月第1水曜日	博士予備論文公開審査
	博士予備論文公開審査の翌週の金曜日	■「博士予備論文公開審査報告書」提出（主指導教員）
	12月 1日～12月10日	■ 博士論文を5部提出
	1月～2月	最終試験
	3月上旬	博士課程後期課程修了者（学位授与）認定
	3月下旬	博士学位授与

備考：＿＿＿は、学生が提出するもの。
■は教務学生係に提出するもの。
博士課程前期課程9月修了者の修士論文題目は5月15日まで、修士論文提出は7月15日まで。
博士課程後期課程9月修了者の博士論文提出は、7月1日から7月10日まで。
（注）時期が休日にあたる時は、その前日とします。ただし、修士論文提出については、その翌日とします。各年度の時期については、前年度の12月に掲示により通知します。

学位論文の提出条件・作成要領は、人文学研究科博士課程後期課程の一期生が学位論文を提出するのに合わせて、平成21年度に「学位論文受理条件（申し合わせ）」および「学位論文等作成要領」を作成して明文化し、学生に周知した《資料Ⅱ-22》《資料Ⅱ-23》。

《資料Ⅱ-22：学位論文受理条件（申し合わせ）》

論文博士［平成21年11月より適用］
原則として、出版されている研究書あるいは出版が内約されている研究書であること。出版が予定されていない場合には、2本以上の査読誌掲載論文を含んでいること。後者の場合、学位取得後1年以内に電子媒体サービス等を利用して公開すること。

課程博士［平成22年４月入学者より適用］
（1）学位論文の内容を、査読誌ないしはそれに準ずる研究誌に掲載していること（採択済みも含む）。なお、主指導教員が所属している教育研究分野でしかるべき規定を設けている場合には、この規定に加えて、当該教育研究分野の規定を尊重する。
（2） 特段の理由がない限り、電子媒体サービス等を利用して、学位論文を学位取得後1年以内に公開すること。

《資料Ⅱ-23》：学位論文等作成要領》

学位論文の審査を願い出る者は、この作成要領に従って以下の書類を用意提出すること。

1　申請書類について
次に掲げる書類等を主指導教員を経て研究科長に提出するものとする。ただし、提出にあたっては、必ず主指導教員及び教務学生係の点検を受けること。

（1）学位論文審査願	1部
（2）学位論文提出承認書	1通
（3）論文目録	1部
（4）学位論文	5部
	1部（電子データ）
（5）論文内容の要旨（4,000字程度、日本文による）	7部
	1部（電子データ）
（6）履歴書	1部
（7）参考論文	1部

2　学位論文について
・ 製本すること。（簡易製本可）
・ 規格は自由であるが、Ａ４版が望ましい。
・ 表紙には、提出日、論文題目等を明記すること。
・ 提出後は、訂正、差し替えができないので、誤字、脱字等がないように注意すること。
・ 外国語による論文の場合は、提出論文の扉に、論文題目とその和訳（括弧書き）を併記すること。
・ 共著論文のうち、次の条件を満たしているものは、学位論文として受理することができる。
① 論文提出者が研究及び論文作成において主たる役割を務めていること。
② 学位論文の共著者から、当該論文を論文提出者の学位論文とすることについての承諾書が得られること。（別紙承諾書添付）
・電子データについてもメールにて提出すること。

3　論文目録について
（1）題目について
① 題目（副題を含む）は、提出論文のとおり記載すること。
② 外国語の場合は、題目の下にその和訳（括弧書き）を併記すること。
（2）印刷公表の方法及び時期について
① 公表は、単行の書籍又は学術雑誌等の公刊物（以下「公表誌」という。）に登載して行うものであること。

② 論文全編をまとめて公表したものについては、その公表年月、公表誌名（雑誌の場合は、巻・号）又は発行書名等を記載すること。また、論文を編・章等の区分により公表したものについては、それぞれの区分ごとに公表の方法・時期を記載すること。
③ 学位論文（編・章）について、別の題目で公表した論文をもって公表したものとする場合は、その題目（公表題目）を（　　）を付して併記すること。
④ 未公表のものについては、次の記載例を参照の上、その公表の方法、時期の予定を記載すること。

（記載例）
イ すでに出版社等に提出し、出版が内約されている場合。
題目　○○○○○○○○○　○○○出版社から令和○○年○○月　刊行予定

ロ すでに投稿し、学会等において、掲載期日が決定しているが、申請手続の時点において、印刷公表されていない場合。
題目　○○○○○○○○○　○○○学会誌○巻○号
令和○○年○○月○○日　掲載予定
ハ 現在投稿中の場合。
題目　○○○○○○○○○　○○○学会誌　投　稿　中
令和○○年○○月○○日　投稿済
ニ 近く投稿する予定の場合。
題目　○○○○○○○○○　○○○学会誌
令和○○年○○月投稿予定

⑤ 共著の場合は必ず共著者名を付記すること。
（3）冊数について
学位論文1通についての冊数を記載すること。
（4）参考論文について
すでに学会誌等に発表した論文題目を記載し、その論文を添付すること。

4 履歴書について
（1）氏名について
戸籍のとおり記載し、通称・雅号等は一切用いないこと。（旧姓でも可）
（2）学歴について
① 高等学校卒業後の学歴について年次を追って記載すること。
② 在籍中における学校の名称等の変更についても記載すること。
（3）職歴・研究歴について
原則として常勤の職について、機関等の名称、職名等を正確に年次を追って記載すること。ただし、学歴と職歴に空白となる期間があり、非常勤等の職歴がある場合はこれを記入し、職歴等に不明な期間がないように記載すること。
（4）賞罰について
特記すべきと思われるものを記載すること。

5 論文内容の要旨について
記載方法については、記入例を参照。

ティーチングアシスタント（TA）は、授業の必要性に応じて適宜配置している《資料Ⅱ-24》。TA 採用者に対しては「TA ハンドブック」を配布するとともに、授業担当者から個別にガイダンスを行っている。

《資料Ⅱ-24：TA の人文学研究科への配置実績（平成27～令和5年度、単位：人）

	講義科目	演習・実習科目等
平成27年度	2	15
平成28年度	1	10

平成29年度	2	15
平成30年度	4	9
令和元年度	1	17
令和2年度	0	12
令和3年度	4	19
令和4年度	4	11
令和5年度	6	9

Ⅱ-4-2. 主体的な学習を促す取組

シラバスは、すべてウェブサイト上に公開しており、担当教員名、講義目的、授業内容、成績評価・基準、準備学習等についての具体的な指示、教科書・参考文献、履修条件等の履修情報を掲載し、学習の便宜を図っている。履修科目登録にあたっては、指導教員が点検し、学生の意欲や関心に沿った履修を促している。シラバスに参考文献や授業の履修条件を適宜示すことにより、学生の主体的学修を促している。また、オフィスアワーや連絡先が各教員のシラバスに記載されており、授業時間外に学修・学生生活に関する質問・相談に応じている。

大学院生の学習意欲を高めるために、海外での研究発表や調査・実験を行う機会を提供している。特に後期課程の大学院生に対しては、特に海外で開催される学会への参加について、大学院学生海外派遣援助事業などを活用して支援してきた《資料Ⅱ-25》《資料Ⅱ-26》。また、海港都市研究センターは、台湾・大韓民国・中華人民共和国の大学と連携して、大学院生の研究発表を中心とする国際シンポジウム（海港都市国際シンポジウム）を継続的に開催している。平成29年度には提携校と連携して国際シンポジウムを開催し、大学院生の海外派遣を行った。令和2年度と令和3年度は新型コロナウィルスの影響で海外派遣がストップしていたが、令和4年度には再開することができた。

《資料Ⅱ-25：平成28年度から令和5年度までの、大学からの資金援助を得た海外派遣件数》

	平成28年度	平成29年度	平成30年度	令和元年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度	令和5年度
件数	13	12	18	11	0	0	3	5

《資料Ⅱ-26：令和5年度における大学からの資金援助を得た海外派遣》

教育研究分野	派遣先	派遣目的	発表論文名
国文学	北京外国語大学（中国）	令和5年度日本語日本文化教育インターンシップ活動	
芸術学（2名）	パリ大学ナンテール校（フランス）	パリ・大阪・神戸三大学共同シンポジウム参加	
芸術学	ミナス・ジェライス連邦大学、サンパウロ美術館等（ブラジル）	次世代研究者挑戦的研究プログラムによる学会参加、調査	
芸術学	サン・パウロ大学等（ブラジル）	次世代研究者挑戦的研究プログラムによる調査、資料収集	

環境面では、平成19年度の学舎改修に際して学生用スペースを拡張したが、平成22年度以降にはラーニングコモンズの設置、情報処理室の拡充などを行うことで、《資料Ⅱ-27》のように主体的な学修を促す環境を整備している。

《資料Ⅱ-27：主体的な学習を促す環境の整備項目》

施設等	概要
図書館 （日本文化資料コーナー）	人文学研究科・文学部の人文科学図書館は書籍約33万冊を有し、毎年確実に蔵書数を増やしている。授業期間中は、平日（8時45分～19時）および土曜日（10～18時）、試験期間中は、平日の夜間（21時まで）も開館している。（注：令和4年度は COVID-19の影響により時間短縮・臨時閉館などの措置が随時なされた。また現在、日祝日は閉館している）
	「日本文化資料コーナー」を設けて資史料、貴重図書、レファランス類を集中的に配架し、複数の辞書類・資料を同時に縦覧する必要がある歴史・文学系等の学生の利便を図っている。
学生用 共同研究室	学生が個人あるいはグループで調査・研究するために使用できる「共同研究室」を教育研究分野ごとに設置し、学生の自主学習に配慮している。共同研究室には辞書や専門書等も整備されており、学生はここで授業の予習や復習、研究発表のための資料作成などを行うことができる。
コモンルーム	学生がグループ学習や研究会などのために自由に使用することのできる「コモンルーム」を3ヵ所設置し、学生の自主学習へ配慮している。ホワイトボードを使っての議論の場として活用したり、研究発表や面接の練習をしたりするなどさまざまな形で使われている。
共同談話室	教員と学生が共同研究、読書会など行うために使用することができる「共同談話室」を5ヵ所設置し、自由な共同学習や演習等の授業に活用している。各種の読書会、研究会の会合などが活発に行われている。
情報機器	学生が利用できるコンピューターを人文科学図書館に16台設置するとともに、各専修の共同研究室や実験室などにも適宜配置している。実習などの授業のほか、学生の自主学習に利用されている。
教育機器	視聴覚機材を平成21～23年度にＢ棟、平成24年度はＣ棟にも設置し、ほとんどの教室で視聴覚機材（プロジェクター、スクリーン、DVD など）を活用した授業ができるようになった。Web カメラなどの遠隔設備を数か所に導入し、双方向の遠隔授業を可能とするなど、機器の更新を随時行っている。
ラーニング コモンズ	自由に机と椅子を組み合わせ、図書館資料を自在に使用し、グループで議論しながら学習を進めることのできるスペースとして、「ラーニングコモンズ」が人文科学図書館に設置された。平成25年度から運用が始まり、自主学習や演習等の授業に活用されている。

Ⅱ-5. 学業の成果

Ⅱ-5-1. 学生が身に付けた学力や資質・能力

本研究科博士課程前期課程の学位取得等の状況は、《資料Ⅱ-28》のとおりである。ここ数年、人文学研究科博士課程前期課程の入学者の標準修業年限（2年）内修了者の比率は、平均約80％となっている。本研究科博士課程後期課程の学位取得状況は《資料Ⅱ-29》のとおりである。平成19年度の人文学研究科への改組以後は、修業年限（３年）内の学位取得者の比率は平均約20％となっている。令和5年度の修士学位論文題目を《資料Ⅱ-30》に、博士学位論文題目を《資料Ⅱ-31》に示した。また、専修教育職員免許状の取得状況は《資料Ⅱ-32》のとおりである。

多数の学生が国際学会や全国規模の学会等で研究成果を発表し、優秀論文賞を受賞するなど、在学生の研究成果が各種学会等において高く評価されている《資料Ⅱ-33》。

《資料Ⅱ-28：人文学研究科（博士課程前期課程）の修士学位取得状況一覧 令和5年3月現在》

入学年度 (標準修業年度)	入学者数 (a)	修了者数 (b)	(内数)標準年限内修了者数 (c)	標準年限内修了率 (c/a)
平成30年（令和元年）	42	40	33	78.6%
平成31年（令和2年）	45	47	36	80%
令和2年（令和3年）	40	43	36	90%
令和3年（令和4年）	43	37	33	76.7%
令和4年（令和5年）	49	46	44	89.8%

《資料Ⅱ-29：人文学研究科（博士課程後期課程）の博士学位取得状況一覧 令和5年3月現在》

入学年度 (標準修業年度)	入学者数 (a)	修了者数 (b)	(内数)標準年限内修了者数 (c)	標準年限内修了率 (c/a)
平成29年（令和元年）	23	12	4	17.4%
平成30年（令和2年）	19	16	4	21.1%
平成31年（令和3年）	20	14	4	20.0%
令和2年（令和4年）	15	15	3	20.0%
令和3年（令和5年）	17	8	3	17.6%

《資料Ⅱ-30：令和5年度人文学研究科博士課程前期課程修了者の修士論文題目》

専攻	教育研究分野	論文題目
文化構造専攻	哲学	アリストテレス『ニコマコス倫理学』における幸福と徳の関係について
	倫理学	過ぎ去りし〈他なるもの〉への「方向付け(orientation)」――60 年代レヴィナスにおける形而上学の現象学的方法――
	倫理学	ゲノム編集の人体応用における女性の状況についての考察――ケアの倫理の視点から――
	倫理学	遺伝子編集における自律性について
	国文学	『吾妻鏡』における武士表象―鎌倉幕府草創期を中心に―
	国文学	石川淳研究――その思想と想像力の軌跡
	国文学	北原白秋論――近代の詩と国語――
	国文学	金史良作品論－－初期作品における民衆表象を中心に
	国文学	坂口安吾の作品群におけるカタカナ表記使用の変遷とその効果
	国文学	『平家物語』における文覚説話について―延慶本を中心に―
	中国・韓国文学	厳歌苓作品におけるクィア叙事　ー『白蛇』を中心にー
	中国・韓国文学	「安楽郷」から「美楽地」へ―郭強生『断代』の新しさと存続性
	中国・韓国文学	1920 年代中国における市民階級の女性イメージ-張恨水の初期代表作を中心に-
	中国・韓国文学	唐詩における楊貴妃像の推移と発展―李白、杜甫、白居易、張祜を中心に
	英米文学	Tolstoy on Shakespeare
	英米文学	The Death in *Romeo and Juliet* - Comparative Analysis between Shakespeare and Arthur

		Brooke -
	英米文学	Reconsidering Domesticity in the Two Domestic Novels of Asian American Women Writers: Margaret Dilloway's *How to Be an American Housewife* and Ruth Ozeki's *My Year of Meats*
	ヨーロッパ文学	ジュリアン・グラック研究
	ヨーロッパ文学	ゾラ『ジェルミナール』研究―カトリーヌの死をめぐって―
	ヨーロッパ文学	ミシェル・トゥルニエ研究
社会動態専攻	日本史学	中世後期鵤荘における荘園制と在地社会―名体制の再編と検断権を中心に―
	日本史学	日本古代における人名の機能と使用実態に関する基礎的研究
	日本史学	明治初期における「学事」の創出過程　―第二次兵庫県と神田孝平を事例に―
	日本史学	中世丹波国波々伯部保に関する一考察-構造・伝領・神領興行-
	日本史学	戦国大名今川氏の三河支配における支城領の特質
	日本史学	昭和前期の情報宣伝政策と「特攻」報道
	東洋史学	1900 年代初頭大韓帝国におけるイギリスの動向-遂安金鉱特許獲得交渉及び第二回日英同盟協約を中心に
	西洋史学	ヴィシー政権期パリのユダヤ人迫害と住宅問題 ―サン・ジェルヴェ地区を例に
	西洋史学	古典期の戦場におけるギリシア人の演説と兵士の士気との関係性について―『アナバシス』とその他の記述から―
	西洋史学	１９世紀フランス社会における「自称貴族」と系譜学者
	西洋史学	14 世紀黒海におけるヴェネツィアの活動 ―キプチャク・ハン国君主との関係に注目して―
	心理学	The influence of parasocial relationships on purchase intention: Based on self-related brand perception
	心理学	終わりを認識することが感情と行動に及ぼす影響
	言語学	日韓両言語における文末ヘッジ表現の比較ー思考述語と様態表現を中心にー
	言語学	チェコ語を母語とする日本語学習者による修飾句のプロソディー
	芸術学	デカルトにおける「想像力」概念の美学的射程
	芸術学	ジャスパー・モリソンの「スーパー・ノーマル」についての考察
	社会学	中国人学生の日本留学―ライフスタイル移住の観点からの考察―
	社会学	中国メディア空間における「農村」イメージの生成と変遷―「土味文化」に注目して―
	社会学	在日ロシア人夫婦が参加する親コミュニティの特性と機能―ロシア語教室を中心に―
	社会学	在日ロシア人の若者はどう生きるのか―高学歴若者のライフクラフティングプロセスを考察して―
	社会学	2000 年代以降におけるライフスタイル移民としての「新・新華僑」ー移動・生活・次世代教育を中心とした聞き取り調査からー

	社会学	教師への信頼と専門性／専門職性――教師と保護者の関わりに焦点を当てて
	社会学	1980 年代以降の日本における「Working Woman」のイメージの変遷-実用情報誌『日経WOMAN』から-
	社会学	中国における女権主義者たちの家族と生活
	美術史学	19 世紀初頭のフランスにおける「Intérieur」と「Troubadour」の流行-アングル《システィーナ礼拝堂のピウス 7 世》を中心に-
	美術史学	20 世紀中国の労働者版画について―陳煙橋の作品を中心に

《資料Ⅱ-31：令和5年度人文学研究科博士課程後期課程修了者の博士論文題目》

専攻	教育研究分野	博士論文題目
文化構造専攻	哲学	アリストテレスの政治哲学における個人とポリス共同体の関係について
	国文学	古井由吉論――その文学的展開と方法論的試行錯誤の記述
	国文学	北朝離宮和歌の研究―洛西の歌壇と京極派の表象空間―
社会動態専攻	日本史学	近世大坂の出版統制と書物・出版環境
	日本史学	近代日本における初期社会主義運動の研究―中央と地方の関係から―
	日本史学	日本古代地域支配機構の研究
	言語学	チャハルモンゴル語の音声学・音韻論的研究
	芸術学	Analyzing the “Cultural Identity” of Videogames ー Through the Comparison Between Final Fantasy and The Witcher Game Series （ビデオゲームにおける「文化的アイデンティティ」の分析ーファイナルファンタジーゲームシリーズとウィッチャーゲームシリーズの比較を通じて）

《資料Ⅱ-32：教育職員免許（専修免許状）取得状況》

	平成29年度	平成30年度	令和元年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度	令和5年度
取得者数	9	8	2	3	8	2	11

《資料Ⅱ-33：平成23～令和5年学生受賞者一覧》

氏名	所属（受賞時）	成績功績等の概要
李瑩瑩	人文学研究科 博士課程後期課程	論文「上代漢字文献における「矣」の用法」が、平成23年度漢検漢字文化研究奨励賞・佳作（財団法人 日本漢字能力検定協会）を受賞した（平成23年度）。
八木彩乃	人文学研究科 博士課程前期課程	グローバル COE「心の社会性に関する教育研究拠点」総括シンポジウム「心はなぜ、どのように社会的か？ ～フロンティアとアジェンダ～」（平成24年3月17日開催）で若手ポスターアワードを受賞した（平成23年度）。
大杉千尋	人文学研究科 博士課程後期課程	論文「イーゼンハイム祭壇画《キリスト復活》に関する一考察 ―「オランス型」キリストの機能をめぐって」により、第12回美術史論文賞を受賞した（平成26年度）。
Charis Eisen	人文学研究科 博士課程後期課程	選択がないような状況における人々の行動の文化差および自己観による影響を検討した研究内容が独創性や発展性の面で高く評価され、日本社会心理学会の若手研究者奨励賞を受賞した。（平成27年度）
竇新光	人文学研究科 博士課程後期課程	中国国家優秀自費留学生賞を受賞した（平成28年度）。

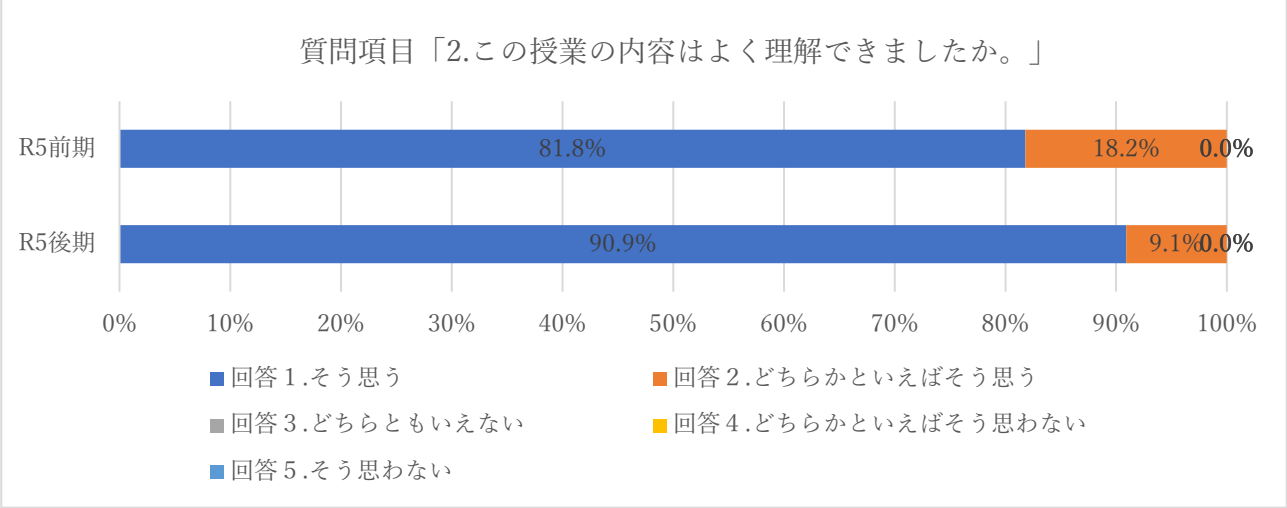
王輝锴	人文学研究科 博士課程後期課程	中国国家優秀自費留学生賞を受賞した（平成28年度）。
Charis Eisen	人文学研究科 博士課程後期課程	学術研究活動において、国際的規模又は全国的規模の学会から賞を受けたものとして本学の学生表彰を受けた（平成28年度）。
田中大貴	人文学研究科 博士課程後期課程	日本人間行動進化学会第9回大会（平成28年12月10日-11日）で行ったポスター発表に対して若手奨励賞を受けた（平成28年度）
川上恵理	人文学研究科 博士課程後期課程	美術史の分野では新人の登竜門である鹿島美術財団の優秀賞を受賞した（平成29年度）。
佐々木純哉	人文学研究科 博士課程前期課程	権威のあるグレンツェンピアノコンクール第 9 回全国大会の大学・一般コースにおいて、金賞（最高位）を獲得したことにより本学の学生表彰を受けた（平成29年度）。
德宮俊貴	人文学研究科 博士課程後期課程	関西社会学会第 70 会大会での研究報告に対して、奨励賞を受けた（令和元年度）。
大塚優美	人文学研究科 博士課程後期課程	美術史の分野では新人の登竜門である鹿島美術財団の財団賞を受賞した（令和5年度）。
河本真夕	人文学研究科 博士課程後期課程	論文「ナバレーテ・エル・ムード《聖ヤコブの殉教》–描かれた涙とエル・エスコリアル修道院聖具室との関連」で美術史学会の『美術史』論文賞を受賞した（令和5年度）。

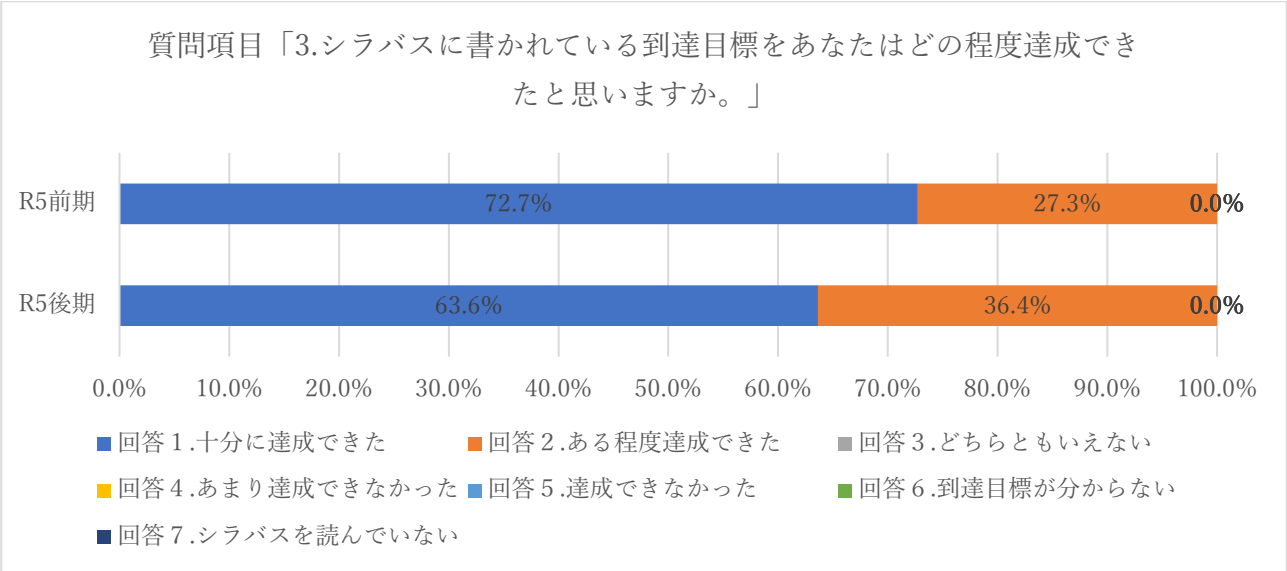
Ⅱ-5-2. 学業の成果に関する学生の評価

「授業評価アンケート」令和5年度の結果では、教育の成果や効果に関する質問項目の「この授業の内容はよく理解できましたか。」については、年間を通じて最上点と次点の回答者の合計がほぼ100%というきわめて高い評価を得ている。「シラバスに書かれている到達目標をあなたはどの程度達成できたと思いますか。」も同様に、後期に関する最上位の評価がやや低いものの、年間を通じては最上位と次点の回答者の合計がほぼ100%という理想的な回答を得ている。**《資料Ⅱ-34》**。

また、令和5年度の修了時アンケートでは、「様々な場面において、状況を適切に把握し主体的に判断する力」、「能動的に学び、新たな発想を生み出す力」に関して、身についたという回答が多く得られた。「複数の言語で異なる文化の人々と意思を通じ合うことができる力」については、大いに身についた・どちらかといえば身についたという回答が78%とやや少ないものの、令和4年度までの「外国語の運用・表現能力」についての同様の回答が65%であったことからすれば、上昇している点は評価できる。コロナ後の留学、国際交流の機会の増加が好影響を与えているといえるだろう**《資料Ⅱ-35》**。同様に、大学院での外国語の運用・表現能力についても、身についたという回答が78%と上昇しているが、一方で、全く身につかなったとする回答が15.2%と、前年度とほぼ同数みられる。今後、その原因を考えてゆく必要があるだろう。

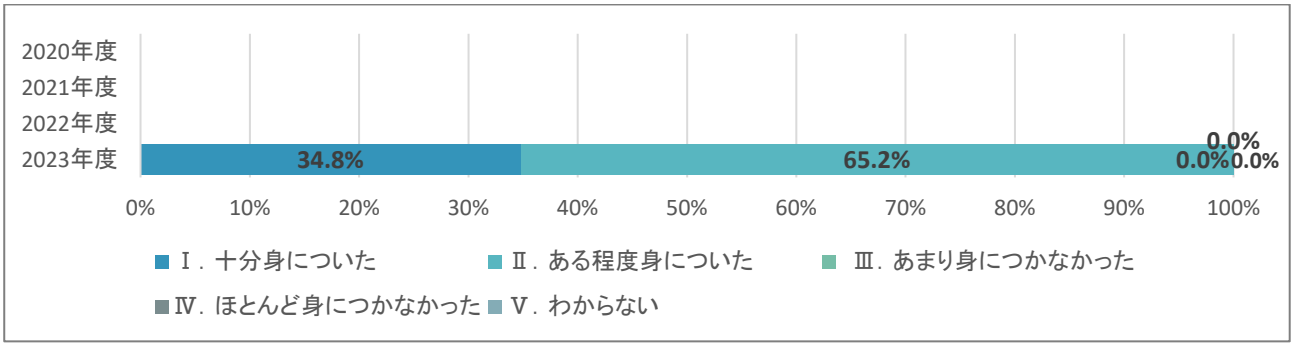
《資料Ⅱ-34：「令和5年度　授業評価アンケート」結果（抜粋）》



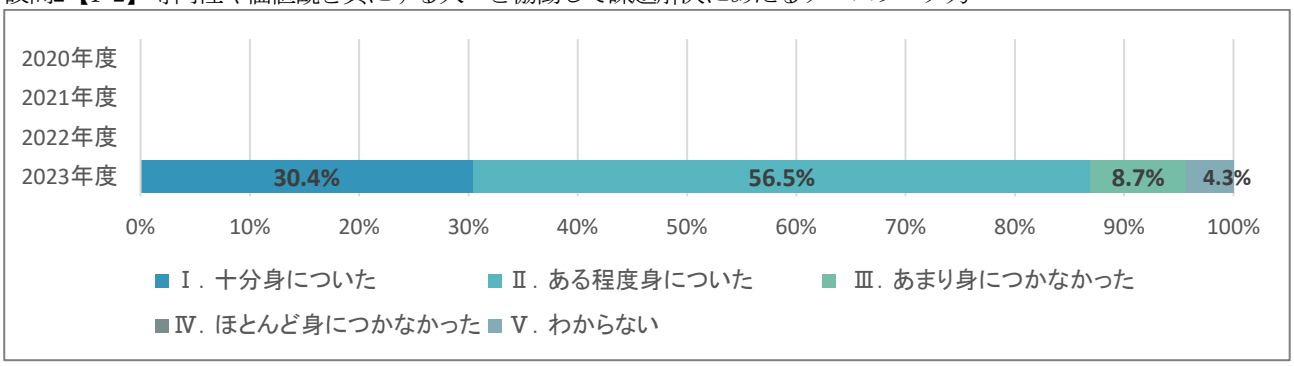


《資料Ⅱ-35　令和5年度人文学研究科修了時アンケート」結果（抜粋）》

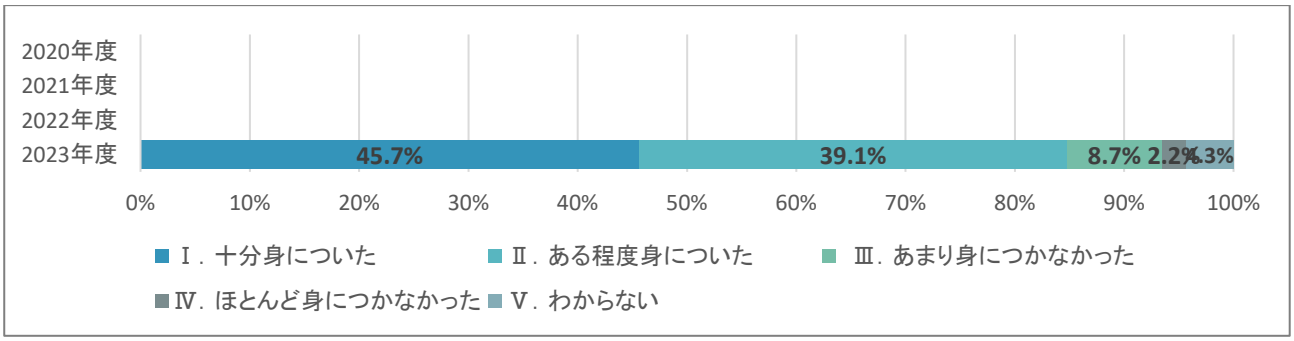
設問1【1-1】様々な場面において、状況を適切に把握し主体的に判断する力



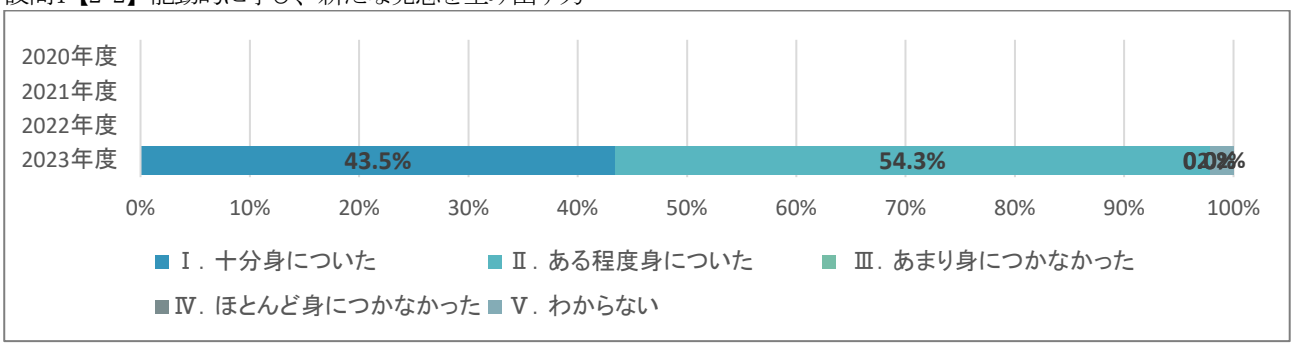
設問2【1-2】専門性や価値観を異にする人々と協働して課題解決にあたるチームワーク力



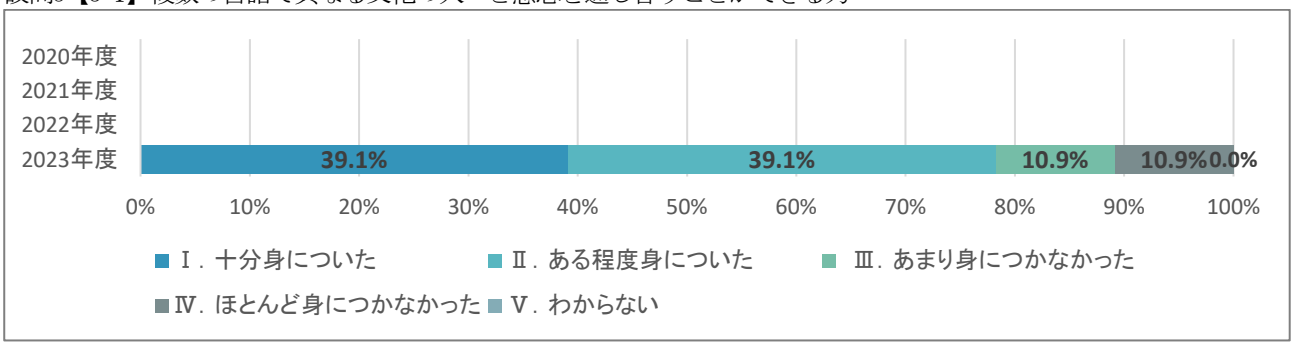
設問3【2-1】他の学問分野の基本的なものの考え方を学び、自らの専門分野との違いを理解する力



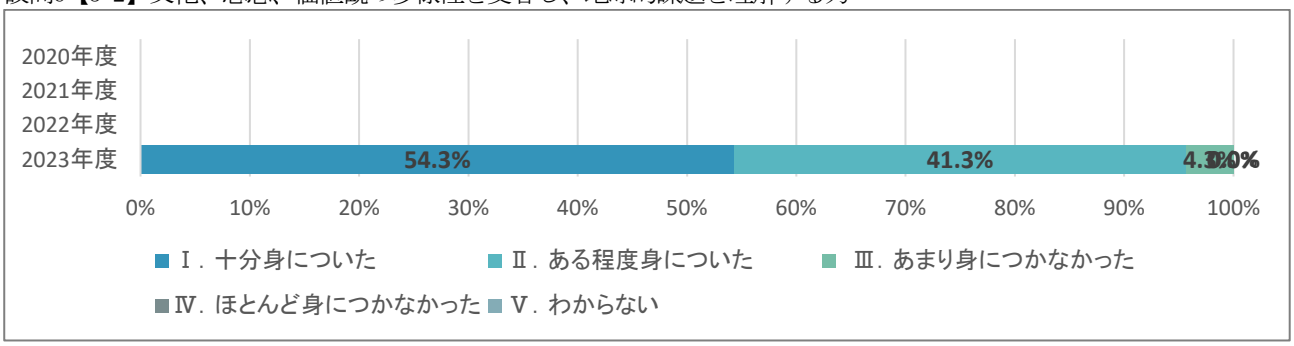
設問4【2-2】能動的に学び、新たな発想を生み出す力



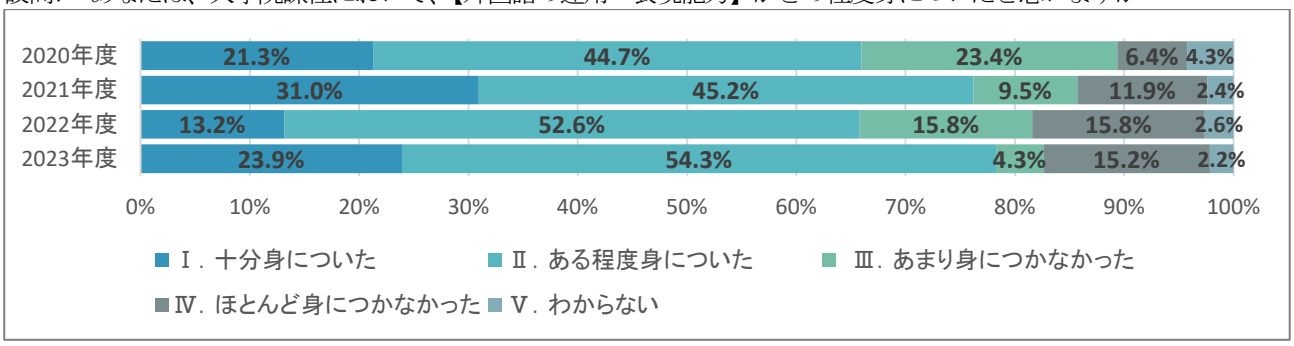
設問5【3-1】複数の言語で異なる文化の人々と意思を通じ合うことができる力



設問6【3-2】文化、思想、価値観の多様性を受容し、地球的課題を理解する力



設問7　あなたは、大学院課程において、【外国語の運用・表現能力】がどの程度身についたと思いますか



Ⅱ-6. 進路・就職の状況

Ⅱ-6-1. 修了後の進路の状況

人文学研究科博士課程前期課程の就職率・進学率は《資料Ⅱ-36》、進路状況は《資料Ⅱ-37》のとおりである。進路就職先としては教育・研究関係や公務員など、本研究科の教育成果が活かされる職種に就く者も多いが、近年は一般企業に就職する者も一定数いる。就職希望者の就職率は、一時的に減少傾向にあるが比較的安定しており、前期課程修了が社会で働く上でハンディにはなっていないことがうかがえる。

《資料Ⅱ-36：人文学研究科（博士課程前期課程）修了者の就職率・進学率》

修了年度	修了者数	進学者	就職者	就職希望者	進学率	就職希望者の就職率
令和元年度	40	14	20	23	35.0%	87.0%
令和2年度	47	7	22	40	14.9%	85.1%
令和3年度	43	13	19	26	30.2%	73.7%
令和4年度	37	10	19	26	27.0%	73.0%
令和5年度	51	14	21	37	27.5%	56.8%

《資料Ⅱ-37：人文学研究科修了生（博士課程前期課程）の進路状況》

卒業年度	一般企業	学校教育・その他教育	国家公務員・地方公務員	進学者
令和元年度	13	5	2	14

令和2年度	16	5	1	7
令和3年度	12	7	0	13
令和4年度	14	2	4	9
令和5年度	12	7	2	14

人文学研究科博士課程後期課程の修了者の就職先（常勤職）は、《資料Ⅱ−38》のようになっている。常勤研究・教育職への就職は昨今の日本において極めて厳しいのが現実であるが、国内外の大学の教員、各種研究機関の研究員、博物館等の学芸員など、専門を生かした職業に就く傾向にある。また、《資料Ⅱ−39》に示すように数年単位で見れば日本学術振興会特別研究員（PD）に採用された者も少なくない。また本研究科は、《資料Ⅱ−40》のように、各種研究プロジェクトに優秀な大学院生を一定数リサーチアシスタントとして採用しているほか、《資料Ⅱ−41》のように、若手研究者を支援する目的で、標準修業年限内に修了した学生を人文学研究科や文学部の非常勤講師として２年間を限度に採用している。さらに、日本学術振興会の教育改革支援プログラムなどの経費によって学位取得者を学術推進研究員として採用している。このような形で、博士号取得後の若手研究者の研究キャリアを支援している。

《資料Ⅱ−38：人文学研究科（博士課程後期課程）修了者の進路（常勤職のみ）》

修了年度	大学教員	各種研究機関研究員	博物館・美術館等学芸員	中学校・高等学校教員	日本学術振興会特別研究員	本研究科研究員	その他
令和元年度	3	0	0	0	0	0	1
令和2年度	4	0	0	1	1	0	1
令和3年度	1	0	0	0	0	0	2
令和4年度	1	0	0	0	0	0	1
令和5年度	0	0	0	0	0	0	0

《資料Ⅱ−39：日本学術振興会特別研究員採用数》

年度	PD	DC
令和元年度	4	8
令和2年度	4	7
令和3年度	4	6
令和4年度	2	4
令和5年度	1	6

《資料Ⅱ−40：リサーチアシスタント採用者数》

年度	採用者数	備考
令和元年度	2	本部からの配分のみ
令和2年度	6	本部からの配分のみ
令和3年度	5	本部からの配分のみ
令和4年度	4	本部からの配分のみ
令和5年度	8	本部からの配分のみ

《資料Ⅱ-41：標準修業年限内学位論文提出者への支援（新規採用）》

論文提出年度	教育研究分野	職名
令和元年度	言語学 日本史学 社会学	非常勤講師 非常勤講師 非常勤講師
令和2年度	哲学 社会学 社会学	学術研究員、非常勤講師 学術研究員、非常勤講師 非常勤講師
令和3年度	該当者無	
令和4年度	哲学 言語学	学術研究員、非常勤講師 学術研究員
令和5年度	倫理学	非常勤講師

Ⅲ．研究（文学部・人文学研究科）

Ⅲ-1．文学部・人文学研究科の研究目的と特徴

文学部・人文学研究科は、人文学すなわち人間と文化に関わる学問を扱い、哲学・文学・史学・言語学・行動科学などの人文系諸科学を包括している。以下に文学部・人文学研究科の研究目的、組織構成、研究上の特徴について述べる。

Ⅲ-1-1．研究目的

1．文学部・人文学研究科は、人類がこれまで蓄積してきた人間・文化および社会に関する古典的な文献の原理論的研究並びにフィールドワークを重視した社会文化の動態的分析を通じ、新たな社会的規範や文化の形成に寄与する研究を行うという目的を掲げている。
2．この研究目的を達成するため、現行の中期目標に「卓越した研究成果を世界に発信するとともに、現代社会が抱える様々な課題にも取り組む」ことを定めている。
3．また「既存の学術分野の深化・発展と学際的な分野融合領域の開拓だけでなく、未来社会を見据えた重点分野における先端研究を展開し、さらに、将来これらの研究を担う優れた若手研究者の養成・輩出に努める。」という中期目標に沿って複数の専門分野から成る教育研究組織を活用した共同研究を行うとともに、「多様で広範なレベルで国際・地域社会との連携を強め、教育研究活動の成果を広く社会に還元する。」という中期目標に沿って専門分野の業績を一般向けに解説した著書等で研究成果を広く社会へ発信する。
4．以上を通して、当該分野での国内外の研究水準を引き上げ、さらに人文学のみならず他の専門分野の研究にも貢献することを目指す。

Ⅲ-1-2．組織構成

これらの目的を実現するため、人文学研究科では《資料Ⅲ－１》のような組織構成をとっている。

《資料Ⅲ－１：組織構成》

専　攻	講　座	教育研究分野
文化構造	哲学	哲学、倫理学
	文学	国文学（国語学を含む）、中国・韓国文学、英米文学、ヨーロッパ文学
社会動態	史学	日本史学、東洋史学、西洋史学
	知識システム論	心理学、言語学（英語学を含む）、芸術学
	社会文化論	社会学、美術史学、地理学、文化資源論（連携講座：後期課程のみ）

Ⅲ-1-3．研究上の特徴

1．文学部・人文学研究科の研究上の特徴は、人文学の専門分野の諸研究をたえず深化させる一方、その多様な研究方法と研究成果を地域社会の文脈に定位しながら現代日本の諸問題にも適用し、学際的かつ国際的に展開される人文学を構築してきた点にある。
2．文学部・人文学研究科は「人文学推進インスティテュート」のもとに、「地域連携センター」「海港都市研究センター」「倫理創成プロジェクト」「日本語日本文化教育プログラム」の四共同研究組織を設置し、様々な共同教育研究プロジェクトを異なる分野の教員が協力して実施することを通して、単独の分野のみでは不可能な幅広い視野から人文学の研究を推し進めている。
3．2003 年度に「地域連携センター」を設置し、日本史学、美術史学、地理学、社会学等の地域連携に関係する諸分野が協力しながら運営している。同センターの設置目的は、地域の歴史文化に関する研究成果を当該地域社会に還元し、地域の歴史的環境を生かした街づくり、里づくりを支援していくことである。
4．海港都市研究、国境を越える人の移動、異文化との交流による社会と文化の変容についての研究を行う

国際的ネットワークを構築するため、2005 年に「海港都市研究センター」を設置した。同センターでは、東アジアを中心とした人と文化の接触および新しい文化創造の可能性を検討し、国という分断的な壁を乗り越えて、緩やかな公共空間を構築するための条件とプロセスを解明することを目的としている。

5.「倫理創成研究プロジェクト」を設置し、現代社会で求められる新しい倫理システムの創成に関する研究を行っている。具体的には、医療・環境・工学・情報などをめぐる現代社会の倫理諸問題を、人文学の多様な観点から分析し、さらには他の人文・社会科学、自然科学の諸分野とも学域横断的に連携しながら、高度科学技術社会として特徴づけられる現代に対応した新しい倫理システムの創成を目指している。また、2022 年には東アジアの母性礼賛とミソジニーという下位プロジェクトがスタートした。

6.「日本語日本文化教育プログラム」は、日本の言語、文化、社会に関する教育・研究を推進するとともに、国際交流を通じて深化・発展させることを目的としている。国内外の教育・研究機関と連携を取りながら、日本語・日本文化の教育・研究両面における成果の発信を目指している。

7. 新学術領域としての「雰囲気学」を創出・展開するために神戸雰囲気学研究所（略称 KOIAS）がインスティテュート内の研究機関として 2022 年に発足した。イタリア、カナダ、スロヴェニアなどの期間と協定を結び、島津製作所とも共同研究を始めている。

8. 若手を中心に異文化間の移動や衝突、接触などについて分野横断的な研究を行う「文化交渉学」プロジェクトを発足させ、パリ 10 大学との研究交流を開始した。今後もヨーロピアン・スタディーズを中心とした国際共同研究を推進する予定である。

Ⅲ-1-4. 研究をサポートする体制

文学部・人文学研究科は、2007 年度に特別研究制度（サバティカル制度）を創設し**《資料Ⅲ－２》**、教育上・学内行政上、著しい貢献が認められ、当該年度に要職を免れた教員に、半年間、教育・学内行政に関する業務を免除し、研究に専念することを認めている。2018 年度から 2023 年度までの間にこの制度を利用した教員の数は**《資料Ⅲ－３》**のとおりである。

《資料Ⅲ－２：「特別研究制度に関する申合せ」平成 19 年 6 月 13 日制定》

人文学研究科に勤務する教員の資質向上と学部・大学院教育の発展を図るため、研究に専念する機会を与え、今後の教育研究活動に資する基盤を提供する。この機会を与えられた者は、授業及び教授会、各種委員会等の仕事を免除され、前期（4 月～9 月）もしくは後期（8 月～翌 1 月）の半年間、国内外において研究に専念する。

＜申請資格＞
次の条件をすべて満たしていること。
1. 申請時において神戸大学大学院人文学研究科に 3 年以上在勤の者。
2. 過去 5 年間において、夏期休業期間（8 月～9 月）と土曜日・日曜日・祝日を除き同一年度で通算 40 日以上の海外出張、研修（ただし、集中講義は除く。）、休暇をとっていない者。ただし、病気休暇・産前休暇・産後休暇・忌引は上記の期間（40 日）に含めないものとする。勤務年数が 5 年に満たない者は、神戸大学大学院人文学研究科着任以降の期間を対象とする。
3. 所属専修及び所属教育研究分野から教育上支障ないとの承認を受けた者。
4. 特別研究期間開始時に定年まで 1 年以上の在職期間を残す者。

＜選考規程＞
1. 年度ごとに若干名とする。
2. 教育上及び行政事務上の支障がないと認定された者に限る。
3. 選考委員会において次の条件を記載順に考慮し候補者を選定する。
   (ア)優れた研究計画を有する者。
   (イ)行政事務において貢献度の高い者。
   (ウ)「申請資格」2 項の条件を長期間満たしている者。
4. 選考委員会は研究科長、副研究科長及び各講座から 1 名ずつの委員、教務委員(副)、以上 9 名により構成される。
5. 選考委員会は特別研究期間の前年 7 月 31 日に申し込みを締め切り、9 月 30 日までに選考を行った後、

その結果を10月1回目の教授会に諮る。

＜附則＞
1．特別研究制度を利用しても、その後の授業負担は増えないものとする。
2．この制度が円滑に実施できるよう、必要に応じ、所属専修及び所属教育研究分野に対し非常勤講師枠配分等の措置を講ずるものとする。
3．特別研究期間中の当該研究者の行政事務（委員会委員等の職務）は他の教員が代替する。
4．特別研究期間中は国内外での非常勤講師等を禁止する。ただし、選考委員会がやむをえない事情があると認めた場合には、これを許可することがある。
5．特別研究期間の制度を利用した者は、研究期間終了後直ちに研究報告書を教授会へ提出する。

附　則
この申合せは、平成19年6月13日から施行する。
附　則
この申合せは、平成27年4月22日から施行する。

《資料Ⅲ－３：特別研究制度を利用した教員数》

平成30年度	令和元年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度	令和5年度
1	1	2	0	0	0

Ⅲ-2. 研究活動の状況

文学部・人文学研究科の教育研究の性格を反映して、研究活動は論文・著書の執筆および研究発表に集中している。また、研究活動にあたっては、科学研究費補助金のみならず、各種の外部資金を積極的に獲得して、研究の水準を向上させている。

Ⅲ-2-1. 研究実績の状況

本研究科の令和元年度から令和5年度の日本語による著書数は年間平均36.6冊、外国語による著書数は年間平均6.6冊であった。また、同期間の日本語による査読付き論文数は年間平均12.6本、外国語による査読付き論文数は年間平均21.2本である《資料Ⅲ－４》。研究業績は多言語で執筆され、これは本研究科の特色および研究目的に合致する。研究業績の学術的意義の高さを示すものとして、《資料Ⅲ－５》に令和元年度以降の各種学会賞等の受賞者を挙げる。

《資料Ⅲ－４：研究活動実施状況（令和元年度～令和５年度）》

		令和元年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度	令和5年度
教員数		53	54	55	58	55
著書数	日本語	32(8)	35(4)	41(8)	42(0)	33(3)
	外国語	5(1)	13 (3)	9(0)	2(0)	4(0)
招待論文数	日本語	24	12	18	13	16
	外国語	4	2	3	5	12
査読付き論文数	日本語	15	12	15	13	8
	外国語	25	29	16	15	21
その他		95	78	129	112	162

※1 「教員数」については、各年度の5月1日現在の当該学部・研究科等に所属する研究活動を行っている教員（教授、准教授、講師、助教、助手（特任教員・特命教員含む））の人数。

※2　著書数については、内数として「単著」の数を記載している。
　　また、研究科内の教員による共著・分担執筆はそれぞれ1件としてカウントしている。
※3　学会発表や「査読付き論文」に当たらない論文などについては、「その他」としてカウントしている。

《資料Ⅲ－5：令和元年度以降の受賞》

年度	受賞者	賞の名称
令和元年度	奥村　弘	読売あをによし賞
	石山 裕慈	日本漢字能力検定協会　019年度 漢検漢字文化研究奨励賞（優秀賞）
令和2年度	増記 隆介	神戸大学優秀若手研究者賞
	齋藤 公太	第14回 日本思想史学会奨励賞
令和4年度	柳澤 邦昭	日本心理学会86回大会優秀発表賞
	柳澤 邦昭	神戸大学前之園記念若手優秀論文賞
	吉川 圭太	神戸大学学長表彰（サンテレビジョン震災映像公開検討チーム）
	中　真生	第44回 サントリー学芸賞〔思想・歴史部門〕
令和5年度	野口 泰基	村尾育英会学術賞
	新川 拓哉	神戸大学前之園記念若手優秀論文賞
	柳澤 邦昭	神戸大学優秀若手研究者賞
	ターン有加里ジェシカ	日本グループ・ダイナミックス学会 第69回大会（ロング・スピーチ）優秀学会発表賞
	出水 清之助	江村栄一記念会 第3回江村栄一記念賞・自由民権学術奨励賞

Ⅲ-2-2. 学内共同研究組織における研究活動

○KOBELSI

2023年、「神戸大学生命・自然科学ELSI研究プロジェクト（略称：KOBELSI）が立ち上がった。高度科学技術社会における現在および将来の様々な倫理的・法的・社会的諸問題を発見・予測し、それらの検討を行うもので、神戸大学デジタルバイオ&ライフサイエンスリサーチパーク（DBLR）」における5つの研究拠点（バイオものづくり研究拠点・先端膜工学研究拠点・医工学研究拠点・健康長寿研究拠点・社会システムイノベーション研究拠点）が展開するさまざまな先端科学技術研究である。DBLRは、未来社会に向けた新たな課題の解決に資する経済的・社会的価値を創造するために、傑出した知と有能な人材を創出するとともに、社会実装につなげる研究環境基盤を強化することを目指して開設されたもので、神戸大学生命・自然科学ELSI研究プロジェクトは、DBLRで展開される医療、生命科学、工学、保健学などそしてそれらの横断的な先端科学技術研究について、ELSI上の問題を検討し、よりよい仕方での社会への導入をめざすもので、人文学研究科のほか、国際文化学研究科、法学研究科、経済学研究科、経営学研究科、医学研究科、保健学研究科、人間発達環境学研究科の教員が参加しており、新しい科学技術を実際の社会に導入する際に、科学技術上の問題とは別に生じる様々な倫理的・法的・社会的問題を検討しその解決をめざす。

○人文情報の文理融合研究と地域学創出

日本社会の国際化と地域課題の深刻化に対応する人文学の全国的な知の共有のための研究とそれに基づく社会連携は、現在きわめて重要な課題となっている。「人文情報の文理融合研究と地域学創出」では、この課題を深め、新たな人文学のあり方を模索するために、阪神・淡路大震災以来、この課題に対して持続的な研究を進める人文学研究科を拠点として、大学共同利用機関法人人間文化研究機構と協力し、人文系学術情報の全国的な共有化モデル形成とそれを基礎とした地域学の創出を研究目的とする。そのため人文学研究科は、2016 年度に国立歴史民俗博物館と「総合資料学の創成と日本歴史文化に関する研究資源の共同利用基盤構築」を相互に協力して推進することで合意し協定を結んだ。

上記の協定を発展させる形で、2018 年 1 月に、神戸大学と東北大学と人間文化研究機構（基盤機関：国立歴史民俗博物館）との三者で、「歴史文化資料保全の大学・共同利用機関ネットワーク事業」（略称：歴史資料保全 NW 事業）についての連携協定が締結された。この事業は、歴史文化資料保全およびそのための全国的な相互支援体制の構築や、資料保全を担う人材の育成・教育プログラムの研究、地域の歴史文化の継承に係わる大学の機能強化を主な目的としている。拠点機関のひとつである神戸大学は人文学研究科地域連携センターが事業の基盤機関となっている。同事業は 2022 年度より人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクトに位置づけられ、第 1 期からの活動を継承・発展させ、各種事業を展開している。本年度は下記の事業を行った。

① 講演会「よみがえる聆涛閣コレクションー神戸歴史遺産「住吉の豪商・吉田家関係資料」を知り、守り、伝えるー」（主催）、2023 年 4 月 15 日、於御影公会堂、参加：117 名
② 歴史文化資料保全西日本大学協議会の開催(主催)、2023 年 12 月 17 日、オンライン開催
③ 第 13 回震災資料の収集・公開に係わる情報交換会（共催）、2023 年 12 月 1 日、於神戸大学大学院人文学研究科学生ホール、オンライン開催
④ 第 22 回歴史文化をめぐる地域連携協議会「地域歴史遺産を取り巻く多様な取り組み―文化財保存活用地域計画を足がかりにして―」（共催）、2024 年 1 月 21 日、於神戸大学瀧川記念学術交流会館
⑤ その他、学内の授業「地域歴史遺産保全活用研究」「地域歴史遺産活用演習」への協力、兵庫県内や愛媛県伊方町での史料調査および報告会、金沢市内での水損史料ワークショップへの参加等多数

Ⅲ-3. 競争的外部資金の獲得状況

競争的外部資金の獲得状況を《資料Ⅲ-６》に示す。令和 5 年度には 240,411 千円を獲得している。令和元年に大型研究種目（奥村弘教授を研究代表者とする特別推進研究「地域歴史資料学を機軸とした災害列島における地域存続のための地域歴史文化の創成」）が採択されて以降の合計額は、200,000 千円前後で推移している。受託研究費が近年増加傾向なのは、JST や AMED 等の大型研究の採択が主要因である。

《資料Ⅲ-６：競争的外部資金の獲得状況(令和元年～令和５年度)》

年度	科研費	共同研究	受託研究	寄附金	その他 競争的資金	合計
令和元年度	157,342	12,582	10,013	2,789	21,629	204,355
令和 2 年度	146,783	11,600	8,958	2,500	24,682	194,523
令和 3 年度	151,627	13,034	12,039	2,216	24,557	203,473

令和４年度	160,229	13,802	15,730	0	20,700	210,461
令和５年度	173,095	9,427	25,294	4,650	27,945	240,411

金額（千円）

Ⅲ-3-1. 科学研究費助成事業

科学研究費助成事業の申請件数が年間平均40.6件である。令和元年度から令和５年度までの獲得件数は平均56件(新規17.4件)で獲得額は平均157,815千円である。申請件数は平成24年度が34件とやや少なかったが、平成25年度以降40～50件近くを維持しており（令和２年度と３年度は新型コロナウイルス感染症の影響があり減)、科研費獲得に積極的となり、その状態が維持されている**《資料Ⅲ－７》**。また上記のとおり、令和元年度には特別推進研究が１件新規採択された。

《資料Ⅲ－７：科学研究費助成事業への申請・獲得件数、獲得額に関するデータ》

年度	令和 元年度	令和 ２年度	令和 ３年度	令和 ４年度	令和 ５年度	平均
申請件数	45	30	37	44	47	40．6
獲得件数 (新規)	50 (17)	49 (8)	55 (14)	53 (16)	73 (32)	56 (17.4)
金額 (千円)	157,342	146,783	151,627	160,229	173,095	157,815

Ⅲ-3-2. 共同研究、受託研究費 の状況

令和元年度から令和５年度の共同研究、受託研究の推移を**《資料Ⅲ－８》**に示す。

《資料Ⅲ－８：共同研究、受託研究の実施件数および金額》

年度	令和 元年度	令和 ２年度	令和 ３年度	令和 ４年度	令和 ５年度
共同研究件数	10	8	9	8	6
金額(千円)	12,582	11,600	13,034	13,802	9,427
受託研究件数	6	6	8	7	8
金額(千円)	10,013	8,958	12,039	15,730	25,294

共同研究、その他競争的資金として学術機関や省庁からの研究費は主に文部科学省、日本学術振興会から受け入れている。その他、国立国語研究所等からの受入れ実績もある**《資料Ⅲ－９》**《資料Ⅲ-10》。

《資料Ⅲ－９：文部科学省・日本学術振興会等からの大学改革等補助金（共同研究）》

相手方	期　間	題　目	金額（千円） 上段直接経費 下段間接経費
文部科学省	平成28～ 29年度	国立大学改革強化推進補助金	14,000 0
	平成 30年度	大学改革推進等補助金	5,500 0

	令和 元年度	大学改革推進等補助金	1,700 0
日本学術振興会	平成 30 年度	JSPS サマー・プログラム	159 0
国際交流基金	平成 29 年度	海外日本語教育インターン（大学連携日本語パートナーズ）派遣プログラム	55 0
	平成 30 年度	海外日本語教育インターン（大学連携日本語パートナーズ）派遣プログラム	110 0
	令和 元年度	海外日本語教育インターン（大学連携日本語パートナーズ）派遣プログラム	106 0
	令和 2 年度	海外日本語教育インターン（大学連携日本語パートナーズ）派遣プログラム（※新型コロナウィルスにより派遣中止のため返還）	99 0
	令和 3 年度	海外日本語教育インターン（大学連携日本語パートナーズ）派遣プログラム（※新型コロナウィルスにより派遣中止のため返還）	110 0
	令和 5 年度	海外日本語教育インターン（大学連携日本語パートナーズ）派遣プログラム	185 0
直接経費合計 間接経費合計			22,024 0

《資料Ⅲ-10：学術機関・省庁からの受入実績（その他競争的外部資金）》

相手方	期　間	題　目	金額（千円） 上段直接経費 下段間接経費
日本学術振興会	平成 26～ 令和 2 年度	社会心理学・神経科学・内分泌学の連携による文化差の遺伝的基盤の解明	11,150 0
	平成 29～ 令和 2 年度	生命・環境技術の社会実装に関する先端融合研究 ― 21 世紀型参加のビジョンと試行 ―	4,228 711
	平成 30～ 令和 3 年度	学術研究動向調査研究	4,800 1,440
	令和 5 年度	学術研究動向調査研究	1,200 360
科学技術振興機構	平成 26～ 29 年度	多世代視覚障害者移動支援システムにおける AR・VR 技術の社会実装	15,275 4,583
	令和 3～ 令和 5 年度	孤独リスクモデルの個人・状況要因の心理学的検討	19,000 5,700
	令和 4 年度	新生児の匂いと羊水の匂いの安全・安心利用：心理的効果の探索	200 60
	令和 5 年度	ヒト脳培養の ELSI に関する研究、および量的調査	400 120
大学共同利用機関法人人間文化研究機構	平成 30～ 令和 5 年度	歴史文化資料保全の大学・共同利用期間ネットワーク事業	69,600 0
国立国語研究所	平成 26～ 令和 3 年度	統辞・意味解析情報の付与	3,593 0

	令和５年度	「てにをは」バンク構築のための基盤研究	1,000 100
京都大学（R3） 広島大学（R4） 広島大学（R5）	令和３～ 令和５年度	【AMED】ヒト脳オルガノイドの意識をめぐる哲学的・倫理学的研究	4,120 1,236
大谷大学	平成30年度	研修員受入	115 0
甲南大学	令和元年度・ 令和３年度	研修員受入	463 0
直接経費合計 間接経費合計			135,144 14,310

平成26年度以降に地方自治体・民間企業との間で実施した受託研究は《資料Ⅲ-11》のとおりである。特に日本史学教育研究分野で自治体からの研究費等の受入れが顕著である。

《資料Ⅲ-11：地方自治体・民間からの受入実績（受託研究）》

相手方		期　間	題　目	金額（千円） 上段直接経費 下段間接経費
自治体関係	(財)神戸都市問題研究所（神戸市文書館）	平成18～ 令和５年度	歴史資料の公開に関する研究	25,729 2,571
	神戸市	平成27～ 令和元年度 令和３～4年度	神戸村文書の解読（翻刻）に関する研究	4,198 419
		令和元年度	山田町坂本阿弥陀堂大般若経の解読に関する研究	310 31
	明石市	平成26～ 30年度	明石藩関連資料調査・公開業務	7,900 0
		平成26～ 令和５年度	明石市における地域史料の調査研究業務委託	32,200 0
		平成29～ 30年度	横河家関連資料調査・公開業務委託	2,000 0
	福崎町	平成24～ 令和５年度	福崎町の地域歴史遺産掘り起こしおよび大庄屋三木家住宅活用案の作成等	18,300 0
		平成29～ 令和５年度	三木家住宅民俗資料調査	7,350 0
	丹波市	平成24～ 令和元年度	兵庫県丹波市における地域資源としての歴史文化遺産（古文書等）の調査および成果の刊行	15,130 0
		令和２年度	丹波市内古文書等歴史資料調査業務	1,870 0
		令和３～5年度	兵庫県丹波市を中心とした地域歴史遺産（古文書等）の調査	5,610 0
	三木市	平成26～ 令和５度	三木市史編さん事業	90,800 0

	小野市	平成 28 年度	小野市市場地区地域歴史調査及び地域新聞「新東播」データベース化の研究	300 0
		平成 29～ 令和元年度	小野市小野地区の歴史調査及び伊藤家文書を活用した小野市の幕末から明治期の歴史の調査研究	900 0
		令和 2～4 年度	小野市小野藩家老家伊藤家文書を用いた明治初期小野市域地租改正実施過程の歴史研究	700 0
		令和 3 年度	小野市域の村堂調査にかかるデータの整理と分析	423 0
		令和 5 年度	小野市小野地区歴史調査及び近藤廣家文書目録作成	300 0
	朝来市	平成 27～ 令和 3 年度	朝来市石川家文書の史料調査研究並びに山田家文書調査に係る指導助言	3, 500 0
		令和 5 年度	朝来市関連の古文書及び歴史調査に係る指導助言	500 0
	三田市	平成 27～ 令和 4 年度	旧三田藩主九鬼家資料の総合調査	1, 548 153
	加西市	平成 28 年度	冊子「加西に捕虜がいた頃」ドイツ語翻訳委託	691 0
		平成 29～30 年度	青野原俘虜収容所調査委託	4, 911 0
		平成 29 年度	小谷区の文化遺産調査研究委託	1, 086 0
		令和 2 年度	鶉野飛行場跡滑走路調査委託	517 0
		令和 3～5 年度	加西市戦争遺跡調査委託	3, 224 0
		令和 2 年度	令和 2 年度加西市戦争遺跡総合調査委託	3, 823 0
		令和 3 年度	令和 3 年度加西市戦争遺産総合調査委託	1, 996 0
		令和 4～5 年度	加西市戦争遺産資料拡充調査委託	1, 614 485
	豊岡市	令和元～3 年度	兵庫県豊岡市の外国人住民に関する調査研究	6, 609 991
	丹波篠山市	令和元～5 年度	兵庫県丹波篠山市における市史編さんのための研究と検討	23, 058 0
その他	International Visegrad Fund	平成 29～30 年度	Visegrad University Studies Grant	1, 944 0
直接経費合計 間接経費合計				269, 041 4, 650

Ⅲ-3-3.　奨学寄附金の受け入れ

人文学研究科・文学部が財団・団体から受け入れた奨学寄附金に関する令和元年度から令和 5 年度の金額・内容は《資料Ⅲ-12》、令和元年度から令和 5 年度の受入れの推移は《資料Ⅲ-13》のとおりである。

《資料Ⅲ-12：財団・団体からの奨学寄附金・助成金の受入件数と金額》

年度	助成団体名等	寄付金名称	寄附目的	寄附金額
令和元年度	上嶋悟史	平成 30 年度出光文化福祉財団研究助成	元禄本「現図曼荼羅」の制作と経緯に関する研究	720,000
	公益財団法人 高橋経済研究財団	公益財団法人高橋経済研究財団助成金	研究題目「脳波を用いた精神疾患の研究」に対する研究助成	1,500,000
	一般財団法人 伊藤忠兵衛基金	一般財団法人伊藤忠兵衛基金助成金	人文学研究科・久山雄甫准教授から申請のあった学術研究助成金	500,000
	l'ENS de Lyon	リヨン高等師範学校寄附金	日仏若手研究者セミナーにおける会議費・交通費等の助成	69,408
令和2年度	公益財団法人木下記念事業団	公益財団法人木下記念事業団研究助成金	中世以降における「日常使用」漢字音の実態研究	1,000,000
	公益財団法人 JFE21 世紀財団	2020 年度 JFE21 世紀財団アジア歴史研究助成金	地籍図と GIS を活用した台湾の災害復興支援プロジェクトの試み	1,500,000
令和3年度	公益財団法人 村田学術振興財団	公益財団法人村田学術振興財団研究助成金	芸術文化関係職員等の労働環境とコロナ禍での変容に関する国際比較	700,000
	公益財団法人サントリー文化財団	公益財団法人サントリー文化財団助成金	学術研究に対する研究助成	1,100,000
	公益財団法人髙梨学術奨励基金	公益財団法人髙梨学術奨励基金	自由民権期における政党連帯運動の研究 ― 無形の「広域地方結合論を中心に ―」に対する研究助成	416,137
令和4年度	無	無	無	0
令和5年度	一般財団法人ノーリツぬくもり財団	2023 年度ノーリツぬくもり財団助成金	マルチレベルベクトル自己回帰モデルによる入浴の心理的効果の検証	1,200
	公益信託福原心理教育研究振興基金	2023 年度福原心理教育研究振興基金助成金	「記憶や感情の「不安定さ」の神経基盤：ﾒﾝﾀﾙﾍﾙｽへの応用」 に対する研究助成	1,000
	公益財団法人 JFE21 世紀財団	2023 年度 JFE21 世紀財団アジア歴史研究助成	地図・地誌類に基づく日本における東アジアの地理的認識および交渉の発達に関する研究	1,500

	公益財団法人科学技術融合振興財団	2023 年度科学技術融合振興財団調査研究助成	「分業型公共財ゲーム」において効率かつ公平とされる分担方法から乖離する条件の検討	950

《資料Ⅲ-13：奨学寄付金・助成金の推移》

	令和 元年度	令和 2 年度	令和 3 年度	令和 4 年度	令和 5 年度
件数	4	2	3	0	4
金額（千円）	2,289	2,500	2,216	0	4,650

第２部

Ⅰ. 外部資金による教育研究プログラム等の活動

Ⅰ-1. 戦略的事業経費（ミッション実現戦略分）
「人文学推進インスティテュートに係る戦略的事業経費」

[1]本事業について

令和４年度に引き続き、「人文学推進インスティテュートに係る戦略的事業経費（ミッション実現戦略分）を獲得した。人文学推進インスティテュートは「神戸オックスフォード日本学プログラム(KOJSP)」（オックスフォード大学アジア・中東学部日本語専攻の２年生全員が文学部で１年間学ぶ、ユニット受入れ型のプログラム）のほかに４共同組織である倫理創成プロジェクト・海港都市研究センター・地域連携センター・日本語日本文化教育プログラムの支援と事業間の調整及び評価を行うものである。各共同組織は、さらにその内部で新規のプロジェクトを興すことを支援しており、4 共同組織のほかに若手を中心とする「神戸雰囲気学研究所（KOIAS）や文化交渉学プロジェクトが立ち上がったほか、工学部との文理融合型教育プログラムも立ち上げられた。

[2]令和５年度の取組み

①「神戸オックスフォード日本学プログラム(KOJSP)」の充実

・KOJSP では、例年どおり、受講生に対して日本語演習（月～金、毎日 2 コマ）と文学部の専門の授業（週 2 コマ）を 1 年間、KOJSP 演習（週 1 コマ）を半年間提供したほか、インターナショナルアワーなどの交流の機会を定期的に設け、プログラムの充実を図った。令和 4 年 10 月にプログラムを開始していた第 11 期生は令和 5 年 8 月に 12 名が修了した。パンデミックのためにしばらくオンライン留学が続いていたが、今回は全員が来日を果たした。令和 5 年 10 月からは第 12 期生のプログラムを開始した。

・KOJSP 生に対してきめ細かいケアを行うため、グローバル教育センター主配置の助教を 1 名雇用した。

・日本学関連の映像資料や英語による日本学研究関連書物を購入し、KOJSP 生が日本で研究する際の手がかりとなる資料を充実させた。

・KOJSP アドバイザリーボード委員の教員 2 名がオックスフォード大学アジア・中東学部を訪問し、教育内容について意見交換を行い、さらに第 12 期受入予定の学生について情報を得た。

・島津製作所との共同研究によって、日本について英語で学ぶプログラムの開発を進めた。リカレントプログラムとの連携で、以前留学生担当講師を務めていた斉藤公太氏の著書『日英対訳で読み開く日本文化史』（神戸大学出版会）を出版した。

・島津製作所と共同事業を開始し、島津製作所本社でワークショップなどを開催した。

・オックスフォード大学からジェイムス・ルイス准教授を招聘し、特別講演会を開催するなど、学術交流を推進した。

・インターンシップを開始し、島津製作所をはじめ 3 機関に 4 名を派遣した。

② 倫理創成プロジェクト

・5 月には KOIAS と共同でダルムシュタット工科大学のアルフレート・ノルトマン氏の、7 月にはワルシャワ大学のアグネシカ・コズィラ氏の特別講演会を行った。KOBELSI（神戸大学生命・自然科学 ELSI プロジェクト）との共催の形で、ELSI と応用倫理学的問題を討議する国際ワークショップ（2 回）、国内ワークショップ（3 回）、国内シンポジウム（1 回）を開催した。

・嶺南大学 The Hong Kong Catastrophic Risk Centre と学術交流協定を締結した。

・令和 6 年 3 月に、東アジアのジェンダーに関する国際ワークショップを開催した。

③ 海港都市研究センター

・10 月には国際会議『東アジア海域史の新視点』および『２０２３東アジア島嶼海洋文化フォーラム』を開催、中国海洋大学・韓国海洋大学・台湾中央研究院・長崎大学から研究者及び大学院生を招聘して研究交流を行った。

・2024 年 1 月には北京大学・復旦大学の教員及び院生を招き、第 5 回神戸・北京・復旦三大学人文フォーラムを開催し、3 大学 30 人で学際的な討論を行った。

④ 地域連携センター

・明石市・福崎町等で連携事業先の博物館、資料館での展示協力、明石市・丹波篠山市・三木市における市史編さん事業への協力、サンテレビと震災関連映像の保存活用事業、加西市と連携した農学研究科加西市農場敷地内の戦跡保存事業、国際文化学研究科と連携した神戸ユニオン教会資料の調査研究、附属図書館での成果展示会の実施、香美町の文化財保存活用地域計画の遂行への参画等を実施した。

・国立歴史民俗博物館、エルテ大学（ハンガリー）、イーストアングリア大学セインズベリー研究所（イギリス）と協定を締結したことで、異分野共創型の地域連携の全国的なモデル形成を進めるとともに、「知と人を作る異分野共創研究教育グローバル拠点」の形成に貢献した。

・兵庫県下を中心とした自治体職員、地域住民団体、コンサルタント業者、歴史およびアーカイブ研究者による地域連携協議会を開催した。

⑤ 日本語日本文化教育プログラム

・協定機関の国立国語研究所との共催で国際シンポジウム「第 2 回 Evidencial-Based Linguistics（EBL）」を開催した。同研究所の専任教授を大学院共通科目「日本語研究」の非常勤として招聘した。ワシントン大学の荻原俊幸教授を招聘し「言語学コロキアム」を開催した。

・国語研、島津製作所との共同事業を実施（共同研究 2 件）し、「知と人を作る異分野共創研究教育グローバル拠点」の形成に貢献した。

・オレゴン大学の出丸香教授を招聘し、12 月に「日本語音声学・音声教育講演会」を開催した。

・古典籍 DB を活用した研究推進のため、11 月に国文学研究資料館との共催で「漆ワークショップおよび講演会」を開催した。

・留学生向け日本語アカデミック・ライティングの授業と、チュートリアル形式で日本語論文・レポート作成の支援が行えるような日本人学生を養成するための授業令和 5 年度も引き続き開講した。いずれも正式には大学院博士課程前期課程の学生を対象とした授業だが、実際には学部生や博士課程後期課程の学生、研究生等も参加している。

授業科目	単位数
日本語アカデミック・ライティング	2 単位
日本語学術文章の作成と指導	2 単位

主に博士課程前期課程の学生を対象として、海外の教育機関等で日本語日本文化教育を担う人材を養成するための教育プログラム）の充実

・平成 29 年度に追加開講した下記の 2 科目を令和 3 年度も引き続き開講し、プログラムの充実を図った。

授業科目	単位数
日本語教育学	2 単位
日本語教育内容論	2 単位

・令和 3 年度に「日本語日本文化教育プログラム」の必要単位を満たし、修了の認定を受けた者は、博士課程前期課程 5 名の大学院生であった。

日本語日本文化教育に関する海外インターンシップの実施

・人文学研究科では「日本語日本文化教育プログラム」修了者（あるいは修了見込み者）に海外教育機関

でのインターンシップの機会を与え、真に国際的に通用するグローバル人材の養成を目標として、平成22 年度以降、日本学術振興会「組織的な若手研究者等海外派遣プログラム」と「頭脳循環プログラム」によって中・長期（約 2 ヵ月～1 年）に渡って毎年 1 名の大学院生もしくは PD をハンブルク大学（ドイツ）に送り出してきた。平成 27 年度以降は学内予算を得て、オックスフォード大学（連合王国）、トリーア大学（ドイツ）、ディミトリエ・カンテミル・キリスト教大学（ルーマニア）、北京外国語大学（中国）にも各 1 名、短期間（2 週間～1 ヵ月）ないし長期（1 セメスター）派遣することが可能になり、毎年 4～5 名の大学院生・学部生がインターンシップを行っている。

・令和 5 年度は、ハンブルク大学と北京外国語大学に大学院生を 1 名ずつ日本語日本文化教育インターンシップに派遣した。

⑥ **KOIAS**（神戸雰囲気学研究所）

・令和 5 年 5 月にコンコルディア大学（カナダ）・センス学研究所と、6 月にコペル科学研究センター（スロベニア）とそれぞれ研究協定を締結して国際ネットワークを拡大した。コペル科学研究センターとは協定締結に引き続きスロベニアのポルトロジュにて大規模な国際共同シンポジウムを共催した。

・島津製作所との共同事業を開始し、訪問レクチャーを 2 度実施した。

・令和 5 年 12 月から令和 6 年 2 月にかけてローマ第二大学のトニノ・グリッフェッロ教授を招聘した。

・令和 6 年 1 月と 2 月には神戸大学で 2 回の国際シンポジウムを主催した。3 月には台湾で国際シンポジウムを共催した。

⑦ 文化交渉学研究プロジェクト

・国際会議INTERFACEing 2023を令和5年9月25日から9月27日まで人文学研究科主催で開催した。全体テーマは "Changing Paradigms: Humanities in the Age of Crisis" で、21か国から参加した70名（オンライン参加者13名を含む）が研究発表を行った。人文学研究科の発表者は教員2名、PD3名、大学院生1名だった。

・パリ大学との交流を推進し、令和5年10月にパリ大学ナンテール校哲学科アンヌ・ソヴァナルグ教授を招聘し、講演会 1 回、授業等を通じた共同学生指導を実施した。令和6年3月にはパリ大学ナンテール校および大阪大学と共催で、大学院生の国際研究発表集会をパリで開催した。

・令和5年9月および11月に文化交渉学ワークショップを行い、新たなプロジェクトを順調に発展させた。

Ⅰ-2. 科学研究費補助金基盤研究（S）（研究代表者：奥村弘、課題番号：26220403）「災害文化形成を担う地域歴史資料学の確立 ― 東日本大震災を踏まえて ―」および特別推進研究（研究代表者：奥村弘、課題番号：19H04547）「地域歴史資料学を機軸とした災害列島における地域存続のための地域歴史文化の創成」

平成 26 年度からスタートした科学研究費補助金基盤研究（S）（研究代表者：奥村弘、課題番号：26220403）「災害文化形成を担う地域歴史資料学の確立 ― 東日本大震災を踏まえて ―」は、平成 25 年度までの基盤研究（S）「大規模自然災害時の史料保全論を基礎とした地域歴史資料学の構築」の成果を踏まえ、東日本大震災後の新たな課題（津波、放射能被害など）および海溝型地震への対応をさらに進め、「災害文化」形成に資する地域歴史資料学を確立することを目的としている。

平成 29 年 12 月には日本学術振興会の研究進捗評価（中間評価）を受け、人文科学系の 7 件の評価対象中、唯一 A+ 評価を得るなど、着実に研究成果を積み重ねてきた。

当初の研究期間は平成30年度が最終年度であったが、平成30年7月の西日本豪雨災害の発生を受け、東日本大震災以降の資料保全論について再検討を図る必要が生じたため、令和元年度への研究課題繰越を行った。

令和元年度は、人間文化研究機構の「歴史文化資料保全の大学・共同利用機関ネットワーク事業」とも共同して西日本豪雨災害対応の実践的研究を継続した。その過程で東日本大震災以降の水損史料保全技術論の再検討を図り、地域の実情に応じた大規模水害対応論について文化財保存修復学会などで発表した。西日本豪雨災害対応の実践的研究から得られた新たな知見を本研究に組み込み、研究成果のとりまとめを進めた。また、本科研の事業・研究成果をまとめた書籍を刊行すべく、準備作業を行った。

また、平成21〜25年度の基盤研究（S）「大規模自然災害時の史料保全論を基礎とした地域歴史資料学の構築」（研究代表者：奥村弘、課題番号21222002）および平成26年度からの本科研での成果が高く評価され、令和元年度には科学研究費事業特別推進研究「地域歴史資料学を機軸とした災害列島における地域存続のための地域歴史文化の創成」（研究代表者：奥村弘）が採択された。

令和元年度より、特別推進研究（研究代表者：奥村弘、課題番号：19H04547）「地域歴史資料学を機軸とした災害列島における地域存続のための地域歴史文化の創成」を開始した。この研究課題は、平成25 年までの科学研究費補助金基盤（S）「大規模自然災害時の史料保全論を基礎とした地域歴史資料学の構築」と平成30 年度までの同「災害文化形成を担う地域歴史資料学の確立 ― 東日本大震災を踏まえて ―」の成果を発展継承させ、社会構造の大変動による人口減少や大規模災害等により危機に瀕している日本の地域存続の基盤となる、新たな地域歴史文化創成のための実践的研究領域を確立することを目的としている。

初年度となる令和元年は、研究の基盤整備のための研究会やキックオフフォーラムの開催に加え、第10回神戸大学ブリュッセルオフィスシンポジウムでの国際発信・研究交流を展開した。また、被災資料・地域資料の保全継承のための実践的研究や地域資料データインフラ「khrinC」の構築も進めた。

令和2年度は当初方針に従い国際的研究やその発信を進めることとしていたが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、ポーランドで開催予定の第23回国際歴史学会議が延期になった。しかし、神戸大学・国立歴史民俗博物館・エルテ大学・ハンガリー国立博物館・イーストアングリア大学セインズベリー日本藝術研究所の協定により、文化遺産にかかる国際的研究プラットフォームを構築することができた。さらには、「中國文化大學東亜學國際學術検討會」（オンライン開催）における地域歴史資料学の意義についての報告を行ったほか、国際発信のための基礎的研究として、英文報告書等の和訳を進め「アメリカ歴史学会専門職行動基準書（2019年改訂版）」Statement on Standards of Professional Conduct を日本語に訳し、地域において実践的歴史研究を行う際の国際的基準を本科研ウェブサイト上で広く公開した。

また、本科研グループ全体の総括研究会を開催したほか、オンラインを活用して地域歴史文化フォーラム福島を開催したのに加え、各研究領域でもオンラインを活用した研究会・シンポジウムを開催した。

令和 3 年度は、欧州委員会の報告書 Innovation in Cultural Heritage Research − For an integrated European Research Policy（2018年）について、執筆者のひとりガーボル・ションコイ氏とオンライン研究会を開催し、報告書の疑問点・論点について討論を行った。また11月27日には地域歴史文化フォーラム愛媛「安政・昭和南海地震の新研究」をオンラインにて開催した。

地域史料データインフラ「khrinC」については、兵庫県内の自治体史編さんに利用された地域歴史資料のデータベース化を引き続き進め、運用性向上のためのシステム改修を行った。本科研の各研究領域もオンラインを中心とした研究会を開催したほか、シンポジウム等に共催・協力し、地域歴史文化創成にかかわる実践的研究や全国的な連携を深めることができた。以上の成果を踏まえ、日本学術振興会の研究進捗評価（中間評価）では、A 評価を受けた。

令和 4 年度は、8 月 25 日に第 23 回国際歴史学会議（於ポズナン、ポーランド）でのラウンドテーブル Rescuing and Preserving Historical Documents and Materials during and after Natural Disasters で報告を行ない、阪神・淡路大震災以来の災害時等における、民具や震災資料も含めた地域歴史資料の救出や継承に関する研究の国際的な位置づけを問うた。令和 5 年 3 月 3 日には国際研究集会「歴史資料継承の方法論と国際協力」を開催し、ベイルート港爆発事故の被災資料修復に関する実践的研究およびその課題や、台湾における被災資料救出や台湾と日本との国際協力に関する事例が報告された。

国際的な学術交流に関しては、令和 2 年度より延期されていたガーボル・ションコイ氏（エトヴェシュ・ロラーンド大学、ハンガリー）の神戸大学大学院人文学研究科への招聘を同研究科と本科研とが共同して行った。9 月 18 日には本科研主催の講演会”Current European Cultural Heritage Policy and the European Heritage Label － from a historian's perspective”を開いたほか、欧州委員会報告書 Innovation in Cultural Heritage Research に関する座談会を企画し、ヨーロッパにおける文化遺産をめぐる政策および研究に関する知見を深めた。欧州委員会報告書の和訳を中心とする研究成果は、『ヨーロッパ文化遺産研究の最前線』（ガーボル・ションコイ、奥村弘、根本峻瑠、市原晋平、加藤明恵著・訳、神戸大学出版会、2023 年）を出版し広く社会に還元している。

11 月 12 日には地域歴史文化フォーラム新潟「資料ネット・博物館・文書館と市民・学生」をオンラインにて開催した。都市部における地域歴史資料保全・活用の優れた実践例を有する長岡市の事例を始め、近年積極的に進められている地域歴史文化創成の実践的研究の成果を共有した。特に地域住民が主体となって行う被災した地域歴史資料の保全・活用に関する研究や、地域住民による大字誌編さんなど、新たな事例に関して議論することができた。地域歴史文化フォーラムの現地研修会は 2 月 18 日と 19 日に香川県・愛媛県において実施され、令和元年西日本豪雨による史跡被害（丸亀城、大洲八幡神社古学堂、等）の現状を確認し、保存の取り組みに関する課題を共有することができた。

地域歴史資料データインフラ khirinC については、古文書情報のデータ化や人名・地名・時間情報の可視化に関する研究を進めるとともに、資料情報の公開についても検討した。これらの研究成果は 12 月 2 日に国立歴史民俗博物館日本歴史文化知人文情報ユニットと本科研 B 班「地域歴史資料インフラ構築領域」との合同研究会「人文資料のデータセットのマネジメント」において報告・議論を行った。

各研究領域における研究会も引き続き実施した。A 班「地域歴史資料継承領域」は、4 月 23 日に第 9 回研究会「地域歴史資料の保全活用団体事例」を開催した。C 班「災害文化を内包した地域社会形成史研究領域」では、岡山大学文明動態学研究所と共同で計 5 回（5 月 14 日、7 月 30 日、9 月 24 日、11 月 23 日、3 月 5 日）の研究会を開き、古代から近現代にかけての災害史や人々の生存の歴史に関わる研究を進展させた。

また、以下 6 件のシンポジウム等に共催・協力し、地域歴史文化創成のための地域史料保全や災害文化形成に関わる災害史料保全等について、実践的研究や全国的な連携を深めることができた。

① ハプスブルク史研究会特別例会「ションコイ・ガーボル教授講演会」（共催、9 月 24 日、於神戸大学大学院人文学研究科 B132・オンライン開催）
② 第 12 回震災資料の収集・公開に係わる情報交換会（共催、11 月 11 日、於神戸大学大学院人文学研究科大会議室・オンライン開催）
③ 国際シンポジウム「地域文化と博物館」（共催、12 月 16 日・17 日、オンライン開催）
④ 第 21 回歴史文化をめぐる地域連携協議会「自治体史編さんの現在 ― 参加と活用の新しい取り組み」（共催、1 月 21 日、於神戸大学瀧川記念学術交流会館）
⑤ 第 9 回全国史料ネット研究交流集会（共催、1 月 28 日・29 日、於宮日会館宮日ホール）
⑥ 地域歴史文化大学フォーラム「地域社会との協働・共創を目指して ― 歴史文化資料保全ネットワーク事業の役割とその展開 ―」（共催、3 月 18 日、オンライン開催）。

令和 5 年度は、11 月 3 日から 6 日にかけて、住民と博物館とが協力して地域の歴史文化を調査し、博物館展示を行っている台湾の桃園市立大溪木藝生態博物館の訪問を実施した。訪問においては、同館の理念・主要な活動および大溪の歴史文化・宗教文化、木工芸産業の歴史についての知見を得たほか、陳館長・枋副館長、台北芸術大学の黄貞燕氏らと意見交換を行うことができた。同館では大溪旧市街の街並み保存や大溪郊外での宗教行事の調査に取り組んでいるが、その中核には「街角館」と呼ばれる、住民が博物館に協力して一般の商店や住宅・寺院等でパネル展示や解説等を行うという、展示パートナー的な連携が存在している。今回の訪問では数カ所の「街角館」の取組みを見学して多くの地域住民とも意見交換を行うことができ、大溪木藝生態博物館の歴史文化をめぐる特徴的な地域連携の事例から、本研究課題に関わる多くの知見を得ることができた。

本年は、当初の研究期間終了予定年にあたるため、各研究領域における研究会の実施、研究成果の公表等も積極的に実施した。A 班「地域歴史資料継承領域」では、この間の研究実践例を中心に、史料保存に関わる「手法」だけではなく、「考え方」を広く共有することを目指して、天野真志・松下正和編『地域歴史文化のまもりかた―災害時の救済方法とその考え方　付・英語版』（人文書院、2024 年 3 月）を出版した。同書は、より国際的な視点から多くの人々に読まれることを期待して英訳版を付している。B 班「地域歴史資料インフラ構築領域」では、4 月 14 日に人間文化研究機構国立歴史民俗博物館機関拠点型基幹研究プロジェクト「日本歴史文化知の構築」2022 年度の成果報告全体集会におけるディスカッション「歴史資料のデータはどのようにすれば増えるのか?」が、関連行事として開催された。C 班「災害文化を内包した地域社会形成史研究領域」では、岡山大学文明動態学研究所と共同で計 4 回（5 月 21 日、7 月 22 日、9 月 9 日、11 月 23 日）の研究会を開き、古代から近現代にかけての災害史や人々の生存の歴史に関わる研究を進展させた。C 班のこれまでの研究成果は、『文明動態学』Vol.3 特集「災害と文明・地域社会」（2024 年 3 月刊行）として公表した。

また、特別推進研究全体では、5 年間の研究成果をひろく発信して、国際的な研究潮流の中に位置づけるために、海外からも研究者を招聘して国際シンポジウム「大災害時代における地域存続と歴史文化―地域歴史資料学を機軸として―」（2024 年 3 月 2 日・3 日、於神戸大学統合研究拠点コンベンションホール、オンライン配信あり）を開催した。続発する大規模自然災害により地域歴史文化の継承が大きな危機に瀕する状況下で、地域住民を主体としながらいかにしてそれらを保全継承することができるかについて、この間研究を

深めてきた地域歴史資料学の視点から報告を行った。ガーボル・ションコイ氏（エトヴェシュ・ロラーンド大学、ハンガリー）やアンドレアス・フィッカーズ氏（ルクセンブルク大学、C2DH センター長）の国際的観点からの報告を踏まえて、報告者・参加者による活発な議論が行われた。地域歴史文化の保存・継承の国際的な展開、地域資料学の有する可能性について幅広い知見を得ることができた。

このほか研究成果や今後の課題については、2024 年 3 月 23 日・24 日に開催した「総括研究会」（於スペースアルファ三宮）で議論した。

また、以下 5 件のシンポジウム等に共催・協力し、地域歴史文化創成のための地域史料保全や災害文化形成に関わる災害史料保全等について、実践的研究や全国的な連携を深めることができた。

①相馬歴史資料ネットワークシンポジウム「そうまの歴史を守る・つたえる」（共催、2023 年 9 月 3 日、於福島県立相馬高校・同若駒会館、主催：そうま歴史資料保存ネットワーク）

②第 13 回震災資料の収集・公開に係わる情報交換会（共催、2023 年 12 月 1 日、於神戸大学大学院人文学研究科学生ホール、オンライン開催、主催：神戸大学都市安全研究センター「災害資料学の実践的研究―阪神・淡路大震災の知見を基礎として―」（研究代表者・奥村弘）、阪神・淡路大震災資料の保存・活用に関する研究会、神戸大学附属図書館）

③第 5 回歴史文化資料保全西日本大学協議会（協力、2023 年 12 月 17 日、オンライン開催、主催：人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「歴史文化資料保全の大学・共同利用機関ネットワーク事業」、神戸大学大学院人文学研究科）

④第 22 回歴史文化をめぐる地域連携協議会「地域歴史遺産を取り巻く多様な取り組み―文化財保存活用地域計画を足がかりにして―」（共催、2024 年 1 月 21 日、於神戸大学瀧川記念学術交流会館、主催：神戸大学大学院人文学研究科、同地域連携センター）

⑤第 10 回全国史料ネット研究交流集会（共催、2024 年 2 月 17 日・18 日、於一橋大学東キャンパス、主催：第 10 回全国史料ネット研究交流集会実行委員会、人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「歴史文化資料保全の大学・共同利用機関ネットワーク事業」）

Ⅱ．部局内センター等の活動

Ⅱ-1．海港都市研究センター

2023 年度、海港都市研究センター（以下、センターと略称）では、大学院人文学研究科における共通科目授業の開講、世界海洋文化研究所協議会（WCMCI）第 13 回国際大会の主催（会場提供）、パレスチナ問題に関する映画上映会・討論会、および紀要『海港都市研究』第 19 号の刊行等の諸事業を行った。

[1] 人文学研究科共通科目の開講

今年度も前期に大学院博士課程前期課程の大学院生向けに「海港都市研究交流演習」、博士課程後期課程の大学院生向けに「海港都市研究企画交流演習」をそれぞれ開講した。

授業は樋口教授が担当し、受講生が各自の研究についてプレゼンテーションを行い、受講生全員で討議するというスタイルを採った。授業のテーマは「越境」とし、何らかの「越境」的テーマを含むものであればOK とし、さまざまな研究分野を専門とする受講生を得た。

[2] WCMCI 国際シンポジウム（世界海事史学会国際大会）の主催

本センターは例年、韓国海洋大学・台湾大学・中山大学・長崎大学等をパートナーとして持ち回りで海港都市国際会議を開催し、若手研究者に国際的な場における研究発表の機会を提供するとともに、韓国海洋大学を中心とする世界海洋文化研究所協議会 WCMCI（The World Committee of Maritime Cultural Institutes）の枠組みで行われる代表者会議や国際学術シンポジウムにも参加してきた。

2023 年度は 10 月 21 日・22 日に、第 13 回世界海洋文化研究所協議会学術大会（国際シンポジウム）を、神戸大学を会場校とし、当海港センターが主催する形で挙行した。「東アジア海域氏の新視点」をテーマに、総計 11 名が研究報告を行い、神戸大学からは 3 名の院生が研究発表を行った（鸞孟聡「地理的制約を越えたエスニックネットワークとエングレーブ：その構造と機能」、沈思遠「出稼ぎ家事労働者の移動から見た中国沿岸部と内陸部の相互作用」、山戸麻紗子「冷戦初期日中関係の断層－堀田善衛『断層』論」）。そのほか、当日の通訳等の作業に多くの院生・留学生が参加した。

[3] パレスチナ映画上映会・討論会の開催

10 月 7 日以降、悪化の一途をたどるパレスチナ情勢に関する認識を共有するべく、12 月 7 日、NPO 法人神戸定住外国人支援センター（KFC）等との共催で、『パレスチナ・ガザ地区への侵攻に抗議する緊急企画 映画『ガーダ パレスチナの詩』 上映と共同討議』を開催した。前半では映画を上映し、後半ではパレスチナ文学の専門家で早稲田大学教授の岡真理さんのオンライン参加を得て、フロア全体でパレスチナの現代史と現在進行中のイスラエルによるジェノサイドをめぐる討論を行った。

[4] 紀要『海港都市研究』第 19 号の刊行

3 月、紀要『海港都市研究』第 19 号を刊行した。

Ⅱ-2. 地域連携センター

人文学研究科地域連携センター活動報告

大学院人文学研究科（文学部）では、2002 年より「歴史文化に基礎をおいた地域社会形成のための自治体等との連携事業」を開始した。同年 11 月に地域連携研究員制度を創設し、翌年 1 月には神戸大学文学部地域連携センターを設置。2007 年の改組にもとづき、現在は人文学研究科地域連携センターとなっている。

本事業は、阪神・淡路大震災以来の地域貢献活動を踏まえ、大学が自治体や地域住民と連携し、県内各地の歴史資料の保全・活用や、歴史遺産を活かしたまちづくり等に取り組んでいくことを目的としている。現在展開する事業は多岐にわたるが、おおむね以下の 4 つを軸として取り組んでいる。

１．歴史文化を活かしたまちづくり支援と自治体史の編纂協力
２．歴史資料・災害資料の保全・活用
３．地域歴史遺産を活用できる人材の育成
４．地域の歴史文化をめぐる情報の共有や交流の促進

また、当センターを拠点とする事業として、2019 年度に採択された科学研究費補助金特別推進研究「地域歴史資料を機軸とした災害列島における地域存続のための地域歴史文化の創成」（研究代表者・奥村弘）が展

開中である。また 2018 年 1 月に、神戸大学・東北大学・人間文化研究機構（基盤機関：国立歴史民俗博物館）の三者で「歴史文化資料保全の大学・共同利用機関ネットワーク事業」に関する連携協定が締結された。同事業は2022年度より人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクトと位置づけられ、当センターは拠点校である神戸大学の基盤機関として、第1期の活動を継承・発展させる形で各種事業を展開している。

このほか年報『LINK【地域・大学・文化】』を刊行するなど、研究および研究成果の公表も積極的に行っている。

以下、個別事業ごとに今年度の活動の概要を報告する。

（1）歴史文化を活かしたまちづくり支援と自治体史の編纂協力

1　兵庫県との連携事業

＊ 兵庫県教育委員会文化財課との連携

＊ 兵庫県地域創生局地域遺産室との連携

2　神戸市との連携事業

＊ 神戸市文書館との連携

＊ 神戸市文化スポーツ局文化財課との連携

・神戸村文書の研究と成果の公開事業

＊ その他

3　包括協定にもとづく灘区との連携事業

＊ 『篠原の昔と今』『水道筋周辺地域のむかし』の送付依頼に対応

4　神戸市を中心とする文献資料所在確認調査

＊ 神戸を中心とする文献史料所在確認調査（今年度は実施せず）

＊ 神戸大学附属図書館所蔵古文書調査

・若林泰旧蔵文書データ確認作業

・人文学・社会科学データインフラストラクチャー強化事業への協力

5　住吉歴史資料調査会との連携事業

＊ 史料調査

・住吉村横田家文書、下田清五郎氏文書の翻刻

＊ 古文書勉強会の開催（毎月 1 回開催（8 月・12 月休み））

6　大学協定に基づく小野市との連携事業

＊ 共同研究「小野市小野地区歴史調査及び小野市市場町近藤廣家文書目録作成」

・資料調査の実施：計 9 日

＊ 小野市小野地区歴史調査

・聞き取り調査の実施

7　大学協定に基づく朝来市との連携事業

＊ 石川家文書整理会の開催：毎月第2・第4火曜日

＊ 多々良木歴史研究会への協力、同区有文書の目録作成

＊ あさご古文書整斉会への協力：毎月第2水曜日

＊ 竹田区有文書整理への協力：毎月第2水曜日

＊ 山田家文書の調査・整理・目録作成

8　部局協定にもとづく丹波市との連携事業

＊ 令和5年度連続講座「見る・知る・学ぶ　丹波の歴史」の開催：7/29・9/9・10/28・11/25・12/23・2/10

・第6回（2/10）はシンポジウム「郷土の歴史を楽しむために」を開催

＊ 古文書調査等

・山南町堂本家文書調査：6/17・6/18・7/29・7/30

・青垣町山垣区有文書調査：7/21

・山南町高座神社文書調査：10/13

・柏原藩士文書（仮）目録作成

・その他地域所在資料調査多数

＊ 成果展の開催および「たんば史料叢書」の刊行

・成果展：丹波市連携事業成果報告展「区有文書からみる江戸時代の山垣村」、8/21～9/3、於やまびこセンター萬歳山

・〈たんば地域史料叢書１〉『江戸時代の村と山－丹波国氷上郡山垣村山論関係史料－』

＊ 丹波古文書倶楽部への協力：毎月第2土曜日、8月休会、講師：木村修二

9　大学協定にもとづく加西市との連携事業

＊ 加西市戦争遺産資料拡充調査

・『加西市近代遺産調査報告書4、「Dumitru Nistor prizonier de război în Japonia―翻訳：ドゥミトル・ニストルの画文集―」』の発行

＊ 加西市戦争遺跡調査委託

・聞き取り調査：8/24

・マイクロフィルム資料の目録作成

・神戸大学食資源教育研究センター内の防空壕調査

・加西市地域活性化拠点施設「soraかさい」整備への協力

＊ その他

・井上が加西市文化財審議委員として委員会に出席

10　尼崎市との連携事業

＊ 市沢が尼崎市立歴史博物館の文書館部門の専門委員として運営について助言

11　三木市との連携事業

＊「三木市と国立大学法人神戸大学との連携に関する協定書」（平成 25 年 6 月締結）に基づく、新三木市史編さん支援事業

・通史編部会（古代史部会、中世史部会、近世史部会、近代史部会、現代史部会、自然環境部会、文化遺産部会、考古部会）への助言・調査協力

・地域編部会（吉川部会・緑が丘部会・三木部会・青山部会・細川部会・別所部会）活動の助言指導

・三木市立みき歴史資料館企画展「地域の史料たち 7～三木の歴史～」、10/14～12/24

・『市史研究みき』第 8 号、『市史編さんだより』第 14 号、第 15 号の編集

＊ 商工観光課との連携事業

・市民グループ「旧玉置家住宅文書保存会」への活動支援

＊ 三木市立みき歴史資料館事業への協力

・木村が同館館長の諮問機関である「みき歴史資料館協議会」の委員（会長）として参画

12　三田市との連携事業

＊ 旧三田藩主九鬼家資料の総合調査（今年度は実施せず）

13　丹波篠山市との連携事業

＊ 丹波篠山市史編さん資料調査等業務共同研究

・専門部会（考古編・古代編・中世編・近世編・近現代編・自然環境編・文化財編）の開催

・第 2 回市史編さん新発見・新収蔵資料展「上立町自治会文書から見える江戸時代の篠山城下町」、5/9～6/18

・第 3 回市史編さん新発見・新収蔵資料展「丹波篠山に伝わる古文書「丹波木綿と縞帳」、7/1～7/30

・図書館開館 20 周年記念事業「市史編さん事業展」、8/2～8/20

・第 4 回市史編さん新発見・新収蔵資料展「鋪之丞さまの初節句」、12/13～1/30

・地域編キックオフシンポジウム「市民とともに作り上げる「丹波篠山市史」」、1/13

・資料調査、調査報告会の開催

＊ 市立中央図書館「地域資料整理サポーター」活動への協力

・定例会の開催：5/24、6/28、7/19、9/20、12/20、1/17

＊ 市立中央公民館主催「古文書講座（中級編）への出講

＊ 部落史研究委員会へのアドバイザー協力（月 2 回）

＊ NPO 法人 SHUKUBA 主催「古文書講座」への協力

14　明石市との連携事業

＊ 明石藩関連資料調査・公開業務

・明石市立文化博物館特別企画展「明石藩の世界Ⅹ―明石藩の懐事情」、9/9～10/15、於明石市立文化博物館、同館・センター主催事業

・講演会「豪商による明石藩への貸付」、9/24、講師：加藤明恵

＊ 明石市における地域資料の調査等

・卜部和彦家文書調査：9/22、9/27、10/17、11/12、11/22、12/13、1/24、2/14、3/8

・古代播磨の歴史文化遺産調査

・近代史料の調査

・加藤が明石市史編さん委員会へ地域史料調査の担当者として出席

＊ 横河家文書調査・公開業務

・資料の目録作成、仮整理等

15 たつの市に関する連携事業

＊ 神戸大学近世地域史研究会（月１回・原則第１日曜日）

・会報の発行

・成果報告書『播磨国龍野城下における寺院と地域―真宗大谷派善龍寺文書翻刻集―』の発行

16 姫路市香寺町との連携事業

＊ 令和５年度提案型協働事業報告会「ふるさとの道」への参加

17 佐用町との連携事業（今年度は実施せず）

18 福崎町との連携事業

＊ 共同研究「福崎町の地域歴史遺産掘り起こし」

・松岡家関係資料調査

・福崎町立柳田國男・松岡家記念館秋季企画展「「松岡操　たけ展～松岡五兄弟を育てた夫婦～」、10/7～12/10、於同記念館、センター協力事業

・中島区有文書目録の作成

・地域資料調査

・『広報ふくさき』への寄稿

・調査合宿：3/7・3/8

＊ 共同研究「兵庫県指定文化財　三木家住宅文献資料調査」

・三木家文書のデジタル化

・三木家資料保存ワークショップ：5/6、7/1、9/2、11/4、11/12、1/6、3/2

・『大庄屋三木家資料集５　令和元年度三木家住宅副屋・離れ襖調査』の発行

・大庄屋三木家住宅特別展「ふすまの中から見る三木家―下張り文書調査からわかってきたこと―」、10/28～12/3、於同住宅、センター協力事業

・三木家入門講座⑦「襖からのぞき見る江戸本屋の営み～三木家と姫路の本屋の交流～」、11/12、講師：石橋知之（人文学研究科博士課程後期課程）、於大庄屋三木家住宅

＊ その他

・井上が福崎町文化財保存活用地域計画協議会の委員として協議会に参加

19 猪名川町との連携事業

＊ 町民グループ「猪名川の古文書を楽しむ会」への協力（毎月第3土曜日、9月・11月・1月・2月は休会）

20 大学協定に基づく大分県中津市との連携事業

＊ 3/9 中津歴史博物館協議会への参加

21 香美町との連携事業

＊ 文堂古墳と山陰道総合調査委員会

・古市、井上が委員に委嘱、第1回委員会に参加：7/14

・「文堂古墳と山陰道シンポジウム」11/18、於香美町立村岡区中央公民館に、古市、井上が登壇

（2）歴史資料・災害資料の保全・活用

＊ 歴史資料ネットワークへの協力・支援

・災害対応

・神戸市兵庫区平野地区「奥平野古文書勉強会」（毎月第2日曜日、8月休会）

＊ 附属図書館震災文庫への協力

・「第13回被災地図書館との震災資料の収集・公開に係る情報交換会」12/1、ハイブリッド開催

・サンテレビ所蔵震災報道映像の震災文庫への提供・公開のための検討会の開催

・人文学・社会科学データインフラストラクチャー強化事業、震災資料関係への協力

＊ 人文学研究科古文書室の所蔵文書整理（今年度は実施せず）

（3）地域歴史遺産を活用できる人材の育成

1 地域歴史遺産の活用をはかるリーダー養成プログラム

＊ 現代 GP「地域歴史遺産の活用を図る地域リーダーの養成」事業の成果にもとづいて開講された大学院人文学研究科「共通教育科目」への授業提供

・地域歴史遺産活用研究A・B（学部は「地域歴史遺産保全活用基礎論A・B」、Aは「博物館資料論」との同時開講）：Aは金曜1限、Bは木曜1限に実施

・地域歴史遺産活用演習A・B（学部は「地域歴史遺産保全活用演習A・B」、博士課程前期課程は「地域歴史遺産活用演習」、同後期課程は「地域歴史遺産活用企画演習」）。Aは9/7～9に篠山フィールドステーション、Bは2/8・9に三木市玉置家住宅にて開講

2 平成22年～24年度特別研究「地域歴史遺産保全活用教育研究を基軸とした地域歴史文化育成支援拠点の整備」事業を定着・普及させる活動

＊ まちづくり地域歴史遺産活用講座：10/21、10/22、主催：人文学研究科・地域連携センター、共催：兵庫県教育員会、後援：神戸市教育委員会・神戸市灘区

＊ オプションプログラム古文書解読初級講座：11/6・13・20・27、講師：河島裕子（尼崎市立尼崎歴史博物館）

（４）地域の歴史文化をめぐる情報の共有や交流の促進

1　第22回歴史文化をめぐる地域連携協議会「地域歴史遺産を取り巻く多様な取り組みー文化財保存活用地域計画を足がかりにしてー」、1/21、参加：29機関55名、主催：神戸大学大学院人文学研究科、同地域連携センター、共催：兵庫県教育委員会、科学研究費特別推進研究「地域歴史資料学を機軸とした災害列島における地域存続のための地域歴史文化の創成」研究グループ（研究代表者・奥村弘）、人間文化研究機構基幹研究プロジェクト「歴史文化資料保全の大学・共同利用機関ネットワーク事業」

（５）地域連携センターを拠点とするプロジェクト

1　科学研究費助成金・特別推進研究「地域歴史資料学を機軸とした災害列島における地域存続のための地域歴史文化の創成」（研究代表者：奥村弘、課題番号19H05457）

＊ 国際シンポジウム「大災害時代における地域存続と歴史文化―地域歴史資料学を機軸として―」、3/2・3/3、神戸大学統合研究拠点コンベンションホールおよびオンライン

＊ 「地域歴史資料データインフラストラクチャ構築領域」関連行事ディスカッション「歴史資料のデータはどのようにすれば増えるのか?」の開催、4/14、国立歴史民俗博物館大会議室およびオンライン

＊ ションコイ・ガーボル氏講演会「現在のヨーロッパの文化遺産政策と欧州文化遺産認定制度–歴史家の視点から/Current European Cultural Heritage Policy and the European Heritage Label – from a historian’s perspective」の開催、9/18、オンライン

＊ 「災害文化と地域社会形成史」研究会の開催：5/21、7/22、9/9、11/23

＊ 関連行事の共催・協力等

・［共催］相馬歴史資料ネットワークシンポジウム「そうまの歴史を守る・つたえる」、9/3、於福島県立相馬高校・同若駒会館、主催：そうま歴史資料保存ネットワーク

・［共催］第13回被災地図書館との被災資料の収集・公開に係る情報交換会、12/1、ハイブリッド

・［協力］第5回歴史文化資料保全西日本大学協議会、12/17、オンライン、主催：人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「歴史文化資料保全の大学・共同利用機関ネットワーク事業」、神戸大学大学院人文学研究科

・［共催］22回歴史文化をめぐる地域連携協議会、1/21、於瀧川記念学術交流会館

・［共催］第10回全国史料ネット研究交流集会、2/17・18、於一橋大学東キャンパス、主催：第10回全国史料ネット研究交流集会実行委員会、人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「歴史文化資料保全の大学・共同利用機関ネットワーク事業」

2　歴史文化史料保全の大学・共同利用機関ネットワーク事業

＊ 講演会「よみがえる聆涛閣コレクションー神戸歴史遺産「住吉の豪商・吉田家関係資料」を知り、守り、伝えるー」の開催、4/15、於御影公会堂、共催：一般財団法人住吉学園住吉歴史資料館、神戸大学人文学研究科地域連携センター、協力：神戸市

＊ 第5回歴史文化資料保全西日本大学協議会の開催、12/17、オンライン

＊ 伊方原発関係史料の保存・整理作業

＊ 関連事業の共催・協力

・［共催］第12回被災地図書館との被災資料の収集・公開に係る情報交換会、11/11、オンライン

・［主催］歴史文化資料保全西日本大学協議会、12/18、オンライン

・［共催］22回歴史文化をめぐる地域連携協議会、1/21、於瀧川記念学術交流会館

・［共催］第10回全国史料ネット研究交流集会、2/17・18、於一橋大学東キャンパス

・その他資料調査、ワークショップ等多数

（６）地域連携研究と研究成果の公表

1　年報『LINK【地域・大学・文化】』15号の刊行

・12/28発行、特集「自治体史編さんの現在―参加と活用の新しい取り組み―」、インタビュー・シリーズ4」、フィールドリポート2本、「LINKを読む」1本、活動報告4本、時評・展示評２本（総頁数142頁）

2　地域関連研究

・地域連携センタースタッフによる日本学術振興会科学研究費助成事業

・講演、市民講座等への出講多数

以上、活動の詳細は、2024年3月末に発行された、当センターの2023（令和5）年度事業報告書を参照。また、同報告書は、神戸大学学術成果リポジトリKernelに公表されている。

Ⅱ-3. 倫理創成プロジェクト

[1] 目的

医療・環境・テクノロジー・情報などをめぐる現代社会の倫理諸問題を、人文学の多様な観点から分析し、さらには他の人文・社会科学、自然科学の諸分野とも学域横断的に連携しながら、高度科学技術社会として特徴づけられる現代に対応した新しい倫理システムの創成を目指す。

[2] 研究プロジェクトと人文学研究科の共通科目の実施状況

・選択必修の研究科共通科目「倫理創成論研究」

本講義は、科学技術と環境、情報、生命・医療などの応用倫理・応用哲学の諸原理と具体的問題について学びつつ、応用倫理学の意義とその方法論についても考察するものである。2023 年度は、生命・医療倫理学、

環境倫理学などの代表的な応用倫理学の諸原理と具体的な事例による問題分析を行い、応用倫理学研究において重要な学際的視点を重視するとともに、事例研究の基礎を受講者が修得することを目指した。

回	授業内容
1	ガイダンス・イントロダクション 茶谷直人
2	「生殖技術をめぐる倫理的問題」中真生
3	「インフォームド・コンセントの成立経緯と倫理的意義1」茶谷直人
4	「インフォームド・コンセントの成立経緯と倫理的意義2」茶谷直人
5	「死に臨む哲学1」加藤憲治
6	「死に臨む哲学2」加藤憲治
7	「生延長と健康1」安倍里美
8	「生延長と健康2」安倍里美
9	「感情制御の倫理的問題１」丸山栄治
10	「感情制御の倫理的問題2」丸山栄治
11	「AI・ロボットの倫理／専門職倫理」新川拓哉
12	「スマートグラスとプライバシーの倫理／専門職倫理」新川拓哉
13	「被行為者性と意識―脳オルガノイドをめぐる倫理問題」新川拓哉
14	「AI 倫理（1）：AI と差別」宮原克典（北海道大学人間知・脳・AI 研究教育センター(CHAIN)）
15	「AI 倫理（2）：AI と差別」宮原克典（北海道大学人間知・脳・AI 研究教育センター(CHAIN)）

・「倫理創成論発展演習」（博士課程後期課程）

この演習は、受講者が積極的に現実の社会問題に触れることを通じて、応用哲学・応用倫理学的な問題の所在を学び、自分で考え、意見を表明できるようになることを目指すものである。今年度は、受講者の専門分野を踏まえながら、応用哲学・応用倫理学の基礎知識の陶冶、問いの発見と議論構築のトレーニング、受講者の研究内容の吟味と検討などを行った。

[3]『21 世紀倫理創成研究』

『21 世紀倫理創成研究』（*Journal of Innovative Ethics*）第 17 号を刊行した。ウェルビーイングとテクノロジーの融合をめぐる倫理的・法的・社会的課題（ELSI）を、社会疫学の視点を手がかりとして論じた論文一編を掲載したほか、倫理創成プロジェクトの諸活動（関連授業、主催・共催ワークショップなど）についての報告文を掲載した。

なお、2009 年 4 月に始まった神戸大学電子図書館、リポジトリ Kernel のアクセス統計では、本雑誌へのアクセスは 2023 年 1 月初めの時点で累計約 9.4 万件であった。これまでアクセス数が顕著に多いのは、婚

姻の意味に注目した同性婚に関する論文、海洋プラスチックごみ問題に関する報告、新型コロナウイルス・ワクチンに関する論文、生殖技術と身体の関わりについての報告などである。

[4] 本学が全学的規模で開始する「神戸大学生命・自然科学 ELSI 研究プロジェクト（通称：KOBELSI）」の発足と関連研究集会の開催

「神戸大学生命・自然科学 ELSI 研究プロジェクト」（KOBELSI）は、本学における神戸大学デジタルバイオ＆ライフサイエンスリサーチパーク（DBLR）の設立に伴い、その併設組織として 2023 年に開設された全学的プロジェクトである。5 つの研究拠点（バイオものづくり研究拠点・先端膜工学研究拠点・医工学研究拠点・健康長寿研究拠点・社会システムイノベーション研究拠点）を軸とする DBLR は、未来社会に向けた新たな課題の解決に資する経済的・社会的価値を創造するために、傑出した知と有能な人材を創出するとともに、社会実装につなげる研究環境基盤を強化することを目指して開設されたものである。本プロジェクトは、このように本学が共創的な先端科学技術研究を推進する学内的状況と、ELSI 研究についての今般の社会的要請を踏まえ、先端科学技術の社会実装に関わる倫理的（Ethical）・法的（Legal）・社会的（Social）な問題（Issues）を学際的に研究するために立ち上げられた。KOBELSI は、ELSI の基礎に「人々の充実した生（エウダイモニア）」「社会の福利」といった根源的な問題が通底すること、および現代の科学技術社会における倫理的問題の学際的研究を人文学研究科の研究教育センター「倫理創成プロジェクト」が長年にわたり推進してきた経緯に鑑み、倫理創成プロジェクトのメンバーが組織を統括し、学内の様々な部局が参画するという研究体制をとっている。

＜研究体制＞
・リーダー
茶谷直人
・人文学研究科
茶谷直人
新川拓哉（哲学・本プロジェクト副リーダー）
中真生（倫理学）　安倍里美（倫理学）　平井晶子（社会学）
市澤哲（日本史学）　原口剛（社会地理学・都市論）　柳澤邦昭（社会心理学）
・国際文化学研究科
塚原東吾（科学史・STS）
・法学研究科
高橋裕　角松生史　板持研吾
・経済学研究科
小島理沙
・経営学研究科
松嶋登
・医学研究科

森康子　　青井貴之
・保健学研究科
秋末敏宏
・人間発達環境学研究科
増本康平

＜イベント＞
KOBELSI が 2023 年度に主催・参与した主な研究集会・イベントは以下の通りである。

2023 年 6 月 12 日
Prof. Dr.em. Alfred Nordmann (TU Darmstadt)
"Kairos and the Art of Precision: On Alexander Kluge"

2023 年 7 月 13 日
王　小梅（神戸大学人文学研究科　学術研究員）
「ウェルビーイングとテクノロジーの融合をめぐる倫理的・法的・社会的課題（ELSI）」
大家　慎也（神戸大学人文学研究科　学術研究員）
「ネガティブエミッション技術(NETs)の ELSI‐‐全体像の理解」

2023 年 8 月 2 日
「神戸大学生命・自然科学 ELSI 研究プロジェクト」発足記念イベント
神戸大学百年記念館 六甲ホール
第一部
基調講演：茶谷 直人（神戸大学生命・自然科学 ELSI 研究プロジェクトリーダー・人文学研究科教授）
「ELSI 研究の意義と神戸大学生命・自然科学 ELSI 研究プロジェクトについて」
講演：秋末 敏宏（DBLR 健康長寿研究拠点長・保健学研究科長）
「DBLR 健康長寿研究拠点と ELSI 研究プロジェクト連携の展望」
講演：平田 充宏（神戸大学学術研究推進室（URA））
「URA と神戸大学生命・自然科学 ELSI 研究プロジェクトの協働の取り組みと今後の課題について」
第二部
招待講演：濱田 志穂（科学技術振興機構（JST）研究開発戦略センター　フェロー）
「イノベーションを加速する大学のかたち―ELSI センターの国内外動向」
招待講演：後藤 基行（立命館大学大学院先端総合学術研究科 准教授・立命館大学生存学研究所 副所長・JST-RInCA 研究開発プロジェクト「医療・ヘルスケア領域における ELSI の歴史的分析とアーカイブズ構築」リーダー）
「医療・ヘルスケア領域における ELSI の歴史研究はどのように可能か？―アーカイブズの可能性」

2023 年 11 月 3 日
サイエンスアゴラ in 神戸 ～常識を覆せ！神戸から目指すオドロキの未来（協力）
甲南大学ポートアイランドキャンパス 7F レクチャーホール

2023 年 11 月 20 日
講演：西本優樹（南山大学）
「集団の不正な行為に直接関与しなかった構成員はいかなる意味で責任を負うのか」
講演：川崎優（九州大学）
「生殖の選択における非同一性問題の解決策の検討」

2024 年 2 月 16 日
KOBELSI-CHAIN 合同研究報告会「科学技術倫理と人間知」
北海道大学オープンイノベーションハブ　エンレイソウ 2 階 第 1 会議室
開会挨拶：両センターの紹介（茶谷・宮原）
Xue Li & Takuya Niikawa
“Holding “good enough” lights in shadowed memories: phenomenology of living with loved ones with dementia”
Masashi Takeshita
“Speciesism in Natural Language Processing Research”
Hiroyuki Iizuka
“From Symbolic Formation to Grounding: Bridging Bottom-Up and Top-Down Processes in Shared-Module Network”
Takuya Niikawa
“Mood and Atmosphere”
染谷昌義（北海道大学 CHAIN・博士研究員）
「アニマシー心理学へ向けて： 植物の神経生物学と非神経生物の心のはたらきをめぐる論争」
丸山栄治（神戸大学・博士研究員）
「スマートグラスとプライバシー」
総合討議
閉会挨拶（新川）

2024 年 2 月 24 日
「脳を作る(!?) 最先端の科学：神戸・科学技術倫理セミナー」（広島大学共創科学基盤センターと共催）
アンカー神戸 ANCHOR KOBE
演者：
澤井努（広島大学大学院人間社会科学研究科・准教授）
　「体外で脳を作るってどういうこと？」

片岡雅知（広島大学大学院人間社会科学研究科・研究員）
「人工的に脳を作っていいの？」
新川拓哉（神戸大学人文学研究科・講師）
「人工的な脳に心は宿るのか？」

2024 年 3 月 29 日
増本康平（神戸大学人間発達環境学研究科 教授・神戸大学ウェルビーイング先端研究センター 副センター長）
「老いとウェルビーイング」

[5] 今後の展望

上述のように倫理創成プロジェクトは、2023 年度に発足した全学的事業「神戸大学生命・自然科学 ELSI 研究プロジェクト」の中核的役割を担うこととなった。2024 年度は、前年度に遂行した研究集会などで得られた知見を活かしつつ、引き続きプロジェクトの本格的な事業遂行に邁進していきたい。また、ELSI 研究に限らず、医療・環境・工学・情報などに関する現代社会の応用倫理学的諸問題について、引き続きさまざまな原理的かつ具体的研究を展開していきたいと考えている。

Ⅱ-4. 人文学推進インスティテュート

[1] 目的

人文学推進インスティテュートは、平成 26 年 4 月に発足した日本文化社会インスティテュートを前身とする。元来、日本語日本文化教育プログラム、KOJSP、グローバル人材育成などの関連事業を統括して日本文化、社会に関する教育・研究および日本における人文学の教育・方法を深化・発展させるべく活動していた。令和 4 年 4 月、「人文学推進インスティテュート」に改称、活動範囲を拡大し、地域連携センター、海港都市研究センター、倫理創成プロジェクト、日本語日本文化教育プログラムという人文学研究科内の四共同研究組織を支援し、事業間の調整をするようになった。

[2] 活動内容

活動内容については、第２部 I−１　運営費交付金機能強化経費：実践型グローバル人材育成事業「日本語教育・日本研究を中心とした実践型グローバル人材育成事業」、第１部Ⅰ−1−3. 教育上の特徴３の KOJSP に関する項目、等を参照のこと。

[3] 今後の活動

外部資金として戦略的事業経費を獲得済みである。上記の四共同研究組織のほかに、KOIAS（雰囲気学インスティテュート神戸）や文化交渉学など、若手研究者を中心とする新たなプロジェクトが稼働してい

る。国際交流としては今までに構築されたKOJSPのほか、パリ第10大学との交流プログラム、国立台湾大学、トリーア大学と共に国際会議INTERfacingをプラットフォームとするヨーロッパ研究推進プロジェクト、北京大学、復旦大学と共同する三大学人文学フォーラムもインスティテュートの事業となった。また、教員の研究成果を社会に還元するべく、教養書『人文学を解き放つ』を令和５年３月に刊行している。

Ⅱ-5. ESDコース（持続可能な開発のための教育コース）

[1] ESDサブコースの実施状況

文学部では令和５年度に、ESD 関連の全学共通科目の担当および哲学・社会学・地理学専修が共同して、以下の授業を行った。

《令和５年度文学部ESDコース科目授業一覧》

科目名	学期・時限	担当専修（教員）	備考（読替など）
ESD論A・B	（後期）水・5	５学部合同	1年生対象
環境人文学講義Ⅰ	（前期）月・2	哲学・社会学・地理学など	2年生以上
環境人文学講義Ⅱ	（後期）水・１	菊地　真	地理学特殊講義

ここでは、本年度に文学部で開講、実施された科目についてのみ報告する。

・環境人文学講義Ⅰの授業内容は以下のとおりである。

回	日程	授業内容
1	4/10	「イントロダクション」原口剛（地理学）
2	4/17	「生殖と生殖技術」中真生（倫理学）
3	4/24	「生延長と公衆衛生」安倍里美（倫理学）
4	5/8	「バイオエシックス（生命倫理学）とはなにか」（倫理学）
5	5/23	「家族とジェンダー」平井晶子（社会学）
6	5/15	「人間と孤独」柳澤邦昭（心理学）
7	5/22	ディスカッション
8	5/29	中間ふりかえり
9	6/12	「原発問題再考」白鳥義彦（社会学）
10	6/19	「環境社会学の視点」（社会学）
11	6/26	「都市と社会的公正：野宿の現場から問う（1）」（地理学）
12	7/3	「都市と社会的公正：野宿の現場から問う（2）」中川祐希（非常勤）
13	7/10	「都市と社会的公正：野宿の現場から問う（3）」中川祐希（非常勤）
14	7/14	全体ふりかえり（2）
15	7/24	最終試験

・環境人文学講義Ⅱ

この講義は自然地理学に含まれる各学問分野の近年の知見を踏まえつつ、教科「地理」のなかで、自然環境についてどのような観点から授業を展開することができるか、自分の力で考えられるようになることを目標とした。具体的には「統合自然地理学」と呼ばれる複数の手法・視点・表現（地図・グラフ等）・時間軸等から自然環境を含めた地域を分析する考え方についての講義を行った。

[2] 評価と課題

コース発足から核となってきた教員が一昨年度に定年退職したのち、哲学、社会学、地理学の関係専修相互の協力により、これまでのプログラムを引継ぐべく運営方法を模索している。そのため、本年度はESD演習については不開講としたが、次年度よりより発展的なかたちで開講予定である。

Ⅱ-6. 神戸雰囲気学研究所（KOIAS）

[1] 目的・沿革

2022年度、新学術領域「雰囲気学」の創出と展開のために、神戸雰囲気学研究所（以下、略称KOIASで表記）を設立した。これまで学術的に等閑視されてきた「雰囲気」に関する総合研究を発展させることを目的として、哲学、文学、歴史学、芸術学、美術史、心理学、建築学、メディア論などの諸分野による共同研究を行っている。神戸大学大学院人文学研究科の若手研究者を中心とした組織であるが、他部局（工学研究科、国際コミュニケーションセンター）および他大学・他機関（岡山県立大学、青山学院大学、東京大学、東北大学、大手門学院大学、郡山市立美術館など）のメンバーも加わっている。また、新学術領域の基盤となる国際研究ネットワークの整備に力点を置いており、2022 年度にローマ・トル・ウェルガータ大学のAtmospheric Spaces（イタリア）とダルムシュタット哲学実践研究所（ドイツ）、2023年度にコンコルディア大学のセンス学研究所（カナダ）とコペル科学研究センター（スロベニア）と、それぞれ研究協定を締結した。

[2] 2023年度の活動

KOIAS内では月例会を毎月開催して共同研究を続けている。特に2023年5月10日にヨギ・ヘンドリン氏（ロッテルダム大学准教授）講演会を、6月13日にアルフレッド・ノルトマン氏（ダルムシュタット工科大学退任教授）講演会を神戸大学大学院人文学研究科で開催した。また、5月5日には上記のセンス学研究所（カナダ）と研究協定を締結した。

2023 年 6 月 18 日から 21 日にかけてはスロベニアで、「呼吸哲学」国際シンポジウム（Respiratory Philosophy. A Paradigm Shift）をコペル科学研究センターと共催した。開会式において上記の研究協定を締結した。シンポジウムには世界各国から30名以上の関連研究者が集った。KOIASからは久山、有澤、新川、松山、池野、マリヌッチの6名が参加し、各専門分野にかかわる研究発表を行った。雰囲気・空気・呼吸（息／生気）をめぐる議論を通して、身体論・メディア論・環境学など多岐にわたる重要課題が明らかになった。

2023年9月23日には八巻和彦氏（早稲田大学名誉教授）、ハラルド・シュヴェッツァー氏（クース・アカデミー代表）、ヘンリエーケ・シュタール氏（トリーア大学教授）、久山（KOIAS）によるシンポジウム「ヨー

ロッパ思想史における〈雰囲気〉」を開催した。中世思想から現代文学までを横断しつつ、従来にない視点から思想史の流れを再解釈するための手がかりをえた。

2023 年 12 月から翌年２月にかけては、神戸大学「国際共同研究強化事業C型」により、ローマ・トル・ウェルガータ大学のトニーノ・グリッフェッロ教授を客員教授として招聘した。2023 年 12 月 20 日の講演会を端緒として、文学部・人文学研究科で複数回の講演会および特別授業を開き、同時に綿密な共同研究を行った。その成果をふまえて 2024 年 1 月 20 日には「建築と都市の雰囲気」（Atmosphere in Architecture and Urban Design）を、2 月 4 日には「雰囲気学の文化横断的可能性」（Cross-Cultural Possibilities of Atmospheric Studies）をテーマとして、二度にわたる国際シンポジウムを開催した。

2024 年 3 月 9 日には台北（台湾）において中央研究院と「气・気・氣」をめぐる国際シンポジウム Breath, Atmosphere（氣/Qi/Ki）and Aesthetics.Transdisciplinary Explosions を共催した。KOIAS からは久山、早川、大橋、有澤、新川、小寺の６名が参加し、各専門分野にかかわる研究発表を行った。中央研究院とは今後も「気」に関して東アジア内部の多様性をふまえた共同研究を行っていく計画であり、2024 年度に研究協定締結を予定している。

2024 年度からは島津製作所との共同事業もはじまった。京都の島津製作所本社内 KYOLABS において、「島津・KOIAS レクチャー」として、2023 年 10 月 30 日には KOIAS の活動を紹介する第１回レクチャー（久山）を行い、今後の共同事業のテーマを「デザインと雰囲気」に決定した。続いて 2024 年 3 月 7 日には、江戸時代の和本にみるデザインと雰囲気をテーマとした第２回レクチャー（有澤）を実施した。

福島県の郡山市立美術館とのコラボレーションも実現し、展覧会「〈雰囲気〉を展示する」（2024 年 1 月 30 日から 4 月 21 日まで）を共同企画した。2024 年 3 月 23 日には KOIAS によるギャラリートーク（久山）を行った。なお、この間、KOIAS 内部で「KOIAS アートプロジェクト」が立ち上がり、今後はアートをひとつの軸として活動を展開していく予定である。

その他、国内外での口頭発表、翻訳書や論文の公刊などの成果があった（一例として、久山雄甫「雰囲気学をひらく」『現代思想』51-15 号（2023 年 12 月）201－217 頁）。2024 年度からの神戸大学「先端的異分野共創研究プロジェクト」にも採択されており、今後も着実に活動の輪を広げていきたい。

Ⅱ-6. 文化交渉学

文化の衝突・融合・創出に着目する分野横断的研究を目的として、国際会議参加・運営を通じた共同研究・若手育成を行っている。令和５年度は以下の３つを軸として展開した。

[1]パリ大学ナンテール校（旧パリ 10 大学）

ナンテール校との学術交流については、以下の二点があげられる。

１）令和 5 年 10 月に、ナンテール校哲学科教授アンヌ・ソヴァナルグ氏を招聘した。氏は現代フランス哲学、とりわけテクノロジーと芸術に関する現代思想を専門としている。招聘期間中に研究発表として講演会を一度開催し、教育参加として学部向け講義１回、大学院演習１回、学部・大学院共通演習１回を担当してもらった。英語・フランス語を用いた機会を通じて、現代の芸術が関わるグローバルな課題について、参加した研究者や学生は最新の知見を共有することができた。

２）令和６年３月にナンテール校哲学科のティエリー・オケ教授、エリー・デューリング准教授および本学大橋、またオンライン参加として大阪大学の近藤和敬准教授の共催で、三大学合同の国際学生シンポジウムをナンテール校にて開催した。神戸大学から博士前期課程大学院生２名と現地留学中の博士後期課程学生の

３名が参加し、英語ないしはフランス語で口頭発表を行った。

例年開催されるシンポジウムや招聘を通じて、本学学生は国際的な研究活動の実績を積むのみならず、フランス本国の専門家によるアドヴァイスを直接受ける機会であり、また大阪大学やパリ大学の同世代の学生との交流を通じて、専門的な研究知見を深め、将来の留学先の選定にも役立つなど、修士論文や博士論文の完成度を高めることにとどまらない広範な成果をもたらしている。

[2] INTERFACEing

2023 年 9 月 25 日から 27 日までの 3 日間、本研究科主催で国際会議 INTERFACEing 2023 を開催した。INTERFACEing は国立台湾大学、トリーア大学（ドイツ）、神戸大学の協力のもと（この 3 大学は相互に協定校である）、人文系ヨーロッパ研究者が集い、世界的なネットワークを構築する場として、2021 年に始まった国際会議で、第 1 回大会は 2021 年に国立台湾大学、第 2 回大会は 2022 年にトリーア大学で開催された。第 3 回となる神戸大会は "Changing Paradigms: Humanities in the Age of Crisis" を全体テーマとして掲げ、21 か国から 70 名が参加して、英語・ドイツ語・フランス語・イタリア語・ロシア語の 5 言語で研究発表を行った。本研究科からは教員 2 名、PD1 名、大学院生（博士課程後期課程）1 名が研究発表した。（プログラムの詳細は http://www.lit.kobe-u.ac.jp//event/2023-07-12-01.html を参照。）INTERFACEing の発表者は開催後に国立台湾大学が発行する電子ジャーナル *Interface: Journal of European Languages and Literatures* に投稿できるシステムになっており、神戸大会の成果の一部は、本研究科教員がゲストエディターとして編集作業に加わった第 23 号（2024 年 3 月）に掲載されている（https://interface.org.tw/index.php/if/issue/view/34）。

[3] 異分野共創研究ユニット「『文化交渉学』創出にむけた研究ユニット」

- 神戸大学学術研究推進機構異分野共創研究企画・創出委員会による異分野共創研究ユニットとして「『文化交渉学』創出にむけた研究ユニット」が採択され、共同研究を実施した。特に 2023 年 8 月 8 日にキックオフ・ミーティング（オンライン）を実施し、9 月 13 日には神戸大学異分野共創研究報告会で報告をおこなうとともに、外部講師を招いたワークショップや研究会等の主催企画と共催企画を以下のとおり開催した。

【主催】

① 2023 年度第 1 回文化交渉学ワークショップ「亡命社会学者と境界移動の経験： 社会とその学問の境界を問い直す」（日時：2023 年 10 月 20 日（金）15:10〜17:30、場所：神戸大学文学部）

② 2023 年度第 2 回文化交渉学ワークショップ「国際移民の時代と地域社会の変容」（日時：2023 年 11 月 17 日（金）17:00〜18:30、場所：神戸大学文学部）

③ 映画『ガーダ　パレスチナの詩』（古居みずえ監督）上映会と討論会（日時：2023 年 12 月 7 日（木） 17:00〜20:00、場所：神戸大学文学部）

【共催】

④ 大学発アーバンイノベーション神戸『「外国ルーツの子どもたち」支援を軸とした多文化都市創生のための実証的研究』研究チーム&一般社団法人グローバル多文化社会研究所共同勉強会（日時：2023 年 11 月 3 日（金・祝）15：00〜17：30　場所：神戸大学文学部）

⑤ 広東外語外貿大学・神戸大学「近現代文学国際研究発表会」（日時：2024 年 1 月 28 日（日）11:00〜17:00〔オンライン〕）

⑥ 「社会の時間」研究会 第 9 回定例研究会 兼 科研費課題「社会学的時間批判」第 4 回研究会「近代の時間／近代という時代の再考」（日時：2024 年 3 月 25 日（月）13:30〜17:30〔オンライン〕）

- 同研究ユニットによる共同研究の成果の一部は、神戸大学大学院人文学研究科海港都市研究センター『海港都市研究』19 号（2024 年 3 月刊）で「異分野共創研究ユニット「『文化交渉学』創出にむけた研究ユニット」――プロジェクト紹介と活動報告（2023 年度）」として刊行した。また 2024 年度も同研究ユニットは異分野

共創研究ユニットとして採択され、継続して共同研究を実施する予定である。

Ⅲ. 社会貢献

Ⅲ-1. 公開講座

文学部・人文学研究科では、地域の方を対象に毎年度公開講座を実施している。しかし、令和2年度は、新型コロナウイルス感染症の感染拡大のため、残念ながら実施できなかった。

なお、平成29年度から令和5年度までの公開講座のテーマと概要は次のとおりである。

	テーマ	概　要
平成29年度	詩と謡	太古より人は声を発し、うたを謡い、詩を詠じてきました。しかし、印刷文化が発展するなかで、私たちはことばに宿る「声」の要素（オラリティー）よりも、書かれた文字（テキスト）を重視するようになってきました。文字に向き合うことの多い文学部の学びにおいても、ことばの聴覚性、身体性が意識されることは少なくなってきているといえるでしょう。しかし昨年、ボブ・ディランがノーベル文学賞を受賞したことをきっかけに、謡の文学性について改めて注目が集まっています。そこで今年度は、文学、歴史学、言語学の立場から、文字に書かれ視覚を通して認識される詩と、音声として発せられ聴覚を通して認識される謡との関係性に目を配りつつ、詩とは何か、謡とは何かを改めて問い直し、それらの成り立ち、さらに人の思考とのつながりなどについて考えてみたいと思います。
平成30年度	「嘘」の人文学	嘘をつくことは、普通よくないこととされています。しかし、人々が楽しむフィクションの世界や政治的な発言の場などで、嘘が効果的に用いられていることも事実です。人はそれを嘘とわかって楽しむこともありますし、嘘に踊らされて思わぬ本心を吐露することもあります。そもそも、人間が言語を用いる生物である以上、誤認や伝達ミス、あるいは送り手と受け手の解釈のズレにともなって、あたかも誰かが嘘をついたかのような出来事がたまたま生じてしまう可能性は常にあります。真実はひょっとすると、嘘の裏側にあるのかもしれません。こうした観点から、たとえば人間を「嘘をつく動物」ととらえたとき、文化の営みはどのようなものに見えるでしょうか? もちろんこうした問いかけは、「ポスト・トゥルース」の時代とも言われる現代をよりよく知るための一助ともなります。この講座では、人文学の様々な現場から、「嘘」について改めて考えてみたいと思います。
令和元年度	「とき」の人文学	アウグスティヌス（354-430年）は『告白』の中で「ではいったい、時間とは何でしょうか」と問い、「私たちが会話のさい、時間ほど親しみ深く熟知のものとして言及するものは何もありません。それについて話すとき、たしかに私たちは理解しています。他人が話すのを聞くときも、たしかに私たちは理解しています」と述べますが、しかし「たずねられて説明しようと思うと、知らないのです」と続けます。たしかに、時間は身近なものですが、いざそれが何であるかと問われると、答えるのは容易ではありません。しかも、時代や社会が異なれば、「とき」の意識や感覚も違ってきます。「とき」について、人文学の諸分野でさまざまなアプローチが考えられますが、今回は次のようなテーマを取り上げます。「とき」を超えて過去の日本語の姿に迫るにはどうしたらよいでしょうか。自分の時間を紡ぐ行為である自伝を通じて見える現代中国の自己認識の変化とはどのようなものでしょうか。空間を対象とする地理学で「とき」はどのように研究されているのでしょうか。そして、19世紀前半から現在に至るまでのフランス文学で「時間」はどのように描かれてきたのでしょうか。知的なひとときをお楽しみいただければと思います。
令和3年度	病とこころ	昨年来我々を悩ませ続ける疫禍は、世界中の人々の身体、そして心を蝕んできました。感染症は罹患者の身体を冒したばかりではありません。防疫策としてのロックダウン・行動制限は、全ての人々の心に重くのしかかり、目に見えぬウィルスの拡大は、社会全体に不安と疑心暗鬼の雰囲気を蔓延させました。こうした現象に対して人類はどう対処してきたのでしょうか。私たちはどう向き合っていくべきなのでしょうか。たとえ今般の疫禍が終息しようとも、この問題は今後、私たちが常に向き合い続けねばならない問いとなるでしょう。 本年度の講義はこの問題に対して、多種多様な人文学諸分野の中でも西洋現代史、社会学、社会心理学、フランス文学、それぞれのアプローチで迫ってみたいと思います。現在、私たちが置かれた状況を俯瞰的に把握し、これからのことを皆さんとともに真摯に、多角的に考えてゆく、そうしたきっかけになればと願っています。

令和４年度	日常と非日常のはざま	2019年以降、世界中で猛威をふるった新型コロナウイルス感染症（COVID-19）について、まだまだ収束は見通せないものの、日々の暮らしのなかで徐々に「日常」を取り戻しつつあります。しかし、未知の感染症と、それに対する防疫策として行われたロックダウンや行動制限によってもたらされた「非日常」は、いまなお私たちの「日常」に影を落としています。 また2022年には、ロシアがウクライナへと侵攻し、ウクライナで暮らす人びとの「日常」がまたたくまに奪われていきました。ウクライナやウクライナから逃れた人びとは言うまでもなく、ロシアや他の国々で暮らす人びとにも、さまざまなかたちで戦争という「非日常」が「日常」のなかに浸潤しています。 本年度の講義はこうした「日常と非日常のはざま」に直面する状況に対して、それぞれのアプローチから迫ってみたいと思います。現在、私たちが置かれた状況を俯瞰的に把握し、これからのことを皆さんとともに真摯に、多角的に考えてゆく、そうしたきっかけになればと願っています。
令和５年度	人文学を解き放つ	今般、神戸大学人文学研究科では『人文学を解き放つ』(神戸大学出版会、2023年)を刊行いたしました。本書の内容は、学術エッセイです。それぞれの学問領域において一頭地を抜くエキスパートである38名の教員・元教員たちが、自分の研究とは何なのかを根本的につきつめながら、最前線の問題意識に基づいて執筆しています。 本書において「人文学」は、読者の前に「解き放」たれました。すでにお読みになられたかたは、どのような感想を持たれたでしょうか？そこに現われた「人文学」の姿は、まさに現実の社会問題への挑戦者であり、言葉と概念の創造者であり、古今東西のデータの分析者であり、虚偽不正なる存在への糾弾者であり、学問的真理への求道者でありました。ある意味このような「人文学」そのものが、自由な生命力に富んだ生き物であるとも言えるでしょう。そして今や「解き放」たれた「人文学」が、鳳凰のような翼をふるって無間にひろがる時空を駆けめぐれば、新たなる研究の足掛かりが生まれてゆき、まだ見ぬ世界への扉が開くかもしれません。 本講座では『人文学を解き放つ』の執筆者のなかから、4人に登場していただきます。「解き放」たれた「人文学」とは何なのかを、ともに考えてゆきましょう。

Ⅲ-2. 高大連携事業

文学部・人文学研究科では、高大連携事業として出前授業、模擬授業等を行っている。令和5年度に実施された出前授業、模擬授業等の概要は次のとおりである。

《令和5年度実施の出前授業・模擬授業等》

高校名	実施日	事業内容	
		事業内容	詳細
岡山県立津山高等学校	6 月 17 日	出前授業	大江健三郎「奇妙な仕事」を読む
兵庫県立長田高等学校	6 月 23 日	出前授業	「役に立つ学問とは？」――文学部と社会学という分野から
東洋大学附属姫路高等学校	7 月 8 日	出前授業	日本中世の戦争について考える
奈良県立郡山高等学校	10 月 25 日	その他	学部紹介
兵庫県立兵庫高等学校	11 月 7 日	授業見学	「人文学基礎・言語学」「グローバル人文学専門英語」「ドイツ文学特殊講義」
〃	〃	施設見学	人文科学図書館
神戸海星女子学院高等学校	11 月 16 日	出前授業	1000 年前へのタイムスリップ――漢詩の世界を体験しよう
兵庫県立西宮高等学校	11 月 29 日	出前授業	中国唐王朝の外交とプリンセス
兵庫県立御影高等学校	12 月 15 日	出前授業	空間の履歴をひもとく
和歌山県立桐蔭高等学校	3 月 15 日	出前授業	AI（人工知能）と SF（サイエンス・フィクション）について
兵庫県立御影高等学校	前期	その他	GS 人文地理

※ 出前授業：高校等へ本学教員を派遣し、授業を行うもの
模擬授業：「大学体験」として高校生の訪問を受け入れ、高校生向けの授業を行うもの
授業見学：大学で実施される通常授業を高校生が見学するもの
施設見学：研究室見学を含む
その他：上記以外のもの

掲載の表の最下段、兵庫県立御影高校との連携プロジェクトは、平成19年度から継続的に実施されている事業である。このプロジェクトでは、神戸大学文学部が高等学校地理歴史科教員免許取得希望者のために開講している「地歴科教育論」の一環として、兵庫県立御影高校総合人文コースの生徒たちがグループに分かれて「地域」をテーマとする課題研究（探究活動）に参加し、これを支援する取り組み（実習）を行っている。この取り組みは、国立大学の学部（大学院）と県立高校との個別的かつ継続的な連携としては、全国的に見ても貴重な実践例であり、大学生（院生）と大学教員が高校生の学習を支援・指導し、高校教員も教員をめざす大学生を指導するという、相互にメリットがある取り組みとして継続されてきた。

第３部

Ⅰ．外部評価

Ⅰ-1. 外部評価委員会

日　時：2024 年 10 月 30 日（水）15：00～16：30

場　所：人文学研究科 A 棟 1 階学生ホール

外部評価委員：谷口淳一（京都女子大学文学部教授）

人文学研究科：長坂一郎（2023 年度文学部長・人文学研究科長）、白鳥義彦（2023 年度評議員、2024 年度文学部長・人文学研究科長）、濱田麻矢（2023 年度副研究科長）、中畑寛之（2023 年度評価委員長、2024 年度評議員）、佐藤昇（2024 年度副研究科長）、古市晃（2023 年度大学院委員）、石山裕慈（2023 年度教務委員）、佐々木祐（2023 年度学生委員）、松本恵美（事務課長）、西田望智子（総務係長）

Ⅰ-2. 外部評価報告書

谷口淳一（京都女子大学文学部教授）

本報告書第１部・第２部の記載内容および10月30日に開催された外部評価委員会での情報・意見交換に基づいて報告する。

1. 教育（文学部）

神戸大学文学部は、伝統的な文学部にみられる学問領域と現代社会と直接関わることが多い学問領域の双方を含む講座によって構成されている。この組織構成は、「人文学を、古典を通して深く理解するとともに、社会的対話によりそれを実践して行く能力を身につけ、現代社会において活躍できる人材を育成することを目的としている」というディプロマポリシーにもとづく教育課程に適したものとなっている。また、このような教育方針に沿って、さまざまな取り組みがなされている。とくに、さまざまな学部・学科の科目を履修できる制度は、学生の視野を広げるうえで有意義な仕組みといえよう。また、海外協定校との単位互換制度も充実している。学生の海外派遣は新型コロナウィルス感染拡大の影響によって中断していたが、2022（令和 4）年度に再開してから派遣学生数は徐々に回復しており、今後の進展が期待される。そのほかにも、神戸オックスフォード日本学プログラムやグローバル人文学英語科目など、国際的な場で活躍できる学生の育成を目指した多様な取り組みが継続して実施されていることは特筆に値する。

卒業生の就職率については、2020（令和2）年度が81.8%であった以外は、2019（令和1）年度以降90%以上を維持している。また、学生による授業振り返りアンケートの結果も良好である。以上のような教育に対する取り組みが相応の成果をもたらしていると評価できよう。なお、ディプロマポリシーに示された能力修得の学生自己評価アンケートは卒業時に実施されているものの、集計結果の発表時期が遅いため年次報告書作成に間に合わず掲載されていないということである。次善の策として前年度のアンケート結果を掲載しておけば、ある程度参考になるのではないだろうか。

2. 教育（人文学研究科）

人文学研究科の教育についても、学部と同様に学際的な取り組みが大きな特徴と言える。1 名の学生に対して他専攻の１名を含む３名の指導教員チームが指導するという体制や研究科共通科目の設置、他研究科・大学の科目履修、交換留学、ダブルディグリー・プログラムなど、学生が専門性を高めるとともに幅広い視野を獲得し、研究の社会的意義を考えるための様々な取り組みは高く評価できる。海外における大学院生の研究発表、調査･実験の支援については、新型コロナウィルス感染拡大や円安の進行の影響で2020（令和2）年度以降は毎年５名以下にとどまっていたが、2024（令和6）年度は増加が見込まれるということであり、今後の回復が期待される。

授業評価と修了時の学生アンケート結果はいずれもおおむね良好であるが、「外国語運用・表現能力」については「身に付かなかった」という回答が十数%とやや多い点が気になるところである。また、修了生の就職率は2019（令和1）年度の87.0%から徐々に低下し、2023（令和5）年度は56.8%になっている。この減少傾向が報告書が述べるように一時的なものであるかどうかを判断するためにも、引き続き修了生の進路・就職の動向を注視していく必要があるだろう。

3. 研究

当学部・研究科に所属する教員の専門分野は、古典文献の分析が中心となる分野とフィールドワークを重視した研究を進める分野の双方に及んでいる。このような特徴を活かして、近年設立された人文学推進インスティテュートにおいては、異分野の教員が共同して学際的な研究活動に取り組む事業が複数実施されている。また、各研究分野の特徴に応じた地域連携や国際交流に寄与する取り組みも進められている。

所属教員の研究活動実績の年間総数は、直近5年間の平均で共著を含む日本語著書平均36.6冊(単著4.6冊)、外国語著書6.6冊(単著0.8冊)、査読付日本語論文12.6本、査読付外国語論文21.2本、その他(学会発表など)115.2件となっており、全体としてかなりの研究成果が生み出されていると言える。とくに、毎年10 点を超える査読付外国語論文が発表されていることは、「卓越した研究成果を世界へ発信する」という中期目標に沿った成果として高く評価されよう。

研究のための外部資金獲得については、直近5年間の科学研究費新規獲得数平均が17.4件と申請数の半分以下にとどまっているものの、獲得総数平均は56件である。また、科研費以外にも共同研究および受託研究もそれぞれ毎年数件を獲得しており、外部からの研究資金供給は維持されている。

研究支援の一環として特別研究制度(サバティカル制度)が設けられているものの、直近3年間は利用がなかった。利用を促進するための対策が望まれる。

4. 社会貢献

報告書には公開講座と高大連携事業のみが社会貢献として挙げられているが、実際には、外部資金による教育研究プログラム等の活動と部局内センター等の活動にも社会貢献と位置づけ得る事業が数多く含まれている。したがって、「教育研究活動の成果を広く社会に還元する」という中期目標へ向けて積極的かつ十分な取り組みがなされていると評価できる。

以上、各項目について改善を検討すべき点は存在するが、全体としては当学部・研究科の設置目的に沿った教育研究活動を推進するための組織と制度が整えられ、目標に向けたそれらの運用によって確かな成果が得られていると評価できる。また、毎年度詳細な年次報告書を作成したうえで外部評価を受け、改善につなげていくという本事業自体を高く評価したい。神戸大学文学部・大学院文学研究科のさらなる発展を期待する。